

ヤーナム経験者の悠仁 くん

4R1ES

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

獣狩りの夜を経験した悠仁くんが、狩人的な思考回路と行動で原作ブレイクします。あらゆる武器を使いこなす、メンタル鬼つよ悠仁くんになる予定。独自解釈を含みます。

※Bloodborneを知らなくても読めると思っています。

イカレてる奴といえ、Bloodborneの狩人様。

死ねば夢で目覚め、呪われた古都ヤーナム……悪夢で獣を狩り彷徨う。

pixivにも投稿しています。

目次

# 1	悪夢からの目覚め	1
# 2	呪霊狩りの始まり	8
# 3	呪術師入門	17
# 4	呪力の知覚	24
# 5	先輩と修行と	33
# 6	悪夢は巡る	44
# 7	協力者	51
# 8	途方	63
# 9	萌芽	73
# 9	Bloodborne 寄りネ	204
夕		87
# 10	誤算（交流会1）	92

# 11	忌避と容認（交流会2）	103
# 12	狩人の血	118
# 13	暗合	137
# 14	淀み（渋谷事変1）	153
# 15	月の香り（渋谷事変2）	162
# 16	前徴（渋谷事変3）	172
# 17	英雄（渋谷事変4）	179
# 18	死血花（渋谷事変5）	192
# 19	獣と人間（渋谷事変6）	204
# 20	赤子（渋谷事変7）	218

# 2 1	夜明け	232
# 2 2	愛する	242
# 2 2 . 5	ブラボネタ&武器・セリフ	242
まとめ	—	255
# 2 3	業と願い (死滅回游 1)	279
# 2 4	期待 (死滅回游 2)	295
# 2 5	醜い (死滅回游 3)	307

#1 悪夢からの目覚め

目が覚めた時、名前以外の記憶は曖昧だった。

洋画に出てくるような、木造の古い診療所。薬瓶が転がり、饅えた臭いの充満する病室。

寝台に横たわる自分の腕から延びる点滴の先に、黒ずんだ輸血瓶が繋がっているのに気が付いて、急いで針を引き抜いた。

気怠い体を引きずって階段を下りた先、出入り口の横の大きな影と、漂う鉄の臭い。何かが潰れる不快な音に気付いて足が止まった。

自分の足元から、腐った板の軋む音がする。こちらへ振り返るのは、自身より大きな狼の獣。

血濡れたそれが飛び掛かってくるのが見えても重い身体を動かさなくて、ただ「死ぬのか」と思っただけ目を閉じ――

目が覚めた。

大きな満月の浮かぶ空。古びた石畳と西洋の墓標が並ぶ、小さな屋敷の庭。辺り一面に咲く可憐な白い花。

先ほどの診療所での出来事は悪夢だったというように、穏やかな空気が気持ちをはらぎ落し着かせる。

ここは狩人の夢で、俺の「家」になると、屋敷にいた車椅子の老人、ゲールマンから教わった。

「今は何も分からないだろうが、難しく考えることはない。君は、ただ、獣を狩ればよい」直に慣れると、遠い目をする老人の言葉に従い、贈られた武器を手にとって歩き出す。柄が伸縮する獣狩りの斧は、初めて触れるはずなのに不思議と手に馴染んだ。

屋敷の外に並ぶ墓標に向かい、行き先を思い浮かべて祈りを捧げれば、墓から骸骨のように痩せ細った小人たちが現れる。その小さな使者たちに手を触れれば意識が遠のいた。

——さあ、獣狩りの夜を始めよう。

夢に微睡み、悪夢を彷徨う。死を繰り返す地獄が始まった。

人の姿を狩るのを躊躇した。

数の暴力を思い知った。

力に押し負けた。

物陰に潜んでいるのに気づけなかった。

毒を浴びる。

脳髓を吸われる。

発狂。

目覚めて、死んで、切って、潰されて——痛いという感覚が無くなった。

どこまで切られていいのか理解した。

どこを潰せばいいのか理解した。

腐臭の漂うなかでも、敵を嗅ぎ分けた。

人智を超えた存在を知覚した。

音も、空気の揺れすら感じるように、モノの動きがわかるようになった。

狩って、狩られて、狩り尽くして、解放されるはずの夜明けを迎えては、あの寝台で

目を覚ます。悪夢は終わらない。

今夜の狩りを終えて見慣れた夢に帰れば、美しい人形が悠仁を出迎える。

「間もなく夜明け……夜と夢の終わりですね。大樹の下で、ゲールマン様がお待ちのはずです」

背の高い彼女の顔を見上げ、無機質な瞳を見つめる。何度も繰り返したこのやり取りを、彼女は覚えていない。

「またね。人形ちゃん」

フードの付いたロングコートを揺らし、庭の柵の向こう、白い花畑に歩みを進めれば、車椅子に腰かけた老人がこちらを向く。

彼が話を始める前に、悠仁は小さな箱を取り出した。

「俺、ここに来る前のこと少し思い出したんだ」

目覚めた寝台の下に落ちていた、自分が持ち込んだと思しき唯一のもの。高校の百葉箱で見つけた死蟻の指を取り出して、顔の前に掲げる。

数え切れぬほど繰り返した悪夢の中で、今回、初めて見つけたものだった。

「これ使うとき、何か変わる気がすんだよね」

ゲールマンが緩慢に車椅子から立ち上がる。対峙するその姿に隙はなく、手には身の丈以上の大鎌——葬送の刃が握られていた。

「……狩人よ。私の介錯に身を任せるのか」

おそらく介錯は、狩人を悪夢から解放するための儀式。だが、自分はその儀式で解放されることはないらしい。

だから他の方法を探し、見つけた糸口。不気味な圧を放つ指を飲み込めば、蒙もを啓ひらかれるのは違う感覚。別の何かが身体を循環する。

獣狩りの斧を握り直し、昂たかぶる気持ちを抑えた。

「今回は任せない。俺の悪夢も、あんたの悪夢もここで終わらせる」

「そうか。では……ゲールマンの狩りを知るがいい」

悪夢に囚われた老人。自分も解放されたいはずなのに、迷い込んだ狩人を夜明けに導く、どこか諦めた目をした人。

戦うのは初めてだが、やはり彼は強かった。老いによる衰えを感じさせない程の、狩人としての技量と気迫。

助言者として数多の狩人を導いたゲールマンは、確かによい狩人だ。

振り抜いた斧に肉の食い込む感触が伝わり、身体に温もりが降り掛かった。

「すべて、長い夜の夢だったよ……」

「……よい目覚めを。ゲールマンさん」

白い花に沈む彼に狩人の礼をとって、傷を癒すために輸血液の入った注射器を左脚に刺した。

主人を亡くした花畑を進めば、獣の咆哮が響き渡った。赤い月を背にして空から降ってくるのは、痩せ細った体躯の大きな魔物。

手に握った武器を構えようとしたが、身体が硬直して動かなかった。抵抗もできないまま掴み上げられ、黒光る触手の蠢く顔を近づけられる。

悪夢の元凶たる、月の魔物が瞳もない穴の開いた顔で食い入る様に見つめっていると、悠仁の顔に刺青が浮かび上がった。

その瞳は紅く染まり、口元が弧を描く。

「気付いたか。お前の可愛い赤子は俺が貰ったぞ」

魔物の腕を手刀で切り落とし、着地した悠仁——宿儺は、笑いながら敵を見上げる。

「武器を^{おもちゃ}与え、力を付けさせ……手塩にかけて育てておったものなあ？ 抵抗する力も強かったが、いい器だ」

その言葉に^{なげ}嘆くように叫び声を上げた月の魔物に対して、宿儺は術式の構えをとる。

「育ての親だ。せめてひと想いに殺して……」

不意に宿儺の言葉が途切れ、自身の右手が喉元を掴んだ。

「人の獲物を横盗りすんな。帰れ」

「……オマエ、なんで動ける？」

「いや、俺の身体だし」

刺青が溶けるように消え、身体の主導権が悠仁に戻る。

琥珀色の瞳が、月の魔物を見据えた。

「待たせたな元凶。……獣狩りの夜を始めよう」

肉を裂き、白い花畑が血で染まった頃、虎杖悠仁の長い悪夢は終わった。

#2 呪霊狩りの始まり

少し蒸し暑さを感じるようになった6月の中頃、部活を終えた悠仁はグラウンドを横目に走っていた。

「あ、デカイの湧いてんじゃん！ 今夜狩ろうぜ」

大きな独り言を言う彼に、左手の甲に現れた口が言葉を返す。

「あれは雑魚だ。わざわざ出向かんでいい」

「でもさあ、宿儺が毎晩、匂いたつ血の酒を飲むじゃん？ 獣狩りして血の遺志を集めな

いと、あれ手に入らなくなるよ？」

数秒の沈黙の後、左手の口が再び動いた。

「……狩ってこい」

うぎ。と呟く宿儺を気にせず、笑った悠仁は病院へ向けてスピードを上げる。

その際、すれ違った呪術師らしき少年が声を掛けてきたのに宿儺は気付いたが、面倒なので黙っておいた。

いつも通り、買ってきた花や見舞いについての祖父の小言に、適当な相槌を打つ。

人を助けろだなんて、英雄キロウに掛けるような言葉だと、血塗れだと罵られた自分の手を見ながらぼんやりと考えた。

ふと、祖父の言葉が途切れたのに振り返る。

「……爺ちゃん？」

悠仁の呼びかけに、返る言葉はない。

話してる途中で寝るなんて、と思いたかったが、わかってしまった。……祖父が亡くなった。

人が死ぬところなんて、何度も見てきたはずなのに、涙が止まらない。

悲しいのか、寂しいのか。もしかすると、人のまま穏やかに生涯を終えた姿を見られて、嬉しいとすら思っているのかもしれない。

静かにベッドへ近付けば、自然と、祖父に向けて祈りの体勢をとっていた。

「いつてらっしゃい。……爺ちゃんの目覚めが、有意なものでありますように」

必要な書類の記入を済ませ、荷物を抱えて受付を離れる。

「……学校へ行く」

悠仁が呟けば、右の頬に宿儺の口が浮かび上がった。

「身内が死んだというのに、いつも通りか」

「死は目覚めを迎えるために必要なこと。……悲しむことはしても、ずっと嘆いてはいられない」

「薄情なことだ」

「そうかな？」

話しながら待合室を通り抜けたとき、廊下にいた少年に声を掛けられた。

「虎杖悠仁だな」

悠仁が右手で頬を隠して振り返れば、同じ年頃の黒髪の少年が、険しい顔をして立っていた。

「呪術高専の伏黒だ。話がある」

呪術……。確か、獣に似たあいつらは呪霊と呼ばれていて、呪術で狩りを行う者がいるのだったか。

以前聞いた宿儺の話から、彼が呪術関連の機関に所属しているのだと予測する。

組織立って行動する奴らにはロクなやつがいなかったと、思い出しただけで顔が歪みそうになるのを誤魔化して、伏黒と名乗る少年に向き直った。

「喪中なんだけど……。それに今日は行くところあるから、明日でもいい？」

出入り口を指差して歩き出せば、伏黒が慌ててついてくる。

「話を聞け。オマエが持つている呪物はとても危険なものだ。これが写真」

道路に出たところで、伏黒の取り出したスマホを見れば、宿儺の指の画像。所有者がいたのは知らなかった。

悠仁は少し気まづくなって、頭をかく。

「あーそれね……ごめん食べちゃった」

「……は？」

「どうにもできない状況でさ、食べたなら何とかなるかなって」

「いや、指食べて打開できる状況なんてねえだろ」

何言ってるんだこいつ。と言いたげな伏黒の顔は分かりやすい。

「冗談を聞いている暇はない。さっさと寄越せ」

眉間の皺を増やした伏黒に、悠仁は歩きながら箱を投げ渡す。

「いいけど空箱だよ？」

箱を受け取った伏黒が、悠仁の顔を凝視した。

呪いの気配は、箱ではなく悠仁から色濃く漂っている。

「オマエ、何者だ？」

「何者って……俺は狩人だと思ってるけど。あ、話長くなるならさ、学校での用事済ませ

てからでいい?」

「狩人? つて、待て!」

返事を待たずに走り出した悠仁に続いて、伏黒も走り出した。

月明かりに照らされた杉沢第三高校の校舎前に、二人の少年が立っていた。

屋上のフェンスからこちらを見下ろすのは、2対の目と3対の足をもつ太った爬虫類のような呪霊。

「今日はあの獣……呪霊? 狩るからさ、ちょっと待っててよ」

そう言つて背中に回した悠仁の手に、身の丈程の大剣——ルドウィークの聖剣が握られる。

刀身に施された細かな模様と、両手で肩に担いで持つ様子から、敵を叩き潰すための武器であると推測できた。

「その呪具……」

次々と浮かぶ疑問を一旦飲み込んで、伏黒は付いていくことを決めた。

校舎の4階まで上れば、暗い廊下の先から、ぺたぺたと足音を立てるギョロ目の呪霊

が歩いてくる。

悠仁がポケットから取り出したスローイングナイフを牽制で投げれば、吸い込まれるように呪霊の眉間に命中した。

よろめく呪霊の下に突っ込み、大剣を叩きつければ冷たい血の雨が降り掛かる。

呪霊に食い込んだ剣の柄を押し込むと、大剣の刀身——鞆を外し、引き抜いた両刃の剣で背後の呪霊を薙いだ。

狭い通路で武器を振るることには慣れているが、周りを壊せないとなると無駄に気を使う。

鞆は背中に担ぎ、空いた左手に獣狩りの短銃を持った悠仁は、屋上へ続く扉に向かった。

屋上に出れば正面から飛び込んでくる本命の呪霊を、悠仁は右へのステップで回避しながら斬りつける。

こちらを追って4本の腕を振り上げる敵の胸に、短銃の照準を合わせた。

攻撃のタイミングに合わせて水銀弾を撃ち込めば、呪霊は胴体を晒して硬直する。

無防備な腹へ、獣が爪を立てるように指を曲げた右手を叩き込めば、柔らかな内側を引きずり出せた。

匂い立つ香りに、悠仁の表情が緩む。狩人は血に酔うのだ。

「あ、普段着のまま返り血浴びちゃった……!」

恍惚こうこうとしていた意識を戻せば感じる伏黒以外の気配に、悠仁は短銃を向けて振り返る。

目隠しをした長身の男が、腕に紙袋を提げて立っていた。

「今、どういう状況?」

五条先生、と伏黒が呼ぶのを聞いて、悠仁は銃口を下げ装備を解除する。

無闇に敵対すると死を招く事は、身をもって知っていた。

「宿雛の指を食ったという自称狩人が、2級相当の呪霊を祓いました」

「なんて?」

報告を聞いてこちらに向き直り、歩み寄ってきた五条が目隠し越しに視線を合わせる。

「んー? 宿雛と……他にも何か混じってるね。なんだろ」

顔が近いので右を向いて逸らせば、左頬に宿雛の口が現れた。

「こいつは魔物の愛し子だ。呪術師には理解できん」

勝手に話し出した宿雛の口を、急いで手で押さえる。

「人がいる時は黙っとく約束だろ。酔っ払ってんのか?」

悠仁が咎めれば、頬を押さえた手の甲に再び口が現れた。

「まだ飲んでおらんわ」

そのまま言い合いを始める二人の様子を見て、五条がにやりと笑う。

「君が宿儺？ いやー、仲良しだね。……呪いの王も大した事ないな」

「え？ 宿儺って呪いの王なの？ 飲んだくれだと思ってた」

「殺すぞ小僧」

宿儺に気を取られた悠仁の額に、五条が指を伸ばす。

だが触れる直前に悠仁は後ろに飛び、五条の顔と胸の前にはスローイングナイフが止まっていた。

「何それチートじゃん！」

短銃を構えて立つ悠仁に、五条は両手を挙げる。

「ごめんごめん。気絶しても宿儺に乗っ取られないか確認したかったんだ」

いい動きだねー。と間延びした声で話す男は初めて会うタイプの人間だが、何となく腹が立つやつっているんだと、新しい発見をした。

「君、呪術師にならない？ ……死闘も、血を浴びるのも好きなら天職だよ」

祖父の納骨を終えた悠仁が自宅に戻ると、玄関の前に伏黒と五条が立っている。

「どうするか決まった？」

手を振りながら声をかけてくる五条の横を通り、扉の鍵を開けた。

「全ての宿儺を取り込んでから死ねてやつでしょ？ 宿儺を喰うのはいいけどさ

……」

悠仁は獣狩りの悪夢を思い出す。

言葉を交わした友が獣になり、自分の手で葬った。

共闘した狩人とは信念の違いから殺し合い、憧れた狩人には死を望まれる。

何度繰り返しても結末は変わらず、悪夢は終わらず……諦めかけたときに見つけた

宿儺^{希望}。

「俺は自死しない。恩人が殺されるのを黙って見ているつもりもない。だから……」

五条に向き直り、その顔を見据えれば、彼は不敵な笑みを浮かべる。

「殺したいなら掛かってこい。俺たちの狩りを教えてやる」

「いいね。その時がきたら殺してあげるよ。……僕、最強だから」

#3 呪術師入門

東京都立 呪術高等専門学校——呪術高专への山道を、悠仁、五条、伏黒の三人が歩いていて。

今の悠仁からは、返り血を浴びて笑う姿が想像できない。

あれは両面宿儺だったと言われたほうが、伏黒はまだ納得がいった。

談笑しながら前を歩く悠仁と五条の背中に、伏黒が珍獣を見る目を向ける。

「物騒なこと言い合っていた割に、平然としすぎじゃないですか？ 虎杖も普通に付いてくるし」

声を掛ければ、不思議そうな顔をした二人が振り向いた。

「恵は難しく考えすぎなんだよ。それはそれ。これはこれ！ ね、悠仁」

「そうだぞ伏黒。処刑と入学は別！」

いい笑顔で「死なないけど」と言い足す悠仁の後ろに、振り回される自分の姿が見えた伏黒は気が遠くなった。思考回路がイカレてる。

「その建物で学長と面談。下手打つと入学拒否られるから気張ってね」

歩きながら軽い口調で伝える五条に、悠仁が不満の声を上げる。

「えー。俺ちよつと常識忘れてんだけど、大丈夫かな?」

自覚あったのかと、二人のやり取りを見届けた伏黒は重い足取りで寮へ戻った。

悠仁たちが建物に入れば、サングラスを掛けた強面の男が人形に囲まれて座っている。

人形に可愛さがある分、その様子には恐怖を掻き立てられた。

「……その子が?」

五条を咎めていた男——夜蛾の意識が、悠仁に向けられる。

「虎杖悠仁です! よろしくおなしゃす!」

きつちり90度でお辞儀をする悠仁に、人形の輪から抜け出た夜蛾が問いかけた。

「君は、『宿儻を取り込んで死ぬつもりはない』と言ったそうだな」

顔を上げれば、サングラス越しに鋭い視線を向けられているのがわかる。

「……処刑する側にいる私が言うのも皮肉だが、受け入れたフリでもしたほうが楽に過ごせるとは思わなかったのか?」

突き放すような口調だが、敵意はない。

ただこちらの真意を探るような夜蛾の言葉に、悠仁の頬が緩んだ。

「思わない」

人は簡単に死ぬ。

自分も数え切れないほど死んだが……戦いの中で、死に時を選べたことなど一度もない。

「他人に支配される人生なんてゴメンだね」

……しかし、月の魔物に魅入られ、死へと逃げることもできない悪夢に囚われたからこそ、今の自分があるのも事実。

だからこそ――。

「生き様で後悔はしたくないでしょ？」

にっと笑った悠仁が見上げれば、夜蛾の口角もわずかに上がった。

「合格だ。ようこそ呪術高专へ」

一夜明けて、午後三時過ぎの原宿。

クレープとポップコーンを装備した悠仁たちの前に、明るい髪色の少女が仁王立ちしている。

身長では勝っているはずなのに、悠仁はなぜか見下ろされているような圧を感じた。

「釘崎野薔薇。喜べ男子、紅一点よ」

そう告げた彼女に睨まれつつ自己紹介を終えると、五条に東京観光と称して廃ビル前

に連れてこられる。……物騒（オモシロイ）な観光だ。

「野薔薇と悠仁の二人で、建物内の呪いを祓ってきてくれ。悠仁は返り血を浴びるの禁止ね」

急に始まる条件付きの实地試験。軽い口調の五条に反して、二人の気分は急降下した。

ビル内に入り、背中に回した悠仁の手に、二種の曲刀を重ねた大振りのナイフ——慈悲の刃が握られた。

重みを確かめるように右手で遊ばせれば、血を吸い、よく手入れされた刀身が赤黒く光る。

「便利じゃん。あんたの術式？」

ベルトの位置を調整し終わった釘崎が、倅うように金槌を振りながら話しかけた。

歩幅を合わせて歩く悠仁が、首を傾げながら聞き返す。

「術式？ 何それ」

「はあ？ まさかアンタ素人……」

静かに。

釘崎の言葉を遮り、自身の口元に指を当てた悠仁の表情が変わる。そのまま一步、釘崎の前に歩み出た。

重なっているナイフの柄をずらし、刀身を滑らせるようにして刃を離す。わずかな金属音を響かせて一対になった刃を下段に構えれば、天井を通り抜けて呪霊が降ってきた。

呪霊の振りかぶるカマキリのような腕を、鍛えられた隕鉄の刃が切り落とす。

返り血を浴びぬように下がるついでに、前足にも刃を入れれば、バランスを崩した図体が前方に傾いた。

両の刃に付けた血が馴染むようにすり合わせ、一本に戻した刀身を無防備な胴体に突き立てる。

全身に浴びる歓びよろこびには程遠いが、いくらかは甘美な血の香りを楽しめた。

廃ビルの前に腰掛けてある伏黒に、並んで座り込んだ五条が話しかける。

「悠仁はさ、イカレてるんだよね」

「知ってます」

食い気味の返答に、五条の言葉が詰まった。

「……まあ聞いて。悠仁の経歴を調べただけど、少なくとも宿儺の指を拾うまでは普通の学生だ。なのにあの戦闘技術。2カ月足らずで身に付けられると思う？ 『死ぬほ

ど努力した』なんて陳腐な言葉じゃ説明が付かない驚異だよ」

血の染みついた呪具を扱うことからして、呪いが無関係とは考え難い。行動は恐らくだが、血に執着する嫌いがある。

そして、宿儺の言っていた魔物の愛し子。

宿儺の呪力でも消せないほどの何かが憑いている？

「でもね、悠仁の性格は極めて善良」

「善良？ 血を浴びて笑ってましたけど……」

五条から視線を逸らす、伏黒の表情が曇った。

迷いのない動きで淡々と、あえて血を被るように立ち回る。

報告書にあった光景を思い出しているのだろう。

「恵は悠仁のこと警戒してるみたいだけど、こちらが手を出さなきゃ普通の男の子だ。

……心配しなくて大丈夫だよ」

納得のいかない表情の伏黒に苦笑しつつ、五条は三人のこれからに思いをはせた。

「お疲れサマンサー！ 二人ともどうだった？」

夕方の路地裏に、やけに明るい五条の声が響いた。

悠仁を横目に見た釘崎が、盛大に舌打ちをする。

「……術式も知らない素人のくせに、繊細な太刀筋だったのがムカつく」

「なんで?!」

釘崎のあまりの言いように、言い返すようにして口喧嘩を始めた悠仁は、どこにでもいる学生にしか見えない。

悠仁の性格は極めて善良。

五条の言葉を、伏黒は頭の中で反芻した。

「どつたの伏黒」

晩飯の行き先の話で二人と盛り上がっていた悠仁が、こちらを振り返る。

「別に」

適当に返事をした伏黒は、タクシーを拾いに向かう五条を追いかけながら、騒がしくなるだろう日常にため息をつく。

それでも、なぜか足取りは軽く感じた。

4 呪力の知覚

任務を終えた一年生三人が集まる寮の共有スペース。

そこには出来上がった鍋を前にして、沈んだ顔をする伏黒と釘崎がいた。

一人で鍋を食べ進めていた悠仁が、手を止めて二人を見る。

「二人ともどつたの？ 腑に落ちない顔して」

「腑はらわた抜いてたやつが腑に落ちないとか言うんじゃねえ」

「もつ鍋とか私らへの嫌がらせだろ！」

一言発すれば、返ってくるのは非難の嵐。

自分は怪我してないからと、買い出しから調理まで引き受けてくれた悠仁に感謝はしていたが、我慢はできなかつた。

まだ出会って二週間。戦闘面では見習う点が多いと認められている悠仁だが、日常生活では非常識ホンコツ。

後に二人は「返り血という言葉が可愛いものだと感じる日が来るとは思わなかつた」と語ることになる。

雨の降る中、一年生三人と補助監督の伊地知は、特級仮想怨霊の呪胎が現れた少年院で生存者の確認・救出任務を行うため、宿舎の扉前にいた。

「特級に相当する呪霊がいると予想されます」

沈んだ表情の伊地知が状況の説明を始める。

「特級と会敵したら逃げるか死ぬしかない。絶対に戦うなど念を押す伊地知の言葉を背に、宿舎の扉が閉じられた。

生得領域に入ると感じる、久しぶりに蒙もうが啓ひらかれる感覚。

悪夢の中にいるような、浮世離れた空気。

……居心地がいい。

悠仁はサーベルの柄頭に短刀を付けた両刃刀——落葉らくようを握り、二人に見えないところで笑みを浮かべた。

玉犬と連れ立って歩く伏黒の数歩先を、軽い足どりの悠仁が進む。

何度目かの分かれ道に出たところで悠仁が立ち止まり、両刃刀の柄を押し込んでサーベルと短刀の二本に分けた。

途端に今まで経験したことのない圧を感じて、伏黒の身体が硬直する。

眼だけを横に動かせば、顔に4本のラインが入った筋肉質の呪霊——特級呪霊がいた。

迷わず動いた悠仁が伏黒と釘崎を蹴り飛ばし、蹴った勢いのまま旋回して呪霊に切りかかる。

その様子を視界の端で捉えた伏黒が、蹴られた腰を押さえ、痛みで動くようになった身体を起こした。

自分達の立っていた場所を確認すれば、どこへ続くとも知れない穴が広がっている。

「こいつは俺が狩る。二人は先に戻ってくれ」

サーベルに付いた血を払いながら言う悠仁の向こうで、呪霊が下半身の繭まゆを引きちぎる。

悠仁を避けてこちらへ走ってきた呪霊だったが、背後から腹に腕を突き立てられ、その内側をさらけ出した。

自分と呪霊の血に濡れた悠仁が、何本目かの輸血液を脚に突き刺す。

だが呪力を受けた傷の治りは悪く、完全には塞がらない。

特異な攻撃はしてこないし、致命傷も負っていないが、徐々に傷が増えるのは鬱陶しかった。

呪霊も負傷してはいるが、治癒を使えるようになったのか、その傷は塞がりつつある。狩るのが先か、動けなくなるのが先か……。こんなにも死を間近に感じるのは久しぶりだ。

「……生身で呪力を受けるからそうなる」

高揚する悠仁の頬に宿讎の口が浮かび上がり、その気配に特級呪霊は動きを止めた。

呆れた声で助言を始めた宿讎に、悠仁は内心、首をかしげる。

悠仁の取り込んだ宿讎の指は、たった一本。

宿讎にとって失くしても惜しくはないが、狩人だった悠仁が何になるかには、少々興味があった。

助言するのは気まぐれ。……あと、悠仁だけが交換できる血の酒は惜しい。

「呪力の源は負の感情。溜め込んだ怒りや恐怖を解放しろ」

その言葉に、悪夢での出来事が走馬灯のように蘇る。

診療所に始まり、ヤーナム市街を抜けて、聖堂街。

辺境までもを渡り歩き、最後にたどり着くのは……慣れ親しんだ狩人の夢。

大樹の下でゲールマンと戦った時に感じた、元から身体の中に存在していたような何かの感覚。

宿讎の指を喰ったときに感じたあれは、呪力を知覚していたのだ。

右手に握った落葉に、あふれ出した呪力が纏わりつく。

悠仁はもう、夢を見ない。死んだら夢で目覚めることもない。

本当の死闘感に、今までにないほど集中できていた。

特級呪霊の弾き出した呪力を、前に飛び込んで躲す。

そのまま懐に滑り込み、落葉で切り上げた瞬間、斬撃は黒く閃いた。

「……動きたくない」

生得領域が消えた宿舍の壁にもたれて、宿儺の指を回収した悠仁が呟いた。

高揚感が消えると呪力も上手く出せなくなった上に、呪霊の呪力を受けた傷は塞がらないままだ。

「治してやろうか」

左手の甲に現れた宿儺の口が言葉を発する。……胡散臭いことこの上ない。

しかし、怪我をしたまま生活をするのも、悠仁には懸念があった。

「条件は？」

「代わっている間のことを忘れる」

それくらいは、短時間であれば問題ない。

だが宿儺は呪いの王で、挑んできた呪術師たちを塵殺した過去がある。野放しにしたら、周りも自分も殺される。

「……その間、人に重傷以上の傷を負わせないなら」

少し悩んでから答えた悠仁に、宿儺が意外そうに返す。

「傷つけるなどは言わんのだな」

「他人への行動を強制するとリスクが高そうだし」

その言葉に、理解が早いのはいいことだと宿儺が笑った。

「縛りだ。時間は5分としよう」

先に脱出をし、伊地知に応援要請を頼んで見送った伏黒と釘崎は、生得領域が閉じるのを確認した。

悠仁が特級呪霊を祓ったのか、別の要因か……。

緊張が走った二人の前に、血に濡れた悠仁が現れる。

伏黒に向けて何かを投げ渡した悠仁の顔には、刺青が浮かんでいた。

距離をとって掴んだものを確認すれば、両面宿儺の指。わざわざ回収させる意味が分

からない。

「……何が目的だ」

構えをとる伏黒たちに、宿儺は面倒くさそうに手を払う。

「お前らを殺すのは俺じゃない。……少し小僧の話しよう」

そう言つて語られたのは、五条でも見つけられなかった悠仁の強さの原因の一端——
死んで繰り返す獣狩りの悪夢。

死者の遺志を継ぎ、自らの獣性に抗う狩人たちの末路。

「小僧は情のある相手と殺し合ったときに、格段に強くなった。……時折言葉を交わしただけの相手でも、だ」

宿儺が嘘を語っている可能性はある。だが悠仁の武器の扱いや立ち回り、物音や気配への勘の良さを説明するには十分だった。

「獣を狩る獣が、呪いを祓う呪いになる。お前らは呪術師なのだから、何れ小僧と殺し合うだろう？ 器を育てるのも暇潰しだ。精々いい踏み台になれ」

伏黒と釘崎に向けられた宿儺の目が、時間だと言つて閉じられる。刺青が溶けるように消え、目を開けばいつもの悠仁に戻っていた。

目の前のもつ鍋をにらみながら、釘崎は今日の任務でのことを思い返す。自分らしくあるために必要なのは、物理的な力だけじゃない。

自分の意志を通せるぐらいに、気持ちも、立場も強くなる必要がある。

動くこともできなかつた自分への怒りを鎮めるために、目の前の鍋を食べることにした。

鍋を食べ進めていけば、悠仁が蹴つたことを謝ってくる。こつちは助けられたというのに、謝られると居心地が悪い。

「大丈夫よ。硝子さんに反転術式で直してもらったから」

逃げるときにできた怪我也、と苦々しく思いながら付け足すと、悠仁が不思議そうにこちらを見る。

「反転術式って何?」

釘崎が説明をすると、悠仁は口を開けて間抜け面になった。

話を聞けば、怪我を治してもらう代わりに宿儺と交代したらしい。

どうせ交代するなら、呪霊と戦うときから交代しとけと思つた。

鍋のシメに何を入れるかの話を始めたところで、部屋の襖ふすまが勢いよく開いた。

「悠仁が大変なことになつたって聞いたけど!」

珍しく焦つた様子の五条の登場に、見上げた三人の動きが止まる。

伊地知の連絡を受けて急いできたらしい五条も、仲良く鍋をつついている三人を見て動きが止まった。

静かになった空間に、合点がいった伏黒の音が響く。

「……あ、虎杖が血まみれだったので、伊地知さんが驚いてましたね」

再び訪れる静寂。

伊地知マジピンタと呟く五条を見送り、三人は鍋に向けて手を合わせた。

#5 先輩と修行と

悠仁の部屋の片隅には、水をはった古びた植木鉢——水盆が置かれている。

ゆるやかに波打つそれに近づけば、骸骨のような見た目の小人たちが、可愛らしい髪飾りをつけて現れた。

表情の分かりづらい使者たちであるが、先日、原宿で買った髪飾りをプレゼントしてからご機嫌である。

「輸血液と交換して。あと、血の酒も」

呪霊を倒して得た血の遺志を支払い、必要なものを手に入れる。酒は嗜好品だから、輸血液回復薬の何倍も高いのはどうかと思う。

悠仁は遺志の稼ぎ方について悩みながら、五条指定の訓練場へ向かった。

「悠仁ってさ、様式美にこだわるよね」

組み手を行っていた五条が、悠仁との距離をとった合間に口を開く。

「相手に隙ができたとして、武器の柄で殴るとか絶対やらないでしょ」

腑は抜くけど。と、五条が笑いながら物を掴む仕草をする。
様式美にこだわること。それは自分が獣ではなく狩人だと——人間だと証明するた
めのものである。

「俺は獣じゃないから……」

ためらいがちに答える悠仁に、五条は顔の前で手をひらひらと振って見せる。

「そういうの考えなくていいから。もつと自由にやろう」

無意識にかけている動きの制限が解ければ、悠仁は格段に強くなれる。

「そういうわけで、泥臭く殴り合うことから始めようか！ ……獣らしく」

五条との特訓が終わわり、呪力コントロールの課題を出された悠仁は、DVDの入った紙袋と呪骸を抱えてグラウンドに向かう。

伏黒と釘崎は二人で任務に就いていたので、グラウンドで合流した。

「何それキモ！」

出会って早々、釘崎が悠仁を見て叫ぶ。

悠仁が身体に巻いている呪骸。それは青白いカリフラワーに触手が生えたような、強
いて言えばタコやイカの亜種であった。

学長は疲れていたのだろう。

「可愛いと思うんだけど……」

「眼科に行つてこい」

目の問題ではなく、平然と身体に巻いている点もおかしいのだが、悠仁の影響で感覚の鈍つてきた二人に指摘できる者はいなかった。

「賑やかにやつてんじゃねえか。恵」

呪骸の話で盛り上がつていた一年生三人に、眼鏡をかけた女性から声がかかった。

振り返つた伏黒は、その女性——真希の後ろに二つの影を認めて、悠仁を羽交い絞めにする。

「あれはパンダ先輩だ！ 殴りかかるなよ」

悠仁には以前の任務中、伏黒が呼んだ白い玉犬を殴り飛ばした前科がある。

別行動後の出会い頭、ノコギリ刃のついた槍での薙ぎ払いによつて破壊された。

大型犬や狼が嫌いだとは聞いていたが、初見で殺しにかかるレベルとは思つていなかった。

許してはいないが、宿讎の話を聞いてからは強くも言えない。

「その節は大変申し訳ございませんでした！ パンダは大丈夫です！」

京都姉妹校交流会への参加を決めた一年生三人は、真希、狗巻、パンダによる近接戦

の特訓を受けている。

始めるにあたって、学長の呪骸と悠仁の美的感覚について言及したのだが、悠仁が「なっちゃん」と名付けているのを聞いて手遅れだと判断された。

休憩のため階段に腰かけた釘崎は、長物を扱う真希と素手の悠仁が渡り合っているのを眺める。

一見、競っているように見えて、悠仁には余裕があるように感じられた。

悠仁は全ての攻撃を避けているわけではない。急所を避け、ある程度は真希に打たせることで、自身の攻撃を確実に当てていた。

「肉を切らせて骨を断つてか。何やったら身に付くのよ」

休憩で近くに座った悠仁に、釘崎が問いかける。

「自然と身に付いたっていうか……死ぬほどやったから？」

質問を間違えた。これは言葉通りの意味だ。

「え？ どつたの？」

黙ったことを心配する悠仁に、立ち上がった釘崎が顎でグラウンドを指して答える。

「その身に付けたやつ教える」

俺、休憩なんだけど言いつつ、追ってくる悠仁を振り返る。

「あと、そういう冗談やめて」

いつもと違う釘崎の様子に、困惑しつつ悠仁は頷いた。

夕飯を終え、寮の部屋で映画を見ていた悠仁は、廊下を歩く微かな足音に気付いて意識をそちらに向ける。

部屋の前で足音が止まったのに振り返れば、五条がノックもなく部屋に入ってきた。

「出かけるよ悠仁」

五条の行動には慣れてきたので、特に驚くこともなくDVDの再生を止めて呪骸を置く。

「呪術戦の頂点『領域展開』について、教えてあげる」

そう言った五条にフードを掴まれたかと思えば、十秒後には森の中の湖の上にいた。

火山頭の呪霊が展開した溶岩地帯の領域を、五条の領域が塗り替える。

やはり領域自体は悪夢の感覚に似ている。

だが、焼き切れそうな熱も、無限に広がる世界も、先日入った領域とは明らかに異なるものだった。

完成された領域には、展開者に有利な環境が付与されるらしい。

領域「展開」と呼ばれているが、悠仁の感覚的には自分の世界に引き込む方に近かった。

領域を閉じた五条が、火山頭——漏瑚の頭を踏みつけて尋問を始める。

答えるつもりがないらしい呪霊を靴先で転がしていれば、五条の足元に花の杭が刺さった。

二人の警戒をすり抜けて起こった出来事に、悠仁の緊張が高まる。

草木の揺れる音の中に敵の気配を探そうとすれば、地面に刺さった杭を起点として花畑が広がった。

花と共に広がる甘い香りが警戒を解き、緊張も緩みそうになる。

それをこらえて、足元に伸びる気配に意識を戻し、悠仁は小炉の付いた巨大な金槌——爆発金槌を花の杭に振り下ろした。

着弾した小炉が爆発を起こし、花の杭が爆ぜる。悠仁に若干遅れて、頬を叩いた五条が漂っていた意識を戻した。

花の揺れる音に向けて金槌を振るえば、何かに掠る感触がある。

しかし、気配もなく通り過ぎたそれに、火山頭は持ち去られていた。

……ほぼ足音もなく、気配を消すのが上手い。

「ごめん先生、逃した！」

悠仁が振り返れば、どことなく楽しそうな顔をした五条が立っている。

楽しくなってきたね、と呟く五条に渋い顔をして、悠仁は現状の確認を行うことにした。

「この花畑、燃やしといた方がいい？」

足元に咲く花を触っていた悠仁が、五条を見上げる。

呪術で生み出された花畑は、発生時にのみ術が発動するようであるが、放っておくわけにもいかない。

「何するか心配だけどお願い」

その言葉とは裏腹に、五条は悠仁の行動を面白がって見ている。

悠仁が取り出したのは、金属製のジョウロのような胴体に、ポンプを取り付けた装置——火炎放射器だ。

久しく使用していない筒を伸ばしてレバーを引けば、高熱の火炎が放射される。

効率よく敵を屠^{ほぶ}ることに注力していた他の武器とは異なる様子に、五条も興味を示した。

「血を混ぜた触媒か。……どうかした？」

「……これをくれた人を思い出しただけ」

目の前に広がる熱に対して、炎に包まれ消えていく花に虚しさを感じる。

悪夢の初め、不安と恐怖に支配されていた頃の自分を、心配し気にかけてくれた友人。彼のことを思い出すから、なんとなく使われないようにしてたのか。

「いいプレゼントをする人だね」

「うん。いい人だったよ」

転入後の慌ただしさがなくなり、先輩たちの特訓とお遣いパシリにも慣れてきたころには8月になっていた。

五条との修行も、たまに勢いで殺されそうになるが順調だ。

輸血すれば怪我が治ると知られてからは加減がなくなったのだが、悠仁でなければトラウマで再起不能もありえる。

殺したいなら掛かってこいとは言ったが、この状況は予想外だった。

今日も先輩との特訓の合間に、悠仁は外のコンビニまで走ってお遣いをしていた。

アイスを買った悠仁が高専に戻ってくると、制服を肩に掛けた大柄な男と、ノースリーブの細身の女性が歩いてくる。

男から漂う血のにおいに、悠仁はコンビニの袋を植え込みに投げて構えた。

それに気が付いた男が、面白そうに悠仁を眺める。

「お前が虎杖か……いい構えだ」

女性——真依が道の端に寄つたのを確認して、東堂葵と名乗つた男が上着を後ろに放り、低く構える。

おそらく京都校の生徒だ。武器を使うのは得策ではないが、返答次第では殴るくらい許されるだろう。

「伏黒の血のにおいがする。……何しに来た」

「下見だ。最後の交流会で退屈したくないんでな」

にらみ合う二人がにじり寄り、足が砂音をたてたとき、遠くからパンダの呼ぶ声が聞こえた。

東堂に視線を合わせたまま、パンダの声に耳を傾ければ、戦うなど繰り返している。

近づいてきた大きな体にちらりと視線をやれば、頭に包帯を巻いた伏黒が背中に乗っていた。

「オマエら喧嘩すんなよ！」

「しゃけ」

パンダの後ろから出てきた狗巻が、悠仁と東堂の間に立つ。

二人が構えを解いたのを確認し、パンダは伏黒を背中から下ろした。

「悠仁は鼻がいいから、恵の血のにおいで殴りかかると思ってたな」

今度こそセーフ、と呟く。パンダが、出ていない汗をぬぐう。

邪魔が入ったことで東堂は興がさめたのか、上着を拾って帰り支度を始めていた。

「俺はこの後も予定がある。交流会でまた会おう」

東堂は悠仁に声をかけながら、上着についた土を払う。

それを肩にかけて歩き始めた東堂は、すぐに何かを思い出したように立ち止まり、悠仁に向き直った。

「そっこだ虎杖、どんな女が好みだ？」

脈絡のない質問に、悠仁の眉間にしわが寄る。

だが伏黒の無事を確認して落ち着きが戻っていた悠仁は、自分の記憶にある美しい姿を思い出した。

嘆きの祭壇に祈りを捧げる、美しい娘。

雪のように白い滑らかな肌、美しくも禍々しい翼、大きくつぶらな瞳——星の娘、エーブリエターズ。

「尻ケツと全長タツバのデカイ娘……かな」

「待て、そいつは人間か？」

なんとなく嫌な雰囲気を感じた伏黒が、悠仁に詰め寄る。

そんな伏黒の様子を気にも留めず、質問をした本人である東堂は目を見開いたあと、なぜか上を向いて涙を流した。

少しの間をおいて、涙をぬぐった東堂が悠仁の顔を見る。そして感動したように呟いた。

「……虎杖。どうやら俺たちは、『親友』のようだな」

なぜそうなる。東堂以外の5人に、同じ思いが生じた。

「おおか……」

呆れたような狗巻の声と、悠仁が親友認定された疑問を残して、京都校の二人は去っていった。

お遣いには失敗したので、あとで真希に怒られた。

#6 悪夢は巡る

一級呪術師、七海建人。

交流会を目前に控えた悠仁に、五条は彼を引き合わせた。

映画館で起こった事件の調査をする七海に、実地訓練と補佐を兼ねて悠仁が同行するらしい。

「ちよつと血の気が多い子だけど、実力は保証するから。あとよろしくー」
適当な紹介をする五条に対して、呆れた様子を見せる七海。どうやら気安い間柄らしい。

窓からの報告書と、七海の口頭での説明を受けながら、悠仁たちは現場の映画館へ向かった。

頭部の変形した三人の遺体が並んでいるのを前にして、悠仁に実験棟の記憶が蘇る。よみがえ

血の川に溢れた、微かに息遣いのする人々をかき分け進んだ先で見た光景。

劣悪な環境に閉じ込められ、異形となった罹患者りかんたちの嘆きと叫び声が――。

「聞いていますか？ 虎杖君」

「……え？」

七海の声によって、記憶に潜っていた意識が引き戻された。

「この呪力の残穢が見えますか？」

彼が指で示す床に視線をやれば、通路に向かって点々と不快な気配が残っている。

「あ、はい。通路に続いているやつ」

「よろしい。では行きましょう」

頷いて歩き出した七海の後を追いかけて、悠仁は頬を叩いて気合を入れ直した。

七海が五条から伝えられたのは、悠仁が両面宿儺の器であること。

他にも狩りだ獣だと色々と言っていたが、人柄や実力については自分の目で確かめることにする。

並んで階段を上る悠仁を横目に見れば、ダクトや遮蔽物の位置を確認しているのが見て取れる。そしてすぐに視線が合った。

非術師の家庭出身で、高専に転入してから2カ月と少し。

日本で普通に生活をしていれば、この身のこなしにはならないだろう。

そして、先ほどの遺体を見た時の彼の殺気……。とんでもない子を押し付けられたものだ。

五条のにやけ顔を思い出し、七海が舌打ちしそうになるのを堪えていけば、七海の顔を見上げた悠仁から問いが投げられた。

「監視カメラに映ってなかったなら、犯人は呪霊？」

「まあ、そうですね。被害者と別に映っていた少年がやった線は薄いでしょう」

呪詛師にしては、行動がお粗末すぎる。しかし呪術師^{我々}をおびき出すための演技の可能性も捨ててはいけない。

「ですが油断はしないように」

「押忍！ 気張ってこーぜ！」

悠仁が拳を握って屋上のドアに向かう。時折見せる年相応な態度に、七海は少し安堵しながら答えた。

「いえ。そこそこで済むならそこそこで」

子供である彼の前に出て、七海はドアノブに手を伸ばした。

屋上の扉を開き外に出れば、正面と、壁の後ろに呪霊——いや、座席にいた三人に似た気配がする。

悠仁の啓蒙が、元の人間だった姿を認識していた。

「コチラの呪霊は私が片付けます。虎杖君はそちらの……」

七海の言葉を遮り、悠仁がスマホを取り出して写真を撮った。

訝しむ七海に「呪霊の」映った画面を見せれば、サングラスの奥の目を見開く。悪夢は巡り、そして終わらないものらしい。

この術者を探さねばならない。……狩りを全うするために。

家人からの報告を聞き終え、拠点の壁に貼られた地図に伊地知が新しい情報を書き込む。

その様子を眺めながら、考え込んでいた七海が口を開いた。

「これである程度、敵のアジトが絞られました」

「ある程度……?」

机に座り、同じように地図を見ていた悠仁が怪訝な顔で聞き返す。

「ええ。私は調査を続けますので、虎杖君には別の仕事を」

沈黙が訪れた空間に、壁際に立った伊地知は居心地の悪さを覚える。

カサリと音を立て、手元にある吉野順平の資料に視線を落とした悠仁が、少しの間を置いて七海に向き直った。

「……わかった。俺が行った方が、相手も警戒しないってことね」

「そういうことです。伊地知君と二人で、吉野順平の調査をお願いします」

「そうだ虎杖君」

伊地知と話しながら、連れ立って部屋を後にする悠仁に、七海が声を掛ける。

「これはそこそこでは済みそうにない。気張っていきましよう」

その言葉に振り返った悠仁が、にっと笑った。

「応！ 七海先生に、血の加護がありますように！」

「呪われた気分です」

午後4時を回っても日差しの強さが残る道を、吉野順平は真人との会話を思い出しながら歩いていった。

母以外にも、自分を肯定する者がいる。

そう考えるだけで、胸が軽くなるような気がした。

「ストオーツプ！」

自宅のある区画まで帰ってきたところで、聞こえた大声に振り返る。

目の前に飛び込んだできたのは、最近見えるようになった小さな呪霊と、赤いフードの付いた学ランを着た少年だった。

聞きたいことがあるという先ほどの少年——悠仁に誘われて、自宅近くにある河川敷

の階段に座る。

真人が言っていたうずまきのボタンを見て、ついてくることにしたが、悠仁は自分の苦手そうなタイプだ。

隣に座った悠仁は少し考える素振りを見せたあと、こちらを向いて映画館のことを聞いてきた。

「なんか見なかった？　こういうキモイのとか」

悠仁が呪霊を指さすのを見て、一瞬、真人の顔が過ぎる。

「いや、見てないよ」

声は震えていない。だが、こちらを見る悠仁の目が、すべてを見透かしているような気がして冷汗がでる。

「そういうのハッキリ見えるようになったの、最近なんだ」

「そっか……。じゃあもう聞くことねえや！」

明るい雰囲気に戻った悠仁に、知らずに詰めていた息を吐きだす。

呪術師は人間のはずだが、悠仁からはどこか真人に似た気配を感じた。

最初は緊張して話していた順平だったが、同じ映画を見ていたことが分かると表情が緩む。

スプラッタ映画のグロ描写について、悠仁の評価が異常に辛口なのは謎だが、面白い

と思った場面は大体が一致していて、話すのが楽しかった。

随分と日が傾くころまで話し込んでしまい、今度一緒に映画を見に行く約束をしたため、連絡先を交換する。

互いの名前が画面に表示されたのを確認していると、地面が揺れた。

地震情報が届かないことを不思議に思いながら、悠仁に声を掛けるために順平は顔を上げる。

そこには険しい顔をして橋を見上げる悠仁がいた。

「ごめん順平。……急ぎの用事ができた」

自分も橋を見上げたが何もなく、悠仁はまた連絡すると言って走り出していた。

急に置いて行かれて驚きに固まっていると、堤防を歩いてきた母に声を掛けられる。今朝から続いていた非日常的な出来事も、母がいれば何でもない日常に感じられた。

#7 協力者

悪夢の中——ヤーナムの街に溢れる棺には、幾重にも鎖が巻かれ、大きな錠が掛けられていた。

あれは中のものを出さないための処置だと思っていたが、外から暴かせないためなのかもしれない。

上位者の墓を暴き、獣の病という呪いを招いた冒読者の末裔らしい風習だ。

呪いを呼ぶからこそ、墓暴きは許されざる行為。それなのに……悪夢から目覚めても死体を弄ぶ^{もてあそ}冒読者がいる。

橋の上に見えた影を追ってきたが、距離があつたために見失ってしまった。術式の効果なのか、死臭はしない。

堤防沿いに姿がないのを確認して、住宅街に足を向ければ、悠仁の右頬に宿讎の口が現れた。

「何時、何処へ行こうと、好奇を満たしたがる者は変わらん」

他人の体を操る。あの術式を作り上げるために、いくつの死体を使い潰したのか。も

しくは……いくつの死体を積み上げたのか。

そして、映画館での事件を起こした呪霊の術式。

「人体の改造も死体の操縦も、呪術探究の点では素晴らしい所業だと思うよ」

非術師が呪力を持つように肉体を改造する。

五体が残っているかは別として——術師の死体を操り戦わせる。

呪霊を祓う効率のみを重視すれば、どちらも有用と言えるだろう。

「ただ、俺にとつては許せない行為なだけだ」

「ああ。これまで通り、気に入らないなら殺せばいい」

呪いらしくていいじゃないか。

最後の言葉は飲み込み、愉快げに笑う宿儺につられるように、悠仁の口角が上がった。

橋の上にいた男を探し、わずかなにおいと足跡をたどって住宅街を進む。追跡への警戒が強いらしく、残された痕跡は異様に少ない。

視界に入るまで迫ったのは駅前に着いてからで、通りには帰宅を急ぐ人々の姿が増えていた。

何本か向こうの通り、信号を渡った先にある背中に目を向ける。

どうやって人の波から引き離すかに考えを巡らせたとき、すぐ傍の路地から強い視線

と殺気が自分に向けられるのを感じて、その方向に飛び込んだ。

「T字の柄がついた金属製の杖——どこか剣を模した意匠の施された仕込み杖の尖った先端が、うさぎ耳のカバーを着けたスマホを突き砕く。

そのスマホの持ち主、菜々子は、美々子と共に行動の確認をしていた夏油を追って現れた高専の生徒に先手を取ろうとして、難なくいなされたことに焦りを浮かべる。

呪力を流すどころか、捻出する前に媒体スマホを叩いて来た。しかも、相手は呪力を使っていない。

それに両目の横の傷、この顔——写真で見た両面宿儺の器だった。

「呪詛師ってやつ? ……あの肉体からだと術師、どっちの仲間だ」

菜々子の首に、蛇腹の刀身に変形させた杖を、美々子に古めかしいマスコット銃を突きつける少年は、確実に自分たちより強い。……それでも引けない。

あの術師の目的のために協力をすれば、夏油の肉体からだを返してもらおうことになっている。

だからそれまで殺させるわけにも、あいつの目的を邪魔させるわけにもいかない。

緊張で引きつる喉に力を入れて、菜々子は息を吸い込んだ。

「肉体からだに決まってるんだろ。必ず取り戻して、あの術師は引き? がして殺す」

美々子だけでも逃がそうと、術式の媒体を失った両手を握りしめる。なりふり構って

いられない。

だが葉々子が次の行動に移る前に、^{とむら} 弔いか、と呟いた悠仁が武器を取めた。

宿儺に煽^{あお}られ、術師への怒りで気が立っていた悠仁だが、二人の少女に水を差されたことで冷静さを取り戻していた。

呪詛師。それも死体が相手とはいえ、帳も下ろしていない街中で流血沙汰は起こせない。

そして今、学生の姿もまばらになったファミレスの一席に、とても友人には見えない、ピリついた雰囲気の男女三人が座っている。

そんな空気をお互いに発しながらも食事をとっているあたり、やはり呪術界に身を置くものなのだろう。

常々、非常識だと言われている悠仁でも、本来なら仕掛けてきた呪詛師を返り討ちにせず、ましてや一緒に食事をとることなどありえない。

今回はあの術師を見失ったため、事情を知っていそうな二人から情報を貰うためだ。所属が違うというだけで、目的の成就に必要な相手を排除するのは愚かである。

それに——目の前にいる二人の瞳が、悪夢で出会った血族狩りの彼と同じ色を宿しているのが気にかかったのだ。

殉教した師を弔うために協力者を募り奔走し、最期には狂氣的な敬愛を捧げた彼と同じ……ほの暗い意志を宿す瞳が。

術師に操られている肉体の持ち主——夏油があなつた経緯を聞く。

「殺す」ことだけが目的なら、居場所を高専にリークすればいいものだが、二人はできるだけ無傷で肉体を取り戻し、弔いたいらしい。

自覚はないだろうが、経緯を説明している間に、二人は思い出話もいくつか話していた。

出会ったときの張りつめた雰囲気と表情からして、今まで感傷に浸る時間もなかったのだろう。

頼るあてもなく、不確かな目標を目指し続けるのは苦しい。

だから期間や対価、条件次第では、悠仁は弔いのために協力するのも構わない。……自分に実害がなければだが。

「さつきから肉体を取り返すって言うけど、あいつの術式とか知ってるの?」

話しているうちに、幾分か和らいだ表情になった悠仁が、ハンバーグを切り分けながら黒髪の少女——美々に問いかける。

「術式は分からない。でも、術者の本体が憑依してる」

ストローをさしたグラスを強く握る美々子に続いて、金髪の少女——菜々子が口を開いた。

『夏油様の』からだ肉体が計画に必要なんだと

背もたれに身を預け、だるそうにしながら悪態をつく菜々子の姿に、悠仁が呆れた様子を見せる。

「お前さ、呪詛師なら隙見せて座んなよ」

そんな声を意に介さず、グラタンの皿を端に寄せた菜々子は、テーブルに肘をついて体勢をさらに崩した。

「今更、こんなところで殺さないっしょ？ 気を張るだけムダ」

「それは同感」

菜々子に続いて、美々子もテーブルに肘をついた。二人が顔を寄せ合い、変な顔をした悠仁を見てくすくすと笑い合う。

しがらみを忘れたような二人の様子に、悠仁の口角もわずかに上がった。

呪術師と呪詛師。これらは本来、手を取り合うなどありえない立場のものたちだ。

しかし悠仁は所属を替え、立場を変え……昨日の敵と手を取り合い、共に戦った相手と殺し合う狩人である。

自分と他者との関係は、敵か協力者か。狩人に仲間という感覚は馴染み薄いのかもし

れない。

だから、目的外で互いを助けることはしないし、裏切りという言葉も存在しない。

そんな悠仁と、菜々子と美々子の間に結ばれた縛りは4つ。

1. 菜々子と美々子が術師に協力する10月31日まで、悠仁は夏油の肉体^{からだ}を殺さないこと。(術師が仕掛けてきた場合については、この限りではない)

2. 菜々子と美々子は、悠仁に血の施しを行うこと。

3. 死体を操る術式と術師について、情報を集め、共有すること。

4. 伝える情報は偽らないこと。

呪術師も呪詛師も関係なく、情報を横流しすることは規制されていない。目的のために、利用できるものは全て使うものだ。

月が高く上り、静まった住宅街を、悠仁は順平の家へ向かって走る。

——スマホ弁償してくれたから教えとく。あんたが追ってる事件の呪霊、あの術師とつるんでるから。

別れ際の菜々子の言葉を聞いて、晩飯が済んだら拠点に戻るといふ伊地知との約束は破棄された。

ファミレスで電話を掛けたときの伊地知の様子から、七海が件の呪霊くたんと戦ったことは確信している。伊地知は言っていないが、七海は怪我をしているのだろう。

橋から悠仁と順平を見ていた術師が、順平の関わった呪霊と繋がっているなら、こちらが態勢を整える前に次の行動に移る。

狙うなら……この件で悠仁たちとも呪霊たちとも関わりのある人物——吉野順平。

目的地に近づけば、大きな呪物の気配を感じる。これは悠仁の中にあるものと同じ、両面宿儺の指だ。

走る速度を上げて柵を飛び越えれば、ガラス越しに指をつまみ上げている女性が見える。その女性の背後に湧いた呪霊に目掛けて、仕込み杖を投擲とうてきした。

自室で微睡まどろんでいた順平は、ガラスの割れる大きな音を聞いて飛び起きた。

一瞬、呆けた後、母がダイニングテーブルで寝ていたことに思い至り、急いで階段を下りる。

下りた先で目に飛び込んできたのは、予想通り散乱したガラスの破片と、テーブルの側で座り込む母。

そして、呪霊に棒状の武器を振るう呪術師の少年——虎杖悠仁だった。

順平が驚いている間にも、次々と湧いてくる呪霊が呪力も使わずに祓われる。

呪霊の呪力にあてられて気絶した母の肩を支えて数分が経つ頃には、呪霊が湧くのは収まっていた。

悠仁の呼んだ補助監督という女性に、母を預けて車を見送る。外傷はないが念のため、診察と経過観察のために入院をするらしい。

リビングに戻れば、悠仁がテーブルの横に立って待っていた。月明りはあるが、逆光になっていて表情はうかがえない。

「ツギハギ顔で、人間の形を変えることができる呪霊。知ってるよな？」

夕方に会った時とは違い、確信をもって聞いてくる硬い声に、誤魔化しは無意味だと理解できた。

「……知ってる」

「そいつがここに、これを置いていったんだ」

そう言っただけで見せられたのは、札の巻かれた指のミイラ。特級呪物、両面宿儺の指は呪霊を惹き寄せる。

それを置いていった真人の痕跡——残穢が残されているのを、自分でも確認することができた。

「順平はこの後どうする？」

宿儺の指をポケットにしまった悠仁が、ダイニングテーブルの椅子に腰かける。

角度が変わって見えるようになった表情は、映画に誘われた時と同じものだった。

「どうするって……?」

「オマエが何を思つて呪霊と関わつたかは知らん。でも相手が順平の母ちゃんを殺すつもりだったのは事実だ。……これ以上、呪霊と関わらないつて言うなら、俺が協力する。必ず祓つてやる」

彼が来なかつたら、母さんは確実に死んでいた。……自分が呪霊真人と関わつたばかりに、大切な人を巻き込んだ。

それを避けるなら、呪霊とは二度と関わらないようにすればいい。わざわざ危険を冒す必要はない。

「でも、もし、まだ関わる気があるなら……俺に協力してくれ。ただし、こっちは死ぬかもしれない」

——海だつて、他の水槽だつてある。好きに選びな。

学校に行きたくないと言つたとき、そう言つてくれた母の言葉に、自分は救われていた。自分に合う道を選べばいいと。

でも、あれは本当に選んでいたのであるか？

自分で選んで水槽を出たのか、居たくない水槽から離れたのか。

真人と関わるのは自分で選んだ。けどそれは——。

危険を避けて助かって、助けてくれた相手に感謝をする。それが大半の人間の生き方だ。

でも今、ここで選ばないなら、僕に選ぶ機会は二度とこない。

どんな状況でも、必ず逃げを選ぶことになる。……そんなの、もう耐えられないだろう。

僕が好きなの水槽を選ぶ。自分のやりたいこと、自分のやるべき道を選ぶ。

そうすれば……僕はどんな結果でも受け入れられる。

「……虎杖君に、協力するよ」

「そっか……。よろしく、順平」

記録——2018年9月

里桜高校での事件後 吉野凧 吉野順平の自宅から

仮想疾病呪霊が残したとみられる血痕と肉片が見つかる

両名は保護されており 命に別状はなし

前日 高専一年生 虎杖悠仁が両面宿儺の指（副左腕小指）を回収

その残穢に寄せられたとみられる

血に濡れ判別の付かない肉片を複数回収

明
鑑識の結果 凝固しない血液 黄変した背骨の破片 病の進行した臓器であると判

また すべて複数 別の人間のものであつた

実例のない病状であることから 一級以上の仮想疾病呪霊と断定

特級となることも加味し 調査を開始する

#8 途方

小さな携帯ランタンの灯りを揺らし、二つの影が地下の排水トンネルを進む。

昼にも通ったはずのトンネルは奥に入るほど息苦しく、重たい空気が漂っているように感じられた。

不安で足がもつれ、躓きつまずそうになっていた順平が、迷いなく前を進む悠仁の背中に目を向ける。

呪術師だと言った悠仁は先程のような戦いに……命を奪うことに慣れているのだろうか。

そう考えたときには声を掛けていた。

「虎杖君は、人を……殺したことがある？」

今、探している真人は、呪霊であつても見た目は人間。

質問の半分は、呪霊を祓うことに慣れた呪術師であつても、真人と対峙すれば戸惑いが生まれるのではないかという心配からでたもの。

「……ある」

もう半分は、呪術師が人を殺すことに、どんな言い訳をするのかという疑問——ある種の好奇心。

「それは、相手が悪い奴だったから？」

そして、真人と関わるきつかけとなった自分の復讐心——怒りという魂の代謝を肯定する言葉がでるのかという興味だった。

「いや。善悪なんてなかった」

「こちらを探るような順平からの質問に、前を歩いていた悠仁が足を止め、振り返る。「命を奪うことは全て、奪う側の利己的な行為。殺す理由を追及するなんて無意味だよ」初めて握った武器は、生き残るために仕方がないと、自分に言い訳をして振り下ろした。

でもすぐに中身のない言い訳も、善悪なんて不確かなものも思考からはじかれて、自分のためだけに振る舞うようになった。

道を塞いだものを、真実を隠すものを、思想を違えたものを——。

そして、殺したもののたちの無念を、恨みを、遺志を継ぐ狂気に囚われながら進む。

善悪なんて他人の物差しに左右されるなんて、狩人としての矜持が許さない。

自分の意思で行動し、自分の意志で生きる。

……だからこそ、血に酔わずにはいられない。

「俺は順平に殺したい相手がいると言われても、否定はできない。肯定もしない。けど……やるなら後悔はできないぞ」

全てを狩る中で、自分の行為が悪だと自覚したら、一度でも後悔をしたら……正気を保てなかったから。

瓦礫の散らばる開けた場所に、改造人間たちが集まっている。その様子を、順平は通路に立つ悠仁の後ろから覗き見た。

昼間は何も感じなかった彼らの姿が、今になって恐ろしく思えてくる。

震えそうな唇を手で押さえてから、順平は悠仁に話しかけた。

「虎杖君、彼らを人間に戻すには……」

「二度改造された人間は助からない」

順平の言葉に被せて返事をした悠仁が、通路から出て身の丈を超える大鎌——葬送の刃を握る。

自分を置いて歩き出した彼の背中に、立ち止まった順平は言葉を掛けることができなかった。

全体を見渡していた悠仁が、ゆっくりとした動作で一礼をとった。彼に似合わぬ仕草

だが、その動きは洗練されている。

そして、何かを祈るように呟いてから、力強く踏み込んだ。

彼の刃が振るわれる度に、知らない誰かの命が消える。

武器の形状も相まって、その姿は死神を連想させた。

目の前にある光景を、自分と笑い合った人物が生み出しているとは思いたくなかった。

一太刀で首を刈り取る姿に迷いはない。

彼は相手に同情しない代わりに、殺しを正当化する言い訳も考えないから。

自分が、復讐をしたいと考えた理由。

あいつらにされたことを許すつもりはないし、この憎しみを忘れることもない。

それでも、自分が悠仁のようになれるとは思えなかった。

人の姿でもない、他人すら殺せない自分が、憎くても関りを持った人間を殺すとうなるか。

きつと誰かと関わり、話をする度に、そのことを思い出しては後悔するようになる。

……答えは出た。

半端な覚悟も持てない自分には……人は殺せない。

葬送の刃を仕舞った悠仁が、一步引いてこちらを見る順平に向き直った。

自分を見る目に恐怖が宿る。悠仁はその人間らしさに安心して、順平に話しかけた。

「順平、『殺す』選択肢が取れるのは、別にいいことじゃないだろ？」

自分の問いに相手が頷いたのを確認して、言葉が続ける。

「殺すことが身近になると、命の価値が曖昧になって……気を抜けば、大切な人の価値まで分からなくなる」

誰かを殺し、遺志を継ぐほどに、自分が薄まる感覚。

今までの思想も、大切な人との思い出も、自分の名前すら思い出せなくなることへの不安が募る。

だから考えることをやめ、ただ目の前の獣を狩っていた自分に、焼き棄てられた街で獣を守る彼は何を思っていたのか。

——貴公は獣など狩っていない。あれは……やはり人だよ。貴公もいつか思い知る。そう言った彼の言葉は、ずっと後になって理解した。

あの時の思考を捨て、恐怖も抱かずに獣を狩る自分の姿こそ、彼の目には獣に映っていたのだろう。

「だから、誰かを大切に思う気持ちを忘れたくないなら……人だけでなく、呪霊も殺さないほうがいいんだろうな。……だってあれは、俺たちが産み落とした人の本質」

——知ってるかい？ 人は皆、獣なんだぜ……。

「目を逸らしたい負の感情。……飾らない人間そのものなんだから」

閑静な住宅街にある窓の割れた一軒家に、柔らかな朝日が差し込む。

ダイニングテーブルの側の床には、割れたガラスと肉片の浮かぶ血だまりが広がり、テーブルの上には不気味な死蝨の指が置かれていた。

両面宿儺の指を見据えるのは、それぞれ違う制服を着た少年二人。

この家の住人である吉野順平が指を拾い、床の惨状を作り出した虎杖悠仁がそれを受け取った。

床に色濃く残るおぞましい残穢を横目に、緊張の解けた順平が口を開く。

「虎杖君が作った痕跡を見て、母さんが襲われたと思っただけだ。……この惨状への動揺は本物だったから、疑われなくて助かったよ」

定期テストを終えた後ぐらいの気軽さで、真人とのやり取りの内容を話す順平に、悠仁が意外なものを見る目を向ける。

「学校で事件起こすつもりだったのも意外だけど、呪霊相手に芝居打とうとか、順平って思ったよりイカレてんのな」

「……それって褒めてる？」

「褒めてる」

異形にされ、助けられない相手だったとはいえ、人を殺して数刻も経たないうちに笑える悠仁にだけは言われたくない。

でも、そんな彼に笑いかけられて笑顔を返している自分も、相当にイカレてるのだと自覚はできた。

真人との会話を思い出す。

呪いを寄せる指を置いたのは、僕や母さんを恨む人間の仕業だと、息をするように吐かれた言葉に目が覚めた。

悪い人ではないと、頭の片隅に残っていたその思いが、完全に打ち砕かれた。

人の姿をしていても……彼は呪いなのだ。

呪術師の襲撃を受けて拠点を移動したのか、排水トンネルで真人の姿は見つけられなかった。

だが真人が宿儺の指を使い、自分たちに害をなそうとしていたなら、結果を確認しに来るのは明らかだ。

それを悠仁と待っていてもよかったが、住宅街での戦闘を避けるために選んだのが、真人に計画が上手くいっていると知らせること。

真人には復讐がしたいことを話していた。

だから母を呪うことで、自分が復讐を実行に移すように誘導したかったのなら、その筋書き通りの結果を用意する。

そうすれば、復讐に囚われた自分が学校に向かうのに合わせて、真人も様子を見に学校へ来るはずだ。

一番の問題だったのは、魂が見えるらしい真人を自分が騙せるかどうか。

正直に言つて、騙せるわけがない。あと呪霊に襲われた痕跡も必要になる。

それらを悠仁に相談したところ、予想以上に大変なものを床に撒かれて意識が飛びかけた。いや、たぶん飛んでいたと思う。

特に、最後に取り出した拷問の跡が残る頭蓋骨——呪詛溜まりから溢れたおぞましい呪力には本能的な恐怖を感じたため、順平の心配はすべて杞憂に終わった。

「今日は全校集会があつて体育館にみんな集まるから、教室棟のほうは気にしなくて大丈夫だよ」

学校へは分かれて向かうため、これからの行動についていくつか確認をとる。

危ないからどこかで待っていてもいいと言われたが、悠仁を一人で行かせる方が危険な気がするため断った。

「そういえば虎杖君。上司がいるつて言っていたけど、連絡しなくていいの?」

ふと気になったことを問えば、悠仁は目線を逸らして頬をかいた。

「……昨日から単独行動しすぎて鬼電入ってるから、電源切ってる」

「それって一番ダメなんじゃ……」

瓦礫の散らばる地下トンネルを、七海と、彼の呼び出しを受けた猪野が進む。

漂う血のにおいに、七海に頼られて内心浮かれていた猪野は一層気を引き締めた。

目的地には着いたが、物音ひとつしない。

七海に怪我を負わせた呪霊か、その呪霊が生み出した改造人間がいると予想していたが、残されているのは息絶えた異形たちのみだ。

「全員、首を一刀両断。こんなことできる呪術師、この辺りにいましたっけ？」

遺体を確認して振り返れば、七海はどこかに電話をかけている。

いつも冷静な姿しか見たことがないが、今日は苛立ちを隠せていなかった。

「心当たりはありますか。……また出ませんね」

「今回、引率してる一年ですか？」

質問をすれば、七海の携帯を握る手に力が入り、眉間にしわが寄る。

その様子を珍しいと思いつつ、猪野は会ったこともない後輩に早く出るよう念を送っ

た。

「ええ。昨日から連絡が……あ、もしもし虎杖君？」

電話越しに、二人が問答をかわしているのを見守る。七海表情から、後輩が何かやらかしていることを察した。

電話を切った七海が深くため息をつく。そして、サングラスを掛け直すと背中を向けて歩き出した。

「行きますよ猪野君。問題児に説教が必要です」

どうやら、とんでもない後輩ができたらしい。

七海に追従しながら、ため息をこらえた猪野が天を仰ぐ。

崩れかけの天井しか見えず、気分が重くなった。

#9 萌芽

里桜高校のグラウンドを、黒い服に身を包んだ一人の生徒——吉野順平が体育館に向かつて歩いている。

校舎の屋上には、その様子を眺める二人の男がいた。

「闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊みそぎ祓はらえ」

全身にツギハギのある男がそう唱えれば、上空に夜色の波紋が広がり、波が溢れるように学校全体を包んで落ちていった。

「宿讎の器、来ると思う？」

発せられた真人の問いに、帳の出来栄えを確認していた夏油が答える。

「私が確認したときには、二人で仲良く話していたよ」

「なら大丈夫かな。順平を利用して、虎杖悠仁に宿讎優位の『縛り』を科す」

「楽しそうに行動を予測だてている真人を、考えるように指を顎あごに当てた夏油が眺める。」

「……君の考えている絵図が描けるといいね」

煮え切らない返事をする夏油の態度に、真人の眉根が寄る。

「何か心配ごと?」

「いや。真人が気に掛ける必要はないよ。……それじゃ私はお暇いとまさせてもらう」
説明する気はないらしい夏油が、こちらに背中を向けて歩きだす。

その姿に興味をなくし、真人は体育館の扉を開く順平に目を向けた。

順平が体育館に入ってからしばらく経つが、何か騒ぎが起こった気配はない。
期待外れに思った真人が校舎から下りれば、体育館の扉が中から開いた。

「順平、ここまでできて怖気づいた? 手伝ってあげようか」

生徒たちを眠らせるだけに止めとどめたらしい順平に声を掛ければ、真つ直ぐにこちらの目を見てにらんでくる。

「真人さん……あなたは僕が祓います」

意外な反応。それに、昨日の別れ際の復讐に濁った瞳ではない。

自分の置かれている状況を理解したのか。

「気づいたんだ?」

力もない、愚かな子供だという予測がはずれた。

順平に、自分を欺あざむけるような技量はなかったはずだ。

何より、今朝の魂の揺らぎは本物だった。

態度と魂の動きが一致していたことで、会話の内容に嘘はないと判断した訳だが……魂の構造を理解していても、完全に嘘を見抜けるわけではないらしい。

「でも……そのほうが面白いかな」

順平が召還したクラゲの式神——おろつき澱月が真人へ触手を伸ばすが、難なく避けられる。

目覚めたばかりの術式。狙いは甘く、スピードも遅い。

真人にとっては躲かわすことも、このまま順平に触れるのも簡単なことだ。

計画に利用できないなら、生かしておく必要もない。

おもちゃ玩具としては物足りなかったが、自分の課題も発見できたし、偶然拾ったにしては上

出来かな。

そんな感想を抱きながら、真人が順平に手を伸ばす。

「相手との力関係も分からないなんて……。順平つて、君が馬鹿にしていた人間よりも

馬鹿だよね」

真人の手が肩に触れ、順平の表情が強ばる。

だが——捕食者が最も無防備になるのは、捕食の瞬間であることを忘れてはいけ
ない。

目前で銃声が響き、真人の腹全体に熱が広がる。思わず順平の肩に触れていた手が離れ、上半身のけ反った。

いつの間近づくいて来ていたのか、順平の隣には宿讎の器。虎杖悠仁が銃弾を放つたと思しき槍——銃槍を構えて立っている。

攻撃を受けるまで存在を感じなかった。

「虎杖君どうやって……」

真人以上に驚いた様子の順平が呟けば、青白い液体の残る薬瓶——使用者の存在を薄める青い秘薬を放り投げた悠仁が何でもないように答える。

「ずっと隣にいた」

その言葉と共に、悠仁の拳が無防備な真人の腹を貫いた。

何かが引きずり出されるのに合わせて、少年二人に冷たい血が降り注ぐ。

呪霊にとって、負傷することは大した問題ではない。

呪力を込めるだけで傷は治るし、そもそも真人の場合は魂の形を保っているため、傷を負うという概念がない。

だが……。

真人の口端を流れた血が、手の甲で乱雑に拭ぬぐわれた。

形はすぐに戻るが、傷を受けた腹には元通りとはいかない不快感が残っている。

魂の形ごと叩かれたのは想定外。

そして、計画に組み込みみたい相手が天敵になり得るのも厄介だ。

「お前、魂の輪郭を知覚しているのか」

距離をとった真人のその問いに、槍先を向けて順平の前にでた悠仁が答える。

「知覚……？ 見えるなら殴れるし、血が出るなら殺せるだけだろ」

真人が順平を捉えかける度に、悠仁の槍が間に割って入り、散弾が放たれ、距離をとらせる。

それを繰り返すことに付いてくるべきではなかったと、順平は今になって後悔し始めた。

ここで退こうにも、悠仁の間合いから出れば、自分には真人の攻撃に耐える手段がない。

完全に足手まといだ。

「順平はさ、なんで戦ってんの？」

「え？」

真人が離れた合間に聞こえた悠仁の言葉に、思いがけず気の抜けた返事を返してしまった。

「ツギハギに勝てないって、わかってたのに来ただろ。なんで？」

なんで。

自分がこんなことになっていられるのも、母さんを危険にさらしたのも自分の責任だ。だから、自分の手で真人を祓いたい。

……違う。そんな下らない正義感は理由じゃない。

本当に祓きたいなら、悠仁だけに任せただ方が確実性が高い。それはわかっていた。それでも心配だとか理由をつけて、自分が付いてきたのは単純に――。

「あのツギハギが気に入らないから、だよ」

「だよな」

笑みと共に返ってきた声音は、とても満足そうだった。

悠仁が銃槍を下げるタイミングに合わせて、澱月の棘が真人を狙う。

しかし澱月の攻撃では、真人に傷を与えるには威力不足だ。

順平のそばを離れて攻撃に集中することもできず、守る戦いを知らない悠仁では、この状況を打開できずにいた。

そのまま戦況が膠着（じょうちやく）しかけたとき、真人が掲げた左腕を銃槍が貫いた。

避けられたはずの刺突。嫌な予感に悠仁が銃槍を引き抜こうとすれば、案の定、固定されていて動かせない。

急いで獣狩りの短銃を取り出し、銃槍の刺さった左腕に狙いを定める。

引き金に指を掛けたとき、真人の身体で死角になっていた右腕が目に入った。

三本に分かれた右腕が、蛇腹状の刃となつて鞭のようにしなり、襲い来る。

直撃するのはまずいが、あの長さで可動域なら攻撃範囲は広くない。

水銀弾を打ち込んで銃槍を引き抜き、前方に躲かせば当たらない。

だが——悠仁が避ければ、順平に直撃する。

「屈め！」

順平に向けて叫んでから、短銃の狙いを変えて下段の腕を打ち抜く。

幸い強度は高くなかつたらしく、一発で吹き飛んだ。

次のリロードは間に合わないため、短銃を顔の横に立てて衝撃に備える。頭さえ守れ

ば致命傷にはならない。

続いて銃槍を放した右手で中段の攻撃を掴もうとしたとき、目の前に滑り込んだ影が

真人の腕をはじいた。

「七海先生！」

七海の斬撃を受けて宙を舞つた銃槍を掴む。

呼びかけた背中からは前を向いたままだが、顔を見なくても怒りが溢れているのを感じ取

れた。

「虎杖君。そちらの吉野君も、あとで説教です。現状報告を」

「吉野順平と協力中デス。学校の人たちは全員、体育館で寝てマス……」

こわばった声で返事をすれば、七海が一つ頷く。

それから後ろで待機していた猪野に、順平をつれて体育館へ行くよう指示を出した。

順平たちが体育館へ走っていくのを目の端に捉えつつ、七海は相手の出方をうかがう。

軽口をたたいていた真人の口から、血がひと筋垂れた。

「虎杖君、あの口元の血は？」

「さつき俺がモツ……腹を殴った」

「奴の手に触れましたか？」

「槍で間合いとってたから触れてない」

吉野順平を連れながら、その立ち回りができたなら上々。

しかも、奴に有効な攻撃手段を持っている。

「私の攻撃は、奴に効きません」

「え？」

「しかし動きは止められます。お互いが作った隙に、攻撃を畳み掛けていきましょう。

……」ここで確実に被います」

元気のいい返事に緩みかけた頬を引き締め、七海は相手に狙いを定めた。

七海の攻撃の合間を縫って突き刺さる槍が、徐々に真人へのダメージを蓄積させる。

宿讎の器は術師として未成熟と、そう言っていたのは誰だったか。

枷くわさえいなければ、一級呪術師と並んでも遜色ないではないか。

おどけた顔をする夏油を頭から追い払いつつ、真人は追い詰められる新鮮な感覚を味わう。

傷が増えるほどに湧き出てくるのは、明確な“死”のイメージだ。

この場を切り抜けるのに何を捨て、何をすべきか……。

暫しばしの遯しゅんじゅん巡しゅんじゅんの後にたどり着く。原型の掌で魂に触れる、その概念を捨てること。自

分の術式の可能性を拡げる。

今ならできる。

——領域展開 自閉円頓裏

「今はただ、君たち^{てのひら}に感謝を」

掌の上に乗せた二人の動きが止まった。

反撃の素振りはない。領域展開を会得していないなら好都合。

まずは虎杖悠仁だ。あいつの魂を痛めつけければ、宿讎を抑えることもできなくなるだ

ろう。

だが——その魂に触れようとした途端、目の前の景色が変わった。

巨大な赤い月に照らされ、薄赤く色づいた花畑の中に、呪術師二人と両面宿儺が立っている。

宿儺には似つかわしくない、妖しくも穏やかな領域。

呪術師たちの顔を見ても、彼らの仕業ではないことが確認できただけだった。

各々が硬直するなか、つまらなそうに立っていた宿儺が、真人を見て口を開いた。

「お前は腑抜けた小僧にはいい刺激になった。魂に触れたことも一度は許す。……俺は、な」

風もないのに、足元の可憐な花が揺れる。地鳴りだ。

「だが……過保護な親月の魔物は違うらしい」

宿儺の言葉が終われば、真人の上に大きな影が落ちた。

瘦せた体軀。穴だけの開いた、顔とも呼べない相貌に、触手の蠢うごめく頭。

呪霊……ではない。これは何だ？

理解の追い付かないものの乱入に、思考が一瞬止まる。

そんな状態が見逃されるはずもなく、月の魔物の爪が突き刺された。

目の前でツギハギの呪霊が膝をついた。

急速に変わる事態に固まりかけた頭を回し、七海は走り出す。

膨張する敵の身体に呪力を叩きこめば、中身がなく、風船のように弾け飛んだ。

その場に何も残っていないのを確認して、周囲に視線を走らせる。

「虎杖君、追いますよー！」

悠仁に声を掛け、排水溝に入り込む敵に武器を振り下ろすが、手ごたえがない。

逃したことに舌打ちをして、猪野に連絡をとる。

三人で手分けすれば、追いつけるかもしれない。祓うなら今だ。

「三手に分かれて虱潰しに……聞いていますか？」

さつきから返事をしない悠仁を振り返れば、包帯の巻かれた薬瓶を握りしめて蹲うずくまっ

ている。

怪我でもしたのかと、具合を見るために近づけば、呟いていた言葉が聞き取れた。

「継いでいた……。夢じゃない」

悠仁が手に握る瓶のふたを開くと、濃い鉄の臭いが広がる。

血のようなそれを慌てて掴み、口へ運ぶのを止めさせれば、糸が切れたように悠仁が

倒れた。

高専にある休憩スペースにて、足を机に投げ出した五条と、英字新聞を開いた七海がはす向かいでソファに座っている。

「それで？ 宿儺が『月の魔物』って言ったの？」

姿勢を正した五条が問いかければ、七海も新聞から顔を上げた。

「ええ。それに虎杖君に対して友好的というか……庇護するようでしたね」

呪霊ではない。存在も行動も不可解なものの情報について、五条は記憶をたどるが、めぼしいものはない。

月の魔物についてはゆくゆく調べるとして、別の問題から片付けることにした。

「悠仁が持っていた薬瓶は？」

「家入さんに処分してもらいました。上に知られると厄介ですので」

悠仁が怪我を治す際に使っている輸血液ぐらいなら、血を術式の媒体とする者もいるため、見つかったても大した問題にはならない。

だが、製法不明のあの薬品は問題ありだ。もう片方は人血だったが、おいの濃さが普通ではない。

何に使うものかは、本人に確認しないといけないな。

「お前に任せてよかったよ。……順平の家にあった残穢は？」

「異様なほどの呪詛溜まりでしたね。血痕については、別の場所で襲われた複数人のも

のとしか」

「そっか……。なーんか上手く出来すぎてる気がするよね」

順平と母親が家を離れている間に現れた呪霊。

誰かが指示を出したようなタイミングで現れ、破壊行動をとるでもなく、痕跡だけを残している。

考えに沈もうとした五条の耳に、駆け寄ってくる足音が届いた。

「七海先生ー！ あ、五条先生も。おはようございますー！」

調子が戻ったららしい悠仁が、手を振りながら走ってくる。扱いが違う気がしたのは、考えないことにした。

「おはようございます。虎杖君。言い忘れていましたが、私は教職ではないので先生は不要です」

「じゃあナナミン！」

「ひっぱたきますよっ！」

短いやり取りの中からも、今回、お堅い後輩が生徒に振り回されていたのが分かり、笑いそうになる。

まあ、やったことは笑えないのだが。

「悠仁、何か用事があったんじゃない？」

雑談に加わるのをやめて問いかけたが、悠仁からの返事はない。

「聞いてるっ。」

もう一度声を掛ければ、七海の新聞を凝視していた悠仁が振り向いた。

同じ記事に目を通せば、欧州で火山灰に埋もれた街が見つかったというもの。

写真には、凝ったレリーフと出土したらしい杯さかずきが写っている。

悠仁が腕を背中に回し、掴んだものを前に出す。そこには写真と同じ杯があった。

「悪夢みたいな話、聞いてくれますか」

踏み込めなかった彼の秘密が明かされる予感に、自然と笑みがこぼれた。

#9. 5 Bloodborne 寄りネタ

■寮に案内されたところ。水盆の使者ネタ。

五条「それ、植木鉢？」

悠仁「水盆。持ってくるときに水抜いたから、みんな怒ってるかなー？」

水盆を水で満たすと、宿儺の封印札で着飾った使者がでてくる。

五条「何これ地獄絵図じゃん。……呪霊ではないのか」

悠仁「呪霊を倒した数と強さに比例して、アイテム交換してくれるよ。先生に投げたナイフとか」

五条「あのギザ刃のナイフ、装飾が凝ってたよね」

悠仁「あれ装飾のどこ脆いからさ、刺さると折れて、刃が抜けなくなんの」

五条「陰湿だなー」

「宿儺のリボン」

なぜか使者のつける両面宿儺の封印札

染みついた特級呪物の残穢、それが次の悲劇を生むのだろうか

宿儺 「アイテム名やめろ」

宿儺先生の！ 脳筋^{バカ}でもわかる呪霊の等級

(※平地で1対1の戦闘と仮定する)

・ 4級

カラス。雑魚。囲まれると死ぬ。

・ 3級

群衆。ほぼ雑魚。囲まれると死ぬ。

・ 2級 (準2級)

巨人。舐めてると死ぬ。

・ 1級 (準1級)

狩人。死ぬときは死ぬ。

・ 特級

ボス。だいたい死ぬ。呪術を覚えて出直せ。

悠仁 「全部死ぬじゃん！」

■ 連盟員のナナミン

五条「脱サラ(？) 連盟員の七海君でーす」

七海「その言い方やめてください」

五条「連盟員つて変なやつ多いけど、コイツは予防の狩人やつてただけあつて徹底してるんだよね」

悠仁「なんで初めから連盟員にならなかつたんすか？」

七海「私がビルゲンワースで学び、気づいたことは……探求はクソということです」

悠仁「え？」

七海「そして医療教会に転籍し、気づいたことは……血の医療はクソということですよ」

悠仁「だろうね！」

七海「全部クソなら虫でも潰そう。連盟員になった理由なんてそんなもんです。……私はまだ君を同士とは認めていません。まずは『虫』を潰し、汚物塗れの人の世を知ること尽力してください」

悠仁（俺、連盟員じゃないんだけど……）

■狩人の常識

釘崎「壁ドン」

悠仁「壁から獣がドンッ！」

釘崎「MK5」

悠仁「マジで喰われる5秒前」

釘崎「デコっん」

悠仁「発狂」

釘崎「椅子クル」

悠仁「シヨットガン爺ジジイ」

釘崎「腕グイ」

悠仁「地底へようこそ！」

伏黒「なんの話してんだ？」

■メンシス学派の宿儺さん

屋上にて、宿儺が受肉。

宿儺「女も子供も、蛆のように沸いている。Majestic!素暗らしい」

伏黒（最悪だ！ 最悪の方が一が……あれ？ 今、英語だったか？）

宿儺「しかし、あれがないと落ち着かん。……ああ、丁度良いのがあるではないか」

◆ ◆ ◆

五条「今、どういう状況？ あの鳥かご被ってるの誰？」

伏黒「受肉した両面宿儺です。鳥かごは屋上のフェンスでDIYしました」
五条「……もう一回言って？」

■#8の、排水トンネルで改造人間と戦うところ（Bloodborneだったら）
通路から、改造人間たちの視界に入らないように隠れて様子をうかがう。

順平「あの、虎杖君……」

悠仁「ん？」

順平「さっきから投げてるの、何？」

悠仁「石ころ」

順平「……なんで？」

悠仁「ここから一人ずつ釣るんだよ。囲まれたら死ぬだろ」

順平「いや、ここは派手に無双する場面だと思っただけど」

悠仁「順平。そんなんでできるのは、ゲームの中だけだぞ」

10 誤算（交流会1）

「雲の下に浮かぶ月と、灰の降る街、ね……」

悠仁の話を聞き終えた五条が、ソファに身を沈める。

「悪夢」と称されたヤーナムでの出来事と、月の魔物の存在。

聞いた街の様子から推測すれば、時代はヴィクトリア朝。日本だと明治時代あたりか。

元来、狩人は遺志を継ぐものらしいけど、相手の存在——月の魔物そのものを継いだというの、悠仁が器であることも関係しているかもしれない。

しかし、両面宿儺が受肉をした後の悠仁に取り憑くとは、月の魔物も相当に厄介な相手だ。

七海の話では、特級呪霊から庇護するように現れたらしいから……愛ほど歪んだ呪いはないね。

「よしー。ヤーナムのことは僕が調べておくから。あとは任せなさいー」

手を打って立ち上がった五条が、明るい声で宣言した。そして目隠しの位置を直しながら、壁際の振り子時計に目をやる。

「待ち合わせの時間にはちよつと早いけど、移動しようか。新しい友達も増えたことだし、交流会も勢いに乗って勝つよ！」

「友達……？」

不思議そうに首をかしげた悠仁の姿に、五条も首を傾げる。

「足手まといになるのが分かってて順平を連れて行つたんだもの。報酬も出ないのに尽くせる相手なんて、家族か恋人か、友達ぐらいなもんでしょ？」

僕は生徒も大事にするよ、と付け加える五条の声を聞きながら、悠仁は高専での任務や特訓を思い返す。

「友達か……。そうかも！」

利害に囚われない関係——友達という響きは懐かしく、少し照れくさいように感じられた。

五条に続いて移動しようとしていた悠仁が、当初の目的を思い出して立ち止まった。「あのー。順平の家のことで、先生たちに謝りたいんだけど……」

ためらいがちに話し始めた悠仁に、新聞に目を落としていた七海も顔を上げる。

悠仁が何かを取り出せば、先日、吉野順平の家で確認した残穢と同じ、色濃い呪詛が漂ってきた。

「……俺がやりました」

暫しの沈黙。振り子時計が時を刻む音だけが、大きく響き渡った。

先に動き出したのは七海で、新聞をたたむと立ち上がり、悠仁の前で仁王立ちになる。

「……虎杖君」

「ハイ」

うつむいて目を合わせない悠仁に、サングラスをずらして眉間を揉んだ七海がため息をつく。それからソファ横のフロアリングを指さした。

「そこに正座を」

「え？　また？」

顔を上げた悠仁の目に映るのは、腕を組んで立つ七海。説教モードである。

「何か不満でも？」

「アリマセン」

すぐには終わらないと判断した五条は、大人しく座る悠仁に片手を振って待ち合わせ場所に向かう。

笑いをこらえながら、報告書をどうするかについては七海に任せようと思った。

日差しが陰り、影の落ちた長い廊下を悠仁が駆ける。

七海の説教が思ったより長かったため、ミーティング場所へ直接向かうことになってしまった。

走りながら、悠仁はここ数日で気になっていたことを口に出す。

「宿儺さ、儀式素材……食ってない？」

右手の甲を見るが、宿儺の反応がない。いつもなら悪態をつくのにな。

目覚めてから先日まで儀式素材には触れておらず、何をいくつ持っていたかは覚えていない。

今となつては無用の長物のため構わないが、知らないうちに数が減っていると不安になる。

「……今度交換するけど、どれがいい？」

「生きているヒモ」

「やっぱ食ってんじやん」

高いやつ選んだなど思いつつ、遠目からでも見えたパンダに手を振り、悠仁は走るスピードを上げた。

京都校の生徒との顔合わせを終え、緊張した面持ちの順平が悠仁の隣に座る。

転入が決まっつてすぐに、五条によって交流会のメンバーに組み込まれた順平を観察しつつ、作戦の確認のために真希が口を開いた。

「予定通りパンダ班と恵班に分かれる。順平はパンダ班だ。で、悠仁は東堂と親友なんだろう？ 相手してやれ」

さつきは悠仁がいらないから騒いでいたと、付け足される情報に悠仁は顔をしかめる。「親友じゃないんだけど……」

「まあ、東堂とやれるのは悠仁ぐらいだし、どのみちお前になつてたよ」

パンダはそんな悠仁をとりなしつつ、隣に座る順平に目を向けた。

「順平は式神使いだったよな？ 近接補うのに、真希の屠坐とざま魔借りときな」

順平はパンダの口元を凝視しながらそれを受け取る。

会った時から値踏みされているようで落ち着かなかつた順平だが、扱えそうな武器を考えてくれたのだと思うと嬉しくなつた。

受け取つた大振りのナイフの柄を握って確かめながら、順平は手ぶらの悠仁に振り向く。

「虎杖君は武器使わないの？」

「使うよ。ほとんど使用禁止にされたんだけど、これは許可でた！」

そうして取り出されたのは、先端に鉄球の付いた金属製の棍棒——トニトルスである。

「蛮族かよ」

ださ、と釘崎に言われて少し傷ついたが、こいつの真価を發揮すれば、その考えも変わるだろう。

釘崎の言葉を撤回させるといふ別の目的を胸に掲げ、悠仁は移動する先輩たちに続いた。

鬱蒼とした森の中を、伏黒の玉犬を先頭にした東京校の生徒が進む。

玉犬が吠え示した側を向けば、赤い蜘蛛に似た呪霊が木から垂れ下がった。

すぐに反応した真希が大刀を構えるが、それを上回る速さで誰かが隣を駆け抜ける。

次の瞬間には、武器の消耗を度外視した強力な一撃——雷光を纏ったトニトルスが呪霊を粉碎した。

「殺意マシマシだな」

呆れたように呟くパンダに、玉犬の頭を撫でる伏黒が答える。

「虎杖、蜘蛛への反応速度が異常なんすよ」

「嫌な思い出でもあんだろ」

それに気を悪くした様子もない真希が返せば、遠くから破壊音が聞こえた。

数秒で目の前に飛び出してきたのは、上半身の筋肉を晒した大柄な男。

「よおーし！ いるな虎杖！ マイフレンド かかってこつ」

叫びながら木をなぎ倒して現れた東堂の顔に、鉄球がめり込む。

「散れ！」

悠仁が先手を取ったのを合図に、真希の掛け声で東京校の生徒が散り散りになった。

攻防の末、互いに数発ずつくらった悠仁と東堂が距離を取る。

血の混じった痰を吐き捨てた東堂が、構えを正した。

「いい動きだ虎杖。 マイフレンド こうやってお前と喧嘩するのも、中学卒業以来だな」

「いや、俺とお前は同 おなじゆう 中じやねえだろ。……鎮静剤いるか？」

唐突に恐ろしいことを言いだした東堂に、悠仁は困惑する。

悪夢の影響で中学時代の記憶が曖昧なため、強く否定できないのも悠仁の不安をあおった。

鎮静剤が必要なのは自分かもしれない。

——宿讎の器、虎杖悠仁は殺せ。

少し先を走る真依の背中を追いかけながら、学長の言葉を思い出した三輪は再び沈ん

だ気持ちになった。

学長や加茂が危険視している、まだ会ったことのない少年を心配しているうちに、ターゲットの彼が視界に入る。

気分はのらない。だが、自分の弟たちの方が大切……。覚悟を決めなければ。

真依の発砲音を聞きながら、迎撃のために居合の構えをとる。

だが弾を躲しながら走る悠仁の左手がぶれたのを捉えたときには、反射で刀を振りぬいていた。

足元に転がったものを確認すれば、半分に割れた野球ボール程の白い物体。

「石?！」

再び前方に視線を戻す。同じものを当てられたのか、真依は茂みに落とされ、加茂も体勢を崩して幹に手をついていた。

最後に悠仁を見れば、どこから持ってきたのか、映画でしか見たことのない長大な筒——ガトリング銃が握られている。

よくできた模型だと現実逃避しかけた三輪だが、メカ丸に肩を叩かれ、それが火を噴くのを確認する前に背中を向けて走り出した。

静かな森に似合わない、重い破裂音が響き、伏黒が顔を上げる。

「虎杖ですね。これ大丈夫ですか？」

心配ないと真希は言うが、伏黒が心配しているのは虎杖ではない。

「虎杖は殴られる前に叩き潰すタイプですよ」

文字通り。任務での出来事を遠い目で思い返しながら、伏黒は真希を促す。

「さすがに殺しはしねえだろ。殺しそうではあるが」

伏黒に心配しすぎだと言いつつも、真希は一度だけ同行した悠仁との任務を思い出した。

四級相手でも手を一切抜かない堅実なやつだと、最初こそ好印象を受けた真希だったが、任務終了時には問題児と言われる理由を理解した。

「……死人が出る前に戻るぞ」

来る時よりもスピードを上げて走る真希を追いかけながら、伏黒は京都校の無事を願った。

若い呪術師たちが競い合う様子を、ゆったりとソファに腰かけた冥冥が眺める。

今年の東京校は半数が一年生だが、実力は十分。

モニターに映した映像を眺めれば、芻霊呪法を使う少女が、箒に乗った少女を石ころで撃墜していた。

「伏黒君も石ころで撃墜していたけど、東京校では流行ってるのかい？　石ころ投げ」
冥冥が問いかければ、五条が愉快そうに話を始める。

『『コスパ最強の武器を教えてやる』とか言つて、悠仁が投げだしたのが始まりかな』
それを聞いて、先ほど手際よく三方向に石ころを投げた悠仁の姿を思い出し、冥冥の頬がゆるんだ。

「それでか」

「ん？　ところで……さつきからよく悠仁周りの映像切れるね」

五条が冥冥に振り向いて笑いかける。

続いて楽巖寺の方に視線をやったが、彼はモニターから目を離さず、無視を決め込むつもりらしい。

不穏な空気が漂い始めた部屋に、冥冥のよく通る声が響く。

「あの子、カラスに石ころを投げて近付かせないんだよ」

その言葉に、モニタールームにいた大人たちの時間が止まった。

カラスに嫌な思い出でもあるのかと言われて、五条は悠仁の動物嫌いが極端であることを思い出す。

「説明するの忘れてた」

大人たちの取引も策略も無駄にする行動に笑いながら、五条は生徒たちの活躍をモニ

ター越しに目に焼き付けた。

#11 忌避と容認（交流会2）

木々を撃ち砕く銃声が止み、立ち込めていた硝煙が晴れる。

ガトリング銃の反動をもつともせず、全弾を撃ち切った悠仁は、チームメイトの顔を
して隣に立つ東堂を横目に見た。

「殺意には殺意で応える。それでこそ俺の親友だ」

腕組みをして頷く東堂に、ガトリング銃をしまった悠仁が向き直る。

「お前も対戦相手なんだが。という言葉はぎりぎり飲み込んだ。」

「しかし虎杖^{マユフシド}。その武技と呪力操作は大したものだが……前より弱くなったな」

「はっ。」

今日、初めて手合わせしたというのに、何を言いだすのか。

一番に考えられるのは、苛立たせて集中を乱すためだが……。

「ずっと見てきたみたいになうなよ」

予想以上に低い声で返してしまったが、東堂に気にした様子はなく、悠仁の胸のあたりを指さす。

「確かにずっと見ていたわけではない。だが以前会った時の方が、獣じみた覇気があつ

たぞ」

東堂の言葉に、悠仁の目が見開かれる。

「獣じみた……」

言われて考えてみれば、最後に血を浴びて戦ったのはいつだったか。

五条との特訓を始めた頃から、悠仁は”呪術師として”任務に就いてきた。

そうして今では、呪術師として生きるために必要な理性も獲得した。……たぶん。

それでも思い出せるのは、悪夢の中で自覚した狩人の人間性と、せめぎ合う獣性——本能と血への渴望。

——腑抜けた小僧にはいい刺激になった。

先日の宿讎の言葉がよみがえる。狩人に腑抜けとは、笑えない冗談だ。

確かに、最近血に酔うこともなかった。

でも、だからと言って、獣狩りの夜を、あの悪夢を忘れてはいない。

「遠慮はいらん。好きに動け」

そう言った東堂が構えるのを見て、悠仁が赤黒い液体の入った小さな酒瓶を取り出す。

栓をしたままでも微かに香りが漂うそれ——匂いたつ血の酒を頭上に掲げると、瓶を砕いてその中身を浴びた。

久しぶりに肌を流れ落ちる濃い香りに、自然と口角が上がる。

自分は呪術師である前に狩人だ。そして……。

「ありがとう東堂。……目が覚めた」

よい狩人ほど、血に酔っているものだろう。

木々の間隔が狭くなり、足場の悪くなった森の中を、呪霊の索敵をしながら狗巻と順平が駆ける。

そこへ機械仕掛けの腕をくわえた玉犬が現れたことで、二人は足を止めた。

パンダと釘崎は、悠仁がやかしかしている音がすると行って引き返したため、この場には二人しかいない。

狗巻が受け取った腕から携帯を抜き取るのを眺めながら、順平は少し上がった息を整えた。

運動は苦手ではないが、インドア派で過ごしていた自分にこの競技は厳しい。

それでも狗巻に付いてこれているのは、彼が走るペースを考えてくれているからだろう。

「すげー」

考え事をしている間に通話を終えた狗巻が、前方を示して順平に振り返る。

それに頷きながら、順平は気になったことを口に出した。

「ねえ、狗巻君。この辺り、やけに静かじゃない？」

「じゃけ……！」

並んで歩きだしていた順平を、狗巻が手で制して止める。

10メートルもない距離に急に現れた呪霊の気配に、二人の頬には冷汗が伝った。

土煙が上がり、なぎ倒された木々の間から花御が起き上がる。

4人の学生と対峙していた花御だったが、合流した少女の呪具によって弾き飛ばされてしまった。

身体の修復をしながら、花御は呪術師の少年たちの行動を思い返す。

真人が目覚めさせたクラゲの式神を使う少年。戦闘力は脅威にならないが、自分の攻撃を受け切った式神の強靱さはなかなかのものだった。

言霊と、血の操縦。他の児等もよい術式を持っていた。成長する前に摘めなかったのは少し残念だ。

三人のことは置いておくとして、目の前の少年と少女には犠牲になってもらおう。

攻防の末、伏黒に種子を撃ちこみ、術式を開示した花御は、真希を掴み上げた木の根に力を込める。

木の根と首の間に挟まれた真希の腕が軋んだとき、森の中から二つの影が飛び出した。

東堂の拳と悠仁のトニトルスが叩きつけられ、砕かれた木屑と共に水しぶきが上がる。

近づいた呪霊からは、友人たちの血の香りが感じられた。

血の香りは気分の高揚と共に、死の予感を運ぶ。

自分や親しい者のその香りは、悠仁に悪夢の恐怖と死闘感を強く思い起こさせる。

川に座り込む伏黒の姿を視界の隅で確認した悠仁は、真希を抱えた東堂に背中を向け、呪霊に向けて強く踏み込んだ。

少女の拘束を解いた二人のうち、こちらへ向かってきたのは赤黒い血を滴らせた少年——宿讎の器。

手にしている棍棒のような、見慣れぬ形状の武器が青白い雷光を纏った。

悠仁の呪力が高まるのに合わせて、花御も木の根を伸ばし、身体を覆う呪力を増やす。

だが攻撃が当たる瞬間、雷光は黒に変色し、木の根ごと右腕は吹き飛んだ。すかさず距離を詰めた悠仁が、腕を修復する暇を与えずに追撃する。

軽率ともとれるその行動は、彼の立ち回りで正しい選択だと証明された。

真人が一級呪術師に並ぶ力量だと言ったのは誇張ではない。

自身で作った死角に右腕を隠し、順手での武器の攻撃と、武器を逆手に持った拳での攻撃を入れ替える。

リーチ差で打撃のタイミングをずらす。拳の出所も掴みづらい。

拳の力だけでも無視できない威力がある上に、あの武器のもたらすダメージが花御を削る。

雷光を纏う武器を下げるのに合わせて、花御は針状の木の根を広げ、強制的に距離を取らせた。

真希と伏黒を下がらせ、二人の戦いを観察していた東堂が悠仁の隣に立つ。

黒閃をキメた高揚からか、笑みを浮かべる悠仁に声を掛けた。

「術師にとつての重要な起爆剤は、怒りだ。しかし、お前の場合、血がそうだったよな」

以前、東堂が悠仁と会ったのは、伏黒の様子を見た後だった。

獣じみた覇気。あれは自分の拳に残った伏黒の血の香りが、彼の本能を引き出したというわけか。

「血に欲よつこびを見出すなど、常人には忌避きひされるもの。だが！ そんな退屈な奴らは呪霊ごとねじ伏せてやればいい。そうだろう超親友ブラザー！」

構えを取りながら放たれた東堂の言葉に、驚いた悠仁が振り向く。

「……応！ そうだなブラザー！」

花御に視線を戻した悠仁が構える型を変える。

武器の有無の違いこそあるが、特級呪霊を見据える二人の姿勢がぴたりと揃った。

「さあ、調理を始めようか」

手を叩く音が響き、悠仁と東堂の立ち位置が入れ替わる。

二人の体格差により乱されていた花御の距離感も、何度も繰り返すうちに修正されてきた。

黒く光る打撃に注意しつつ、適切な距離をとって攻撃を当てる。

宿讎の器は殺せない。もう一人の方も、時間さえ稼げれば無理に殺す必要はないが……。

森を抜け、花御の足が川辺の砂利を踏む。

それを追う東堂が手を叩いたとき、悠仁のいた場所に三節棍が現れた。

あの術式は生物以外とも入れ替えが可能。

花御が術式と游雲の存在を認識できた時には、東堂の呪力を乗せたそれが顔面の樹を砕いていた。

東堂との間に木の根を出現させた花御が、地面に手をつく。

花御の触れた場所から放射状に、植物たちが萎よぼれていった。

真人の言う月の魔物という不確定要素が判明した以上、宿儺の器と周囲への領域展開は得策ではない。

だが、漏瑚が領域を展開したときには現れなかったという話も聞いている。

漏瑚が狙っていたのは五条悟だ。

今の状態では時間まで自分がもたない以上、不安は残るが、虎杖悠仁に領域内で攻撃を仕掛けなければ、介入はないことに賭ける。

植物の命と引き換えに集めた呪力を、左肩の供花に集めた。

——領域展開……！

夜色の空が晴れ、帳が破られたことに花御の意識が逸れる。

上空に浮かぶ人影が五条だと視認したとき、花御の腹が背後から貫かれた。

飛び散った呪霊の血肉が悠仁に降りかかる。その身体は、より多くの血を求めようと動いた。

もう一度、その内側へと手を伸ばそうとした悠仁に、呪霊の向こうから制止の声がかかる。

「離れる虎杖！」
ブラザー

張り上げられた東堂の声に周囲の気配を探れば、遠くで呪力が膨れ上がるのを感じ取れた。

構えていた血濡れの右手を下ろし、踏み込んでいた方向——東堂のいる側へ駆ける。

東堂の隣に並び振り返れば、悠仁たちのいた場所を轟音と共に紫電が抉り取った。

地面の状態を見て、悠仁は五条に殺されかけた回数のカウントを増やす。

五条の術式を見て規格外だと笑う東堂の声を聞きながら、悠仁はどうやって五条に勝つかについて、真剣に頭を悩ませた。

「アンタいつの間にあのゴリラと仲良くなったのよ」

ベッドで療養する伏黒のもとに集まり、ピザを食べていた釘崎が悠仁へ問い掛けた。

あ、もともと親友だったわね。と付け足された言葉に首を振り否定してから、悠仁は

頭に手を当てて自分の記憶を探る。

「いや、仲良くなつたつっーか……あの時は、久しぶりに自由になれてテンション上がつてたというか……」

「何アンタ酔つてたの？」

「酔つて……たかもしれない」

「あの状況で?!」

歯切れ悪くともんでもないことを返した悠仁に、頬にガーゼを張り付けた順平が驚きの声を上げる。

そんな騒がしい三人を見ながら、咀嚼していたピザを飲み込んだ伏黒が口を開いた。

「血に酔つてたんだろ。久々に血塗れだったし」

それから各々の怪我の具合や、交流会での出来事を共有する。

交流会前はどこか遠慮のあつた順平も、釘崎のにらみを気にせず最後のピザを手に取り始めるくらいには打ち解けたらしい。

まあ、そのピザは元から彼の取り分なのだが。

水の入ったペットボトルをベッドサイドに置いた伏黒は、三人になつた同期の顔を見回す。

釘崎は、入学時より体術の腕が上がっていた。

先輩たちのしごきもあるが、同期の規格外と毎日のように組み手をしていけば当然かもしれない。

吉野はまだ高専に入つて数日しか経っていないが、格上相手でも怯まない度胸と、退き際を理解するだけの冷静さがある。

だが初めて遭遇した呪霊が特級、呪術師が虎杖なのと、今回も特級に遭遇したことを考えると、まずはお祓いに行つた方がいいかもしれない。

……呪術師にお祓いてなんだ？

そして虎杖。今回のあいつは普段と違つた。

いや。血を浴びて笑うあの姿は、初めて会つたときに目に焼き付いている。

本人もさつき言つていたように、自由に行動した——我を通した結果があつた強さ。

普段の虎杖は、俺たちの「返り血を浴びるな」という言葉に抑圧されていたわけだ。

「……弱い呪術師は我を通せない」

伏黒の発した言葉に、三人の視線が集まつた。

「俺も強くなる。すぐに追い越すぞ」

そう言つた伏黒の視線が悠仁を向いていたことに対して、釘崎から非難の声が上がる。釘崎から非難の声が上がる。

困り顔の順平が釘崎をなだめていけば、部屋に居るはずのない者の声が割つて入

た。

「それでこそ、^{ブラザー}虎杖の友達だな」

腕を組んで頷く東堂の登場に、窓を蹴破る勢いで悠仁が外に飛び出していく。

勘弁してくれと叫ぶ悠仁の声を聞きながら、三人はぼんやりと窓から青空を眺めた。

波乱に満ちた交流会初日から二日が経った。

なぜか野球に決まった勝負方法に困惑を残しつつ、東京校二年の三人は騒がしい一年生たちを眺める。

「悠仁も野薔薇も、ピッチャーがやりたいみたいだな」

集合してからずっとにらみ合っている二人に、パンダがため息をつく。

「そりゃ、毎日あんだだけ石ころ投げてんだから、ピッチャーやりてえだろ」

「しゃけ」

さつきから互いに譲らない釘崎と虎杖の間に、見かねた伏黒が割って入った。

「釘崎はパワー不足。虎杖はデッドボールになるからだめだ。俺がやる」

「伏黒君が？」

珍しく主張をした伏黒に、順平が聞き返す。

二人の言い合いは止まったが、今度は釘崎と悠仁の矛先が伏黒へと向いた。

「それ、自分がピッチャーやりたいだけだろ！」

「俺の制球力をバカにしてない？ デッドボールなんて出さねーよ」

その声に面倒くさそうにしながら、伏黒は悠仁にピッチャーを任せられない理由を説く。

「お前、砲丸投げ30メートル超えだろ。ピッチャー投げで。……呪力なしで当たったら死ぬぞ」

それも、物に当たらなければ記録はもつと伸びていたという冗談のような内容に、一年生だけでなく、少し離れて成り行きを見守っていた二年生たちも固まる。

だが伏黒の表情から冗談ではないことを読み取った釘崎と順平が、思わず言葉をこぼした。

「何それゴリラじゃん」

「虎杖君って本当に人間？」

「お前から失礼すぎない？」

ピッチャーを決めるどころではなくなった雰囲気、狗巻がそつと7本の鉛筆を取り出す。

「高菜」

一本ずつ引け。そう訴える狗巻の表情を見て、ピッチャーは一番運のいい奴に決まった。

真希がピッチャーを務めることになり、悠仁のポジションはキャッチャーに落ち着く。

一回の表、ツーアウトを取ったところで、三年生の加茂が打席に立った。

「虎杖、お前はなぜ呪術師をやっている」

前を向いたまま掛けられた言葉に、悠仁も前を向いたまま仙台での出来事を思い返す。

——殺したいなら掛かってこい。俺たちの狩りを教えてやる。

「……五条先生に恩人を殺させないよう啖呵を切ったら、あとは成り行きっす」

一昨日の五条の術式を考えると、過去の自分に無知って恐ろしいぞと伝えたくなつた。それでも死んでやるつもりはないが。

後ろに立つ五条が何も言わないので、話を続ける。

「誰にも殺されないよう強くなる。だから自分のために行動していたつもりなのに、気がついたら人を助けていて、友達も増えてるんすよ。……変な話ですよね？」

「そうか……」

真希にサインを出しながら悠仁が見上げた加茂は、無表情で前を向いたままだった。だが……。

「いや、それで良いんじゃないか」

そう言った加茂が少し笑う。しかし、バットを振ることもなく三振となった。

5番の狗巻に続いて6番の順平が塁に出たところで、悠仁に打席が回ってきた。

前の回で釘崎の出塁や伏黒のヒットがあったことも考えると、同期として負けていない。

メカ丸が唸り声を上げるのを聞いて、雑念を消し、目の前に集中する。

ストレートで飛んできた白球を捉え、バットを振り抜けば、小気味いい音を立てたボールがフェンスの向こうへ吸い込まれていった。

1 2 狩人の血

昼下がりの高専の道場に、拳のぶつかる音が響く。

午前最後の科目は体術で、担当の教員は五条だった。

悠仁たちの相手をした直後にも関わらず、五条は疲れを一切見せず、伏黒は何度も転がされる。

今回も伏黒の背中が床に付いたところで、五条が手を叩いてみんなの注目を集めた。

「はい。今日の稽古はここまで！ お疲れみただけど……午後の任務も気張ってね！」

上体を起こし、座って息を整える伏黒は、涼しい顔をして立っている五条に胸の内での悪態をつく。

あとの三人も組み手をしていたが、今、立っているのは悠仁だけだ。黙って伸びている三人に代わり、一人だけ元気な悠仁が返事を返す。

「五条先生も、午後から出張でしょ？ 気を付けてね！」

後ろを確認すれば、釘崎はただの疲労だが、順平は悠仁の拳をまともに食らったらしかった。

午後からは一年生だけで呪霊の調査をするということで、四人は補助監督の待つ駐車場へ向かう。

道中、悠仁が呪術師と呪霊の等級についてを順平に説明していたが、途中からは担任の特級呪術師、五条の話に変わっていた。

「五条先生の強さは信頼できるし、忙しい合間をぬって稽古もつけてくれるところはマジで尊敬してる」

明るく話す悠仁に対して、今回も稽古中に道場から吹き飛ばされていたのを思い出した釘崎は眉をひそめる。

「尊敬い？ アンタたまに殺されかけてるじゃない」

「うん。だから信用はしてない！」

笑顔で言い切った悠仁に、釘崎は歪な信頼関係を見る。伏黒は静かに頷いていた。

「それで虎杖君が『先生』って呼んでるのに驚きだよ」

順平の呟きを聞きながら、これだけイカレてるから宿讎の器になったのかと、釘崎は妙な納得をした。

集合時間10分前。車の側に立っていたのは、順平の母を病院まで送り届けた女性だった。

こちらに気付いた女性が、勢いよく歩いて近づいてくる。

「来たっスね。問題児ども！」

挨拶をするより先に声を上げた女性——新田が順平と悠仁を指さした。

「荷物まとめとけつて言ったのに、二人して居なくなつたのは許してないっスからね！」怒る新田を見て、悠仁は七海にも同様の内容で説教を受けたことを思い出す。

あの時は順平と一緒にツギハギを探しに行ったことと、スマホの電源を切つていたことも怒られた。

聞けば、新田はあの事件の後、監督不行き届きで伊地知と共に始末書を書くはめになつたらしい。

車で移動をしながら、新田が今回の任務の注意事項を述べる。

「いいっスか？ 任務の基本は報告・連絡・相談っス。特に虎杖君は、呪霊を祓うよりこれを優先してくださいっス」

何度も言い聞かせるように繰り返した後で、新田は事件の経緯を説明し始めた。

6月、盛岡。8月、横浜。9月、名古屋。自宅マンションのエントランスにて、呪霊による刺殺。

三人が亡くなつた日付や場所はバラバラだが、「オートロックの自動ドアが開きっぱなしだ」と、亡くなる数週間前から何度も連絡のあったことが各管理会社への聞き取り

で判明。

同一の呪霊によるものと断定はできていないが、被害者の三人が同じ中学に2年間在籍していたことは確認されている。

それらを聞いて、少し考えた釘崎が口を開く。

「昔、三人が同じ呪いを受けて、時が経ってそれが発動したって感じ？」

釘崎の問いに、その可能性が高いと頷いた新田が今日の予定を確認する。

まずは三人の共通の知人への聞きこみと、被害者たちの通っていた中学への訪問。

「四人にも、呪術師視点で色々と探ってほしいっす」

新田がそう締めくくったタイミングで、共通の知人の家へ到着した。

浦見東中学校の校舎前に、呪術高専一年の四人と、浮かない顔をした補助監督の新田が立つ。

事前に被害者たちの知人に会う予定だったが、彼は四人目の被害者となっていた。被害状況は他の三人と同様。

手がかりがなくなり落ち込む新田を順平が励ましていけば、先に校舎へ駆けて行った釘崎が嬉しそうに振り返る。

釘崎の後ろには、連絡通路の階段に座り込む生徒の姿が見えた。

「分かりやすいのがいるわね。ぶん殴って更生させましょ」
「なんで?」

釘崎の言葉に疑問を返す悠仁の隣から、順平は指さされた生徒の様子を確認する。

二人の生徒の手に煙草が握られているのを見て、順平は一步後ろへ下がった。

騒ぐ三人と新田から離れて、順平は校舎とグラウンドを見回す。下校時刻は過ぎていくらしく、生徒の姿はまばらだ。

校舎の構造はよくあるもので、自分の通っていた中学や高校と変わらない。今は呪霊の気配も感じられなかった。

続いて渡り廊下の先を眺めていけば、向こうから歩いてきた人と目が合う。

校務員らしき初老の男性は、中学時代の伏黒の素行について騒いでいる三人を見つけると、怒鳴り声を上げて走ってきた。

この学校に長く勤めているという先程の男性——武田に、伏黒が事件の被害者についての質問をする。

変な噂、黒い噂、悪い大人との付き合い。そして……罰^{ばち}当たりな話。

武田の反応はいまいちだったが、罰当たりな行為には心当たりがあるらしい。

記憶を手繰ってうなる武田に、先ほど釘崎に絡まれていた二人の生徒から助け船が入った。

「あれじゃないですか？ 八十八橋やそはちのバンジー」

伏黒に話を聞けば、八十八橋はこの辺りで有名な心霊スポット——自殺の名所らしい。

橋の名前を聞いて思い出したらしい武田が、当時のことを語り始めた。

「八十八橋で深夜、バンジージャンプをするのが不良少年の間で流行つたんだ。いわゆる度胸試しだね」

今回の被害者四人もバンジージャンプを行ったのか、20年以上前に行方知れずになり、その翌日に八十八橋の下で倒れているのが見つかって騒ぎになったらしい。

ひと通りの話を聞いた釘崎や伏黒から、どこの部族だと呆れた声上がる。

その時、二人の声に重なって呟かれた悠仁の声が、順平にはやけにはつきりと聞こえた。

「自殺の名所で度胸試しか……」

彼の表情をうかがえば、先ほどみんなと騒いでいた時のものから一転して、ひどく冷めたものになっている。

だが、それは一瞬のことで、伏黒に姉がいるという新たな話題が投げ込まれば、悠仁は釘崎と共にまた騒ぎ始めた。

悠仁の呟きには何も言えず、八十八橋に向かう車へ乗り込むみんなに続いて、順平も

騒がしい輪に加わった。

「残穢も気配も、まるで感じられませんでした」

一夜明けて、徹夜で張り込みをした一年生たちは、八十八橋の近くのコンビニで新田と合流した。

朝日に目を細めながら、伏黒はコンビニで買ったサンドイッチを緩慢な動きで口に運ぶ。

八十八橋では何もなかったので身体は疲れていないし、任務で徹夜になるのも珍しくはない。

だが昨日の騒がしさが嘘のように、同期たちは静かになっていた。

まあ、釘崎はさっきまで悪態をついていたし、順平が静かなのはいつものことか。

最後に、昨日の夕方から様子の違う悠仁を確認していれば、この静かな空気に耐えかねたのか、順平が沈黙を破った。

「八十八橋って、有名な心霊スポットなんだよね？ 被呪者の数を考えると、時間はかけられないかな」

しかも、今のところ致死率が100%だと続ける順平に、釘崎が頷く。

その流れで伏黒が昨日の報告をしていれば、自転車のベルの音と共に、自分の名前を

呼ぶ声が聞こえた。

仮眠をとり、日が暮れた頃に、伏黒は再び八十八橋を訪れていた。

自分の寝たきりの姉——津美紀が今回の呪霊と関わっていると分かった今、一刻も早く被りたい。

しかし、被害状況から考えれば、これは自分たちの手に余る任務。

自分の都合で仲間を危険に巻き込むことはしたくなかった。

——夜に、下から。

峡谷の下で新田の言葉を思い出しながら、立ち止まった伏黒は八十八橋を見上げる。

また歩みを進めようとしたところで、自分に並び立つ気配に気が付いた。

「自分の話をしなさすぎ」

釘崎の声を聞いて左右を確認すれば、悠仁と順平の姿も隣にある。

「ここまで気付かないのは、焦りすぎだと思うよ」

自分を心配する順平の言葉に、落ち着かない気持ちになっただけならば、静かに立つ悠仁と目が合った。

「別に何でも話してくれとは言わねえけどさ……せめて頼れよ。友達だろ」

「友達……」

悠仁の言葉を反芻し、同期たちの顔を見回す。

こいつらは呪術師だ。危険と言われて引き下がるような性格はしていなかったな。

少しためらってから津美紀のことと、自分の考えを伝えれば、三人は自分を追い越して進み始めた。

その背中を追いかけながら、伏黒は自分が笑みを浮かべていることに気が付く。

伏黒は根拠のない自信は持たない。

だが今日は、友達が側についていると思うだけで、いつもより力を出せる自信があった。

川を超えると展開された領域の中で、悠仁は目的とは別の相手——血塗けちずと対峙した。

血塗の突進をかわし、刀身に添うように銃を組み込んだ大型の騎士剣——レイテルパラッシュで突きを放てば鮮血が舞う。

悠仁が降りかかる血を浴びれば、わずかに肌を火傷するような感覚があった。

多少の毒性があるらしいが、表皮に血がにじむ程度なので無視できる。それよりも……。

「オマエ、似てるなあ?」

そう呟く相手から漂うのは、呪霊の気配ではない。ツギハギに改造された人たちとも違う。

今、浴びた返り血。この嗅ぎ慣れたにおいは……。

「月の香り……?」

悠仁が困惑していれば、伏黒と順平の、釘崎を呼ぶ声が聞こえた。

振り返れば、空間を割いて現れた腕が釘崎を引きずり込むのが見える。

「なんだあ? 兄者かあ?」

目を逸らした隙に、「俺も」と叫んだ血塗が伏黒たちのほうへ駆けだした。

一步遅れて悠仁が後を追えば、相手は釘崎の吸い込まれた穴に飛び込んでいく。

領域の外に繋がっている様子を見てとり、悠仁は先に目的の呪霊がどうなったかを確認した。

認

伏黒と順平を見やれば、「そのまま追え」と言葉が返ってくる。悠仁は走る勢いのまま、その穴を潜り抜けた。

穴の繋がる先は同じ場所ではないらしく、釘崎と血塗を見失った悠仁は溪谷を駆け

る。特徴的な血の香りをたどれば、すぐに相手を見つけてことができそうだ。

谷を分断する川を跳び越えれば、血塗の後ろ姿と、誰かと対峙する釘崎を視界にとらえた。

領域から引きずり出された釘崎は、目的の呪霊とも、乱入してきた大口の呪霊とも違う相手と向かい合う。

「女性でしたか。これは失礼」

見た目の不審者感とは裏腹に、紳士的な態度をとる相手——壊相は、釘崎にこの場を引くよう促す。

自分たちとは別の目的、お遣いとやらで来たらしい相手の出方を窺うかがっていれば、覚えのある大きな気配を感じた。

両面宿儺の指の気配に、三人が特級相当とやり合ったことを把握する。

領域が閉じたことから勝てたのは分かるが、戦った三人が無傷なはずがない。

釘崎が金槌を握り直して行動に出ようとすれば、壊相が後方に跳び距離をとった。

「私が話したことは忘れてください」

「待てや！」

一方的に言い残して、移動を始めた相手を追いかける。

さつき言っていた「お遣い」は、宿儺の指の回収か。

こちらを向いたまま後方へ移動する相手を挑発してみたが、背中がコンプレックスだとナメた事を返された。

「警告です。私の背中を見たら殺しますよ」

そう告げる、意外と足の速い相手に苛立つていれば、向こうから悠仁と大口の呪霊が走ってきた。

「あ、釘崎」

「あ、兄者」

声を掛けてきた二人が壊相の背中を見た。

その瞬間、二人に振り返った背中に血を流す顔のような模様を確認し、釘崎は追い抜きざまに側頭部へ向けて金槌を振り抜く。

顔に火傷をしているらしい悠仁の隣に釘崎が並べば、壊相が術式を発動した。

異臭を放つ血で形成された翅はねから、石を溶かすほどの毒性をもった血が弾丸のように放たれる。

走る釘崎の髪をその血が掠め溶かしたところで、引き返した悠仁が釘崎を抱えて走り出した。

足場の悪い森の中を、後ろが見えているように攻撃をかわし、人ひとりを抱えているとは思えない速度で悠仁が駆ける。

その所業に驚きつつ、釘崎は舌を嚙まないように口を閉じた。

森を抜け、ブロック塀を跳び下りたところで、壊相の攻撃がぴたりと止まった。

「うっし。射程外だな」

そう呟き、悠仁は釘崎を下ろす。

スカートを整え、運んでくれたことに礼を言っていれば、自分を何かから隠すように動いた悠仁が後ろへ向けて発砲した。

銃弾を受ける大口の呪霊が吐いた血が、悠仁に降りかかる。

「虎杖！」

その様子に気をとられたとき、釘崎の背中から左腕にかけて、もう一人の術式の弾が撃ちこまれた。

傷口から、鈍い痛みがじわじわと広がってくる。

そこへ余裕を漂わせて現れた壊相が、先ほどとは違う術式を発動した。

釘崎が自分の左腕と悠仁の顔を確認すれば、バラのような模様が浮かび上がっている。

血を傷口や粘膜から取り込ませることで、身体を腐敗させる術式らしい。

術式を開示し、勝ちを確信している相手の様子に腹が立つ。

「当たれば勝ちの術式。強いなお前ら」

相手の言葉を確認するように、釘崎が呟いた。

「でも残念……」

確かに当たれば勝ちだろうが、これは血を媒介にした術式だ。

相手の欠損した部位は、釘崎の身体——人形の中に入っている。

芻霊呪法における“血液”の価値は高くはない。

しかし、敵の術式が自分と相手との繋がりを強化している今、その“繋がりを自分の術式にも恩恵がある。

「私との相性、最悪だよー」

釘崎が自身の左手首に共鳴りを打ち込めば、壞相と血塗の心臓付近から2本の杭が突き出た。

血液の価値が、腕一本と同等にまで強化されている。

期待以上の効果を目にして、痛みをこらえていた釘崎の口元に笑みが浮かんだ。

「我慢比べしよっか」

そう言つて次の釘に呪力を込めたとき、すぐ後ろでぼたぼたと水の垂れる音が聞こえて振り返った。

「……虎杖？」

釘崎の目に、悠仁の身体から7本の杭が生えているのが映る。

——なぜ虎杖が血を流している？　なぜ、共鳴りが虎杖に強く影響している？

月の魔物、上位者の血の希少価値は計り知れない。

その上位者の血を受け継ぐ者たちの「血液」の価値も、通常のものとは比べ物にならないだろう。

そして、虎杖悠仁は上位者の赤子。月の魔物の遺志を継ぐ狩人。

「兄弟」の血が結びついている今、芻霊呪法における最も希少価値の高い血の持ち主は彼だった。

「宿儺の気配で分かりづらかったですが……。やはり宿儺の器は月の香りの持ち主だったようですね」

膝をついた悠仁に、合点のいった様子の壞相が声を掛けた。

金槌を構えて悠仁の側に立った釘崎に、その言葉を気にしている暇はない。

「血塗、引きましよう」

「兄者に報告かあ……」

緊張する釘崎には目もくれず、そう言って術式を解いた二人が森に消える。

この状態の悠仁を置いては行けない。

それがなくても、敵の術式の痛みの影響で、釘崎に追いかけるだけの余力はなかった。

輸血液を打ち込みながら全ての杭を引き抜いた悠仁は、釘崎と共に八十八橋を指す。

本当に死ぬ一歩手前までダメージを受けたせいで、さつきはすぐに動けなかった。

あの二人の術式は解けたが、釘崎の怪我と毒による痛みは消えていない。

釘崎に合わせてゆっくり歩き、八十八橋の下へ戻ってくれば、傷だらけの伏黒と順平が座って待っていた。

釘崎に怪我の具合を聞いた後で、血まみれの悠仁を見た伏黒は立ち上がって顔をしかめる。

「虎杖、最近のお前は返り血を浴びすぎじゃないか？」

「いや、これは自分の血」

「自分の?!」

軽い口調で返した悠仁に、驚いた順平が反応を示す。

男子たちの普段通りの様子を見て、怪我は問題ないと判断した釘崎は、話を切り出した。

「宿儺の指はどうしたの？」

釘崎が問いかければ、伏黒と順平が目を逸らす。

「悪い……なんか変な奴らに盗られた」

「呪力がカラカラで動けなくて……」

申し訳なさそうにする二人の様子を見た釘崎が、大げさにため息をつく。

「特級相当を相手にして、生きていたことを喜べ。それに……」

両手の拳を握った釘崎は、うつむく二人の頭に拳を振り下ろした。

「モジモジすんな！ 気持ち悪い！」

鈍い音が響き、殴られた二人は頭を押さえて座りこむ。

「今、殴る必要あった?！」

もつともな疑問を投げかけた悠仁にも拳を振り下ろしていれば、橋の上から新田の叫ぶ声が聞こえてきた。

新田の小言を聞きながら高専に戻り、怪我をした三人を医務室に送り届けた悠仁が廊下を歩いている。

その左頬には、両面宿儺の口が浮かび上がっていた。

「……共振だ。今回の呪殺が始まったのは、お前が受肉したせいだぞ」

お前のせいで人が死ぬ、と告げる宿儺に、悠仁は感情のない声で返した。

「今回の被害者たちは、ツギハギの被害者とは違う。有名な自殺スポットに、『自ら』赴いた」

あの呪霊に呪われていた者に関しては、たとえ自分と親しい者であったとしても、悠仁は何も思うことはないだろう。

自殺——人の死が絡む場所に、遊びのつもりで興味を示すのは、とても褒められたものではない。

宿儺は悠仁が指を喰ったことによる共振のせいだと言っているが、被害者たちが、過去に自分で種を撒いたことに変わりはない。

呪霊は元来、生まれた場所に居付くものだ。つまり、あの場所に近付かなければ被害に遭うこともなかった。

「遅かれ早かれ、事件は起こっていたよ」

そう。ただ、今になって花開いただけ。

それに、たとえ何人死ぬと分かっているても、狩人ならば宿儺の指を喰うだろう。「宿儺が何のつもりで言っているのかは知らないけどさ、周りが何を言おうと、秘密を漁りあさに行った者の被害にまで、俺は責任を持つつもりはないよ」

怪談話に、心霊スポット。噂話や謎めいたものは、人々にとつての甘い秘密。

中でも、人の死の真実に関わる秘密は、特別に甘いものだろう。

「それに、甘い秘密を探る者には恐ろしい死が必要だと、彼女も言っていただろう？
……愚かな好奇を、忘れるようなね」

淡々と告げられた悠仁の言葉に、宿儺は満足そうに呟いた。

「呪霊どもより呪いらしいな。オマエは」

#13 暗合

高専敷地内。危険度の高い呪物が保管された蔵の中に、悠仁と五条の姿があった。

「ここ、本当に入ってよかったん？ もう入ってるけど」

興味深そうにあたりを見回す悠仁に、柵から取った一つの標本瓶を渡しながら五条が答える。

「まあ、上は渋ってたよ。でも八十八橋にいたのが九相図の受肉体だったか、確認できるのは悠仁だけだからね。……どう？」

九相図の受肉体。上位者の血を継ぐものが他に存在している限り、悠仁の獣狩りの夜は終わらない。あれらは必ず狩る。

そう思いながら渡された瓶を受け取った悠仁の瞳が、そこに揺蕩たゆたうモノを見つめる。

「あいつらと同じにおいがする。けど……死んでる？」

持ち上げられた瓶の中で、ただ静かに浮かぶ胎児。

命の最期を迎えても瓶の中に留とどまり、眠ることを許されていない、目覚めを許されな

い存在——呪胎九相図。

これらは狩りの対象だ。狭い瓶の中にいるモノと自分の間に、関係なんてない。だが、揺れる胎児の姿に呼応するように、悠仁の瞳も揺れる。

そして、彼の内側に潜む月の魔物。

それが怒りに震える気配を感じて、瓶を柵に戻した悠仁は胸に手を当てた。

深く息を吐き出し、柵に並ぶ他の標本瓶を見た悠仁が、隣で木箱を確認していた五条に問いかける。

「五条先生。ここいつら埋葬したらダメなん？」

瓶の中身を気にする悠仁を観察し、何か考える素振りを見せた五条は、ゆっくりと言いかせるように答えた。

「呪物だからね。簡単には処分……吊ってあげられないんだよ」

九相図についての質問を受けていた五条が、中身を確認し終えた木箱に蓋をする。

それから話題を変えるように口を開いた。

「そういうえば悠仁。里桜高校で七海が回収した瓶の青い薬つて、何に使うの？」

かなり強力な麻酔のようだが、詳しくは解析できなかったと話す家人の姿を思い出しながら、五条は聞きそびれていた疑問を悠仁に投げる。

こちらを向いていた悠仁が、頭をかきながら視線を逸らした。

「あー……。あれ、脳を麻痺させる精神麻酔の類なんだけど、気配の薄くなる副作用があるから、そつち利用すんの」

脳を麻痺させる精神麻酔。予想以上の危険物だった。

「へえ。意識とばない？」

「そこは大丈夫。気合いで！」

気合いでどうにかなるものではないだろうと思いつつ、五条はそれを活用する狩人の精神力と、元氣よく返した悠仁の姿に呆れを見せる。

「そこは脳筋理論なんだ？ でも、麻酔に合わない副作用だね」

九相凶の確認を終えたため、話の途中だが長居は無用と、五条は蔵の扉を指さして歩き始める。

もう一度、標本瓶に目を向けた悠仁が、後ろをついていきながら何でもないように答えた。

「人さらいには都合がいいでしょ？」

当然のことだと言いたげな悠仁の態度に、五条は彼の見ていた悪夢の異常さを再認識する。

「……なるほどね」

先ほど悠仁には見せなかった木箱の中身——青い秘薬。それらが使われた者の最期

を察した五条は、蔵の扉をそつと閉じた。

ハロウインの装いを見せるようになった街を、任務帰りの一年生たちが歩く。直帰しようとしていた伏黒は、伊地知の運転する車から引きずってこられたことに不満を隠さずにいた。

その隣で、荷物持ちに指名してくる釘崎の声を聞き流し、順平と共に映画の時間を確認していた悠仁が、急に足を止める。

何事かと振り返った三人に、慌てた様子の悠仁は踵を返ししながら答えた。

「ごめん！ 俺、行くとこあったわ！」

返事を待たずに走り出した悠仁の背中が、どんどん小さくなる。

呆気にとられた三人を残して、その後ろ姿は見えなくなった。

細い路地に入った悠仁は、覚えのある血の香りをたどって先を急ぐ。

いくつかの角を曲がった先に、二人の少女——菜々子と美々子の姿があった。

菜々子の左手の小指の先からは、一筋の血が垂れている。

「血の匂いがしたから来たけど……自分で切ったやつだよな？」

「毎回思うけど、あんたの嗅覚どうなってるの？」

悠仁の言葉に頷きながら、若干、引く様子を見せる菜々子がハンカチで血を拭い、その指先に美々子が絆創膏を貼る。

そんな菜々子の態度が心外だと言うように、悠仁が答えを返した。

「呪力高い人は、血のにおいが違うんだよ」

悠仁が血の香りをたどってきた理由。二人と悠仁は協力者でありながら、連絡先の交換をしていない。

高専関係者に二人という姿を見られたとしても、協力者だと悟られなければ、呪詛師が彼を——宿儺を利用するために接触を図ったと捉えることもできる。

それに、年齢が近く、制服を着ている菜々子と美々子が相手であれば、呪詛師よりも友人と思われる率のほうが高いだろう。

とはいえ、使用している端末から足が付いては意味がない。次に会う日時とエリアだけを決め、二人の居場所は悠仁が探すことになっていった。

今回は場所も日時も約束のものではなかったため、二人が怪我を負った可能性を考え、悠仁が慌てて来ることになった。

二人が無事な姿を確認して、悠仁は身体に入っていた力を抜く。

「急にどしたん？　そもそも、なんでこの町にいるって知ってんの？」

一応、質問の形をとったが、交流会での呪霊と呪詛師の襲撃から、予想はついている。

「呪詛師こっちに情報を流してるやつがいるから」

美々子の言葉にやっぱりかと悠仁が返していれば、スマホを操作していた菜々子が、その画面を悠仁に向ける。

そこには任務にあたる呪術師の名前と等級、おおまかな任務内容が並んでいた。

菜々子の中から悠仁の名前を探せば、今日の任務内容が表示されている。

「突発的な任務でなければ、誰がどこの任務に就くのか、ある程度わかる」

「マジで筒抜けじゃん」

だが、呪詛師たちが呪術師の任務先を避けて行動しているのだとしたら、この間の十八橋はイレギュラーか。

「機密度が高い任務は分からないけどね。虎杖は監視対象だし……等級もないからすぐ調べられる」

笑いをこらえるように話す菜々子と美々子に、そういえば自分の学生証には等級が書いてなかったと思いついた悠仁が微妙な表情になった。

「おう……。ところで用事は？」

夏油のもとに集った家族と離れた今も、菜々子と美々子は呪詛師だ。

だが、あの死体を操る呪詛師たちに協力しているのは、夏油の肉体からだを返してもらおう取

り決めをしているからにすぎない。

しかし、10月に入った今でも、二人には具体的な計画の内容も、行動を起こす場所すら知らされていなかった。

ここまでできてやっと、あの術師とは「縛り」を結んでいなかったことに、菜々子と美々子は気がついた。

情報は一番の武器だ。自分を殺したがっている相手に武器を与えることを、あいつがするはずがない。

だから、あの術師は自分たちに何も教えない。

「夏油様の肉体^{からだ}を返す。ただの「約束」を、あの術師が守るはずがない。だから、私たちは夏油様の「解放」を優先することにした」

できるだけ無傷で肉体^{からだ}を取り戻すなんて、甘い考えは捨てる。

そう告げる菜々子に、美々子が続く。

「10月31日。私たちはまだ、どこで何をするのかは知らない。でも、内通者なら知っているはず……。断片的だけど、内通者のほうは居場所の情報もある」

悠仁を見る二人の瞳に、ほの暗い意志が宿る。それは、目的のために全てを捧げた狩人に似た狂気。

「血でも、他のものでも、可能なものは全て用意する。だから改めて、私たちに協力して

ほしい」

悠仁と、菜々子と美々子の間に結ばれた縛りは4つ。

1. 菜々子と美々子が術師に協力する10月31日まで、悠仁は夏油の肉体からだを殺さないこと。(術師が仕掛けてきた場合については、この限りではない)

2. 菜々子と美々子は、悠仁に血の施しを行うこと。

3. 死体を操る術式と術師について、情報を集め、共有すること。

4. 伝える情報は偽らないこと。

互いに得た情報について、第三者に伝えることを制限はしていない。だが……。

「内通者のほうはいいけど、あの術師に俺から仕掛けるのは無理だぞ？ 殺せんし」

10月31日までと期間を定めた縛りのため、それまでは、互いに決めたことを破る訳にはいかない。

「そこは私達にも考えがある」

問題ないと答える菜々子と美々子の顔を見て、悠仁も頷いた。

「そっか。じゃあまず……スマホ買いに行こうぜ」

画面にヒビの入ったスマホを受け取った悠仁が、二人と別れて繁華街のほうへ足を向ける。

うさぎ耳のカバーがポケットに引っ掛かるのを直していると、自身のスマホに連絡が入った。

内容を確認すれば釘崎からで、「来い」の文字と共にファミレスのURLが届いている。

それに返信をしつつ、悠仁は報告の内容に考えを巡らせた。

記録—— 2018年10月

高専一年生 虎杖悠仁が呪詛師二名と遭遇

日中 繁華街付近での遭遇のため

非術師への影響を考慮し 呪具の使用は制限

数分の戦闘の後 呪詛師二人は逃亡

人的 物的被害の無いことから

両面宿儺の器 虎杖悠仁への接触が目的と推察される

現場にて 呪詛師が術式に使用したスマートフォンを回収

端末の解析を——

「伊地知。その報告書、ちょっと待って」

キーボードを打つ伊地知の背中に、五条から制止の言葉が掛かった。

振り返れば、回収したスマホの解析結果を手にした五条が立っている。

「これも内通者の件が絡んでいる。引き続き歌姫とだけ進めて」

その言葉に頷いた伊地知が報告書を削除し、歌姫の任務予定の確認を急ぐ。そして自身の予定を調整し、補助監督としてのスケジュールを組み直した。

10月19日。任務へ赴く高専東京校の一年生四人は、引率に京都校の歌姫を迎え、珍しくワゴン車に乗り合わせていた。

急な斜面に沿って蛇行した道を、車はゆっくりと進んでいる。

「五条から内通者の話は聞いてるわね」

助手席から振り向いて確認する歌姫の問いかけに、四人が返事を返す。運転をする伊地知も、小さく頷いた。

おそらく、呪詛師と通じているのは2人以上。

1人は学長以上の上層部で、歌姫の力では、どうすることもできない相手。

今回のターゲットはもう1人のほうで、その上層部に情報を流す役だ。

「虎杖が回収した端末の情報から、メカ丸……与幸吉むたこうきちの居場所を割り出しました。信憑性は高いと踏んでいるわ」

歌姫の調査では怪しい者がいなかったため、消去法でメカ丸に容疑を掛け、捕縛する予定ではあった。

しかし、本当にメカ丸が内通者である証拠が出たとすると、苦いものがある。

メカ丸の傀儡操術かいらいせうじゆつによる傀儡くわいの操作範囲は、天与呪縛の力で日本全土に及ぶ。

「登録してない傀儡があれば、内通者としての仕事はいくらでもこなせるからね」

学生たちの質問に答えながら窓の外を眺めれば、ここよりも標高の高い、目的地のあたりに帳が降りるのが見える。

歌姫が身を乗り出せば、学生たちも窓側に寄った。帳が降りているのは、皆も確認できただろう。

あの帳はメカ丸が降ろした？ それよりも、呪詛師たちに高専こうせんがあの子を見つけたのがばれたと考えるのが妥当か？

だとしたら、口封じに消されるのは明白。

「伊地知！ あと何分掛かる？」

「10分は掛かります。直線距離だと3キロほどですが……」

歌姫の剣幕に、ハンドルを握る伊地知の声が尻すぼみになる。

メカ丸の強さは、歌姫も十分に理解しているつもりだ。しかし、彼を殺すために来た呪詛師が10分も掛けるはずはないだろう。

どうせばれているなら、目立たぬようにと、トべる五条を置いてきたのが悔やまれた。後ろに座る四人を歌姫が振り返れば、目のあつた伏黒が悠仁のほうに視線を向けた。それを見て、交流会でモニタ越しに見た彼の身体能力と、五条の言葉を思い出す。

——悠仁も、僕に並ぶ術師になるよ。まあ、ちよつとやりすぎな時が……。

後に何か言つてはいたが、実力は五条のお墨付き。それに、交流会で東堂に並ぶ活躍をしたのも事実。

「虎杖は先に行け！ 帳が破れるなら、そのままメカ丸の確保！」

危なくなつたら戻れと続けた歌姫の言葉に頷いた悠仁は車両を飛び出し、蹴つた道路に足跡を残して森の中に跳びこんだ。

真人の領域展開——自閉円頓裏を前にして冷汗をかいていた与幸吉は、術式の効果が消えたと同時に笑みを浮かべる。

シン・陰流「簡易領域」による無為転変の中和。危険な賭けだったが、自分を始末したと思つた真人は、こちらに背中を向けている。

その隙を逃さず、三本目の簡易領域を発動させれば、真人の身体は弾け飛んだ。

領域が解かれ、勝利の雄叫びを上げた与は、ずっとこちらを静観していた夏油に向き

直った。

夏油の降ろした帳。電波を阻害するこれを解消できれば外部と、五条悟と連絡がとれる。

余力は残っている。勝算もある。だから……勝って皆に会う。

その思いを込めてメカ丸のチャージを終えた時、操縦席の正面が崩れ、弾け飛んだはずの真人が姿を現した。

とつさに最後の簡易領域を構えるが、真人の掌はすぐそこに迫っている。

それでも、領域を握った腕を振り抜こうとすれば、ガラスの割れる音が連続して響き、辺りが濃い霧に包まれた。

白い霧に触れた真人の左腕——与^{むた}が最初に簡易領域で破壊した腕が崩れる。

変身も解けて、支えをなくした真人が操縦席の壁を滑り落ちた。

動きの鈍くなった真人を追撃しようとしたが、身体が痺れて動かない。

息苦しさや痛みは感じない。だが、指先すら動かせない。

呪術師としての矜持も捨て、やっとの思いで得た体の感覚が無くなっていく。

これでは今までと同じ……それ以下だ。

そんなのは嫌だ。何のために呪霊の力まで借りて、ここまでやったと思っている。

俺は皆に会うために……。皆に？

あれ。

なぜ俺は、こんなに必死に生きようとしているんだろう……。

大きく崩れたダム为天端に、白い霧の沈むフラスコ——感覚麻痺の霧を握った悠仁が着地する。

帳を通り抜けると巨大ロボが目に入ったのには驚いたが、発している呪力がメカ丸と同じだったため、すぐにターゲットだと認識することができた。

走り寄っていけば、そのターゲットの頭部を破壊する真人の姿が見えたため、今度こそ確実に狩るために感覚麻痺の霧を複数投げた訳だが……。

ロボットの頭部を掴んで支える、真人の変形した身体が崩れたのを見て、悠仁は剣の柄がついた巨大な石鎚——教会の石鎚を掲げて地面を蹴る。

力に任せて真人の通った穴を拡げるように殴れば、操縦席の上半分はなくなり、立ち込めていた霧が飛散した。

このまま真人に石鎚を振り下ろしたいところだが、今回の任務は与むたの捕縛。

こちらに向かってくる新しい呪霊の気配を感じて、意識を飛ばしている与むたを掴み、ダムの天端に飛び移った。

間を置かずに、向かってきていた芋虫に似た巨大な呪霊が、操縦席ごと真人を飲み込

む。

真人の仲間がいるであろう対岸を確認しようとしたが、呪霊がダム湖に飛び込んだことで水しぶきが上がり、視界を遮った。

与むたを雑に転がして獣狩りの短銃を構えていれば、水しぶきが落ち着くとともに帳むたが上がつた。

与むたの捕縛から三日後。高専の医務室にて、ベッドで眠る与むたを家人、五条、歌姫の三人が囲んでいた。

「怪我はかすり傷程度だったし、身体は健康なくらいだよ」

これ以上は反転術式での治療ができないと、家人が困ったように続ける。

「ただ……生気が感じられないね」

何の薬を使ったのかと歌姫に問いかけていけば、隣に座る五条が口を開きかけて止まった。

家人が五条に視線を向けると、あからさまに顔を背ける。

「どうした五条。遠慮せずに言え」

珍しい反応を見せる彼を促せば、組んでいた足を正した五条が、覇気のない声で答え

た。

「前に回収した青い薬品……脳を麻痺させる精神麻酔。あれに耐性のある人間でも麻痺する程のものを3本」

意味は分からなかっただろうが、危険さだけは理解した歌姫が絶句する。

これには家入も、小さな声を絞り出すのがやっとだった。

「……生きていたのが奇跡だな」

#14 淀み (渋谷事変1)

2018年10月31日 青山霊園

帳の降ろされた渋谷から幾分か離れたその場所で、待機命令を出された悠仁と一級呪術師の冥冥^{めいめい}、その弟の憂憂^{ういうい}が顔を合わせた。

冥冥は交流会の時にカラスを通して見ていたため、悠仁のことを一方的に知っている。だが話をするのは今回が初めてだ。

問題児と言われている悠仁だが、その実力と、扱う呪具の希少性の高さから、術師たちの間で話題に上がることも多い。

自分の名前で一級呪術師に推薦したのも、五条の「お気持ち」だけが理由ではなかった。

悠仁が渋谷周辺に来ている術師を気にしているようなので、彼の同期三人がそれぞれ七海、禪院、日下部の班に居ることを伝えてやる。

それと、メカ丸の見舞いで東京校に来ていた歌姫と生徒も、渋谷周辺で待機中だと言

えば、悠仁の目が泳いだ。

その様子を見て、姿勢を崩してくつろいでいた冥冥が笑う。

「虎杖君、また何かやらかしたんだろう？ 五条君たちの学生時代を思い出すよ」

「五条先生……たち？」

首をかしげた悠仁が五条の学生時代に興味を示したが、本人が話していないなら言うべきではない。

「気になるなら、本人や夜蛾学長に聞いてごらん」

その言葉に素直に頷く悠仁と、隣で不満げに唇を尖らせる憂憂に視線をやりながらあの頃を思い返せば、胃を押さえている夜蛾の姿が浮かんだ。

そして、その光景が、最近になってまた見られるようになったと思ひ至る。

優秀な術師とは、同時に問題児でもあるらしい。

それから雑談を交え、互いの立ち回りなどを確認していれば、明治神宮前駅に渋谷と同様の帳が降りたと連絡が入った。

明治神宮前駅の全体を覆う“一般人を閉じこめる帳”。その内側に、副都心線——渋谷に繋がるホームを中心とした“術師を入れない帳”が降りている。

冥冥が駅構内にカラスを飛ばしたところ、二つの帳の間、地下4階で改造人間が一般人を襲っているのが確認された。

見かけた人数が予想より少ないことから、逃げ場を失った一般人のほとんどは、術師の入れない地下5階に追いやられているのだろう。

そして、冥冥のカラスが狩られたのが地下1階と地下2階の間であり、ここに「帳」を降ろしている呪霊か呪詛師がいると推測された。

「虎杖君はここから入って、地下2階の呪霊か呪詛師を始末。もしツギハギ顔の呪霊なら、君がやりたいだろう？」

2番出口の地下へと続く階段の前に立ち、冥冥が悠仁に声をかける。

改造人間から一般人を救出する冥冥と憂憂の二人は、地上を通り、地下4階へ直通の7番出口へ向かうらしい。

「戦力を分けるのはどうかと思ったが、グズグズしては地下4階の一般人が全滅する。地下2階の状況も分からないしね。……期待してるよ。虎杖君」

悠仁が首を縦にふれば、髪に隠れた冥冥の口元が弧を描いた。

悠仁が地下へ足を踏み入れれば、すぐに鮮血のにおいが漂ってきた。

目的の地下2階、血の香りが濃くなるほうへ進めば、バツタに似た特徴をもつ呪霊が、人間を抱えているのが見える。

呪霊に掴まれた人の手がビクリと震える。どうやら、生きたまま頭を齧られているらしい。

最初の狩人が獣を狩ったのは、「弔い」のためである。

それは、獣となった人々が「せめて安らかに眠り、二度と辛い悪夢に目覚めぬように」と願った、葬送の儀式。

だが、人を手にかける瞬間に、相手を案ずる者などいるだろうか。

狩人たちは、それぞれの目的のために戦い、人も獣も、数え切れぬほど狩ってきた。

だから悠仁も、殺すことを非難はしないし、できない。だが……。

バツタに齧られている人間の手が、まだ反応を示す様子が目に映る。

……不要な痛みや恐怖を与えるというなら、話は別だ。

悠仁の手に、ノコギリ刃で縁取られた円盤機構を有した異形のメイス——回転ノコギリが握られる。

ノコギリ刃を床に触れさせたまま引きずって歩けば、その床を削る音にバツタの呪霊が振り返った。

バツタ。すなわち「虫」——人の淀みの根源。狩りの夜に轟く汚物。

人間の負の感情から生まれる呪霊に、これほど見合った姿もないだろう。

呪霊が話しかけてくるのを無視して回転ノコギリを担ぎ、その仕掛けを作動させる。ノコギリ刃の円盤が、高音を響かせて回転を始めた。

慌てて腰を上げた呪霊が動くより先に、悠仁の横薙ぎに振るった刃が呪霊を捉える。

回転を続けるその刃が、壁に押し付けられた肉を削り、血と共に撒き散らした。

血振りをすれば、武器を滴っていたそれが、倒れた呪霊と床に降りかかる。

——いまや夜は汚物に満ち、塗れ、溢れかえっている。素晴らしいじゃあないか。存分に狩り、殺したまえよ。

目の前の光景に、連盟の長の言葉を思い出し、「虫」を探すように血溜まりの中に目を走らせた。

その中に呪符らしきものが巻かれた杭を見つけ、悠仁は足をかける。

地下に溜まる血のにおいに、不快な呪霊共……これでは悪夢と同じだ。

ならば、相手が呪霊でも呪詛師でも関係ない。

「『虫』は踏み潰す……」

呪力の込められた杭を潰すと同時に帳が上がったため、悠仁は冥冥に見せるために杭

を回収する。

血塗れのまま渡せば憂鬱に何か言われそうだと思しながら、地下4階に繋がる階段を下りた。

改札の前で合流した三人は、改造人間がいなくなったのを確認し、地下5階へ向かう。先頭を走る、怪我を負った様子もない悠仁に、冥冥が声をかけた。

「凄いな虎杖君。私たちが地下4階に着く前に被ってしまうとは思わなかったよ」

一人で行かせても問題ないと思っただけだが、期待以上の働きだ。

術式は持っていないが、充分1級レベルに達している。

術式の相性など関係なく技量で押し切るため、強い術式を持っている者ほど、彼を相手にすれば苦戦するかもしれない。

近接戦を得意とする1級呪術師が相手でも、彼が苦戦する相手は多くないだろう。

そんなことを考えながら地下5階のホームに降り立てば、ドアの開いた電車が止まっている。先頭車両の前には、一人が佇んでいた。

冥冥がツギハギ顔の呪霊だと認識するより先に、隣にいた悠仁が回転ノコギリを作動して走り出した。

振りかぶったノコギリ刃の円盤が、閉まったドアの窓を砕く。

歪んだドアと割れた窓のすき間から、押し込められた改造人間が溢れそうになったと

き、渋谷方面へと車両が動き出した。

「虎杖君！」

制止のために声を上げた冥冥に、悠仁が振り向く。だが、謝るような身振りを見せた悠仁は、勢いよく最後尾車両の連結部に飛び移った。

「獄門疆 開門」

そう唱えた袈裟の男が、五条に歩み寄る。

久しいね。と掛けられた声に、振り返った五条の表情が強ばった時には、分散した獄門疆が拘束するように纏わりついた。

封印の確定した五条に相対し、袈裟の男——夏油の皮を被った術師が話を続ける。

自分の肉体が五条の声に反応し、自分の首を掴むという初めてのことに関心していれば、無量空処から目覚めたらしい誰かの足音が聞こえた。

車両に掴まったまま渋谷駅に着いた悠仁は、ホームに溢れる仮装した人々と、彼らに襲い掛かる改造人間たちの間から、五条の姿を確認した。

まだ自分に気づいていないらしい火山頭とツギハギ、血を操る呪詛師——月の香りの

者が五条を標的にしているのを見て、姿勢を下げたままノコギリ刃を外したメイスを改造人間に向ける。

幾人かの改造人間を屠ったところで意識が遠のき……目覚めた時には改造人間の姿が消えていた。

立ったまま気絶している人々の向こうで、ツギハギたちも動きを止めている。

五条の呪力が感じられないのでホームを見渡せば、少し先に、死体を操る術師の後ろ姿が見えた。

特級呪霊2体と、呪胎九相図の受肉体。 “縛り” で殺せない術師。 ……ここにいたら死ぬ。

悠仁が階段を上るために袈裟を着ている術師のほうへ走り寄れば、異様な気配のする呪物に拘束された五条の姿が見えた。

階段の前で足を止めた悠仁と、五条の視線が合う。

「五条先生。必ず、こいつら狩りに戻ってくるから……待ってて」
「……期待してるよ」

生徒の頼もしい言葉と力強い声に、表情を緩めた五条が答えていると、新しい気配が近づいてきた。

目覚めた真人が悠仁に仕掛ければ、白い霧のような跡を残し、悠仁の姿が消える。虚を衝かれた真人が瞬きを繰り返し、次に悠仁の姿を視界に捉えた時には、すでに階段を駆け上がっていた。

古い狩人の遺骨——遺志から「加速」の業を引き出す、古い狩人の遺骨。懐かしい品の登場に、袈裟の男が笑い声をあげた。

「あんな骨董品、まだ使ってる奴がいるとはね」

その言葉に五条が目を見開いたが、もはや気にすることでもない。

悪夢に囚われた者は誰しも、背負った業からは逃れられない。

「赤子の赤子、ずっと先の赤子まで……」

永遠に血に呪われ続ける……憐れな狩人だ。

1 5 月の香り（渋谷事変2）

渋谷駅、地下5階ホーム。

地面にめり込んだ獄門疆じくもんきやうを前にした夏油のもとへ、真人に続き目を覚ました漏瑚じようこと
 脹相ちようそう、陀良だじんが集まっていた。

全員が揃っているのを確認して、夏油は先ほどの顛末を簡単に告げる。

「……それで、虎杖悠仁が逃げたんだよね。もうじき術師が総力挙げてここに来るよ」

そう言葉にしなから、大して困った様子もなく、夏油は特級たちを見回す。

「私はここに残るけど、皆はどうする？」

夏油が問いかければ、動かせない獄門疆を興味なさげに一瞥した脹相が口を開いた。

「俺は虎杖悠仁を保護する。その後は弟たちと共に、高専に保管されている他の弟たちを回収する」

五条を相手にしていたときとは違い、やる気を見せる脹相に、漏瑚が咎めるような視

線を向ける。

「虎杖を保護だと？ あいつは指を喰わせて宿儺にする」

そうして当初からの計画を語る漏瑚に、脹相も目を向けた。

「弟に拾い食いなどさせん」

「そもそも、弟ではないだろう」

その言葉に顔を歪めた脹相と、苛立った様子の漏瑚がにらみ合う。

やんのか、と喧嘩腰になった二人の間に、落ち着くようにと言った真人が割り込んだ。

「あのさ、二人には悪いけど……^{あいつ}虎杖、俺の獲物を二回も横取りしててムカつくんだよね」

そう発した真人に視線が集まれば、彼はおどけるように両手の平を上に向けて肩をすくめる。

「だから俺は、虎杖殺したいかな」

「言い残すことはそれだけか？」

すかさず臨戦態勢に入った脹相と、それに応じようとする真人に、今度は見かねた夏油が止めに入った。

漏瑚と真人の間で、宿儺を復活させる有利性とリスクが問答されれば、話に興味を

失った脹相は輪から外れる。

それを気にせず、宿讎さえいれば呪いの時代が来ると確信する漏瑚が、人間の性質と呪いの在り方を説いた。

人間の表に出る正の感情や行動には必ず裏があり、それらは嘘に塗れている。

対して負の感情——憎悪や殺意などは偽りのない真実であり、そこから生まれた呪いこそが、真に純粹な本物の“人間”である、と。

「死すら恐れず、目的のために裏表のない道を歩む。それが偽物共にはない呪いの真髄だ」

そう言い切る漏瑚は、しつかりとした軸を持つて物事を考えている。

しかし、どれほど立派な考えを持つていようと、どんな命も、真人にとっては無意味で無価値。ただ巡るだけのもの。

それ故に、真人は漏瑚の考えを否定する。

「違うつしよ。軸がブレようと一貫性がなかりと、偽りなく欲求の赴くままに行動する。それが俺達、呪いだ」

その返しに顔をしかめる漏瑚を見て、真人はこのまま話を続けては漏瑚とも争いになると判断する。

「呪霊の在り方については、このくらいにしておこう。……虎杖のほうは、話し合いじゃ

決まらないだろうし……」

虎杖は殺したいが、ここで漏瑚たちと争っても仕方がない。

真人は話の流れを変えるために、今後の行動を定めるゲームを持ちかけることにした。

「ここはゲームにしよう。俺が先に虎杖と遭遇エンカウントしたら、奴を殺す。漏瑚が先なら、指を差し出して宿讎に力を戻せばいい。どう？」

名案だと言いたげな真人に、漏瑚が答えるよりも先に脹相が反応した。

「どちらも却下だ。弟ちに手出ししたら殺す。いいな？」

「脹相、なんで呪霊側こっちにいんの？ まあ、その時はお前も殺すよ」

脹相の態度に慣れたように返した真人が、ゲーム開始の掛け声とともに階段の方へ移動する。

それに続き、脹相と陀良が走っていくのを見て、その場に残ろうとしていた漏瑚もゲームに参加すべく後を追った。

騒さわがしく階段を駆け上っていった特級たちを見送り、獄門疆の前に胡坐をかいた夏油は、計画と現状の相違点を確認する。

脹相たち呪胎九相図が虎杖悠仁を弟と認識したのは予定外だが、計画に支障はない。

それよりも……この肉体夏油を返せと言っていた双子が消えた。

内通者だった与むたの居場所を高専が突き止めたのは、あの二人の手引きだろう。……肝心の彼は眠っているらしいが。

もとより、双子は計画の頭数に入れていない。脅威にもなり得ないから放っておいたが……。

「そろそろ始末しておくか」

呟いた声は、静かな地下に吸い込まれた。

静かだった渋谷に改造人間が放たれたのを合図として、待機していた呪術師たちに帳への突入命令が出された。

同時に「術師を入れない帳」が降りているのを確認した七海は、伏黒と猪野に一般人の保護を任せる。

自分も帳を降ろしている敵を探そうと移動を始めたところで、おそらく自分を呼ぶ声——「ナナミン」と叫ぶ大声が響いてきた。

合流した悠仁から伝えられたのは、先ほども叫んでいた五条が封印されたというものの。

信じがたい話だが、あの五条が身動きをとれず、呪力も感じられなかったのならば、事実である可能性が高いと判断する。

続いて駅構内の呪霊や一般人の状況を話す悠仁の制服に、血が染み込んでいるのを七海は確認した。

悠仁が見てきた情報は有用だが、冥冥と行動しているはずの彼が一人で現れたことはいただけない。

ひと通り報告を聞き終えたところで、サングラスを押さえた七海が口を開いた。

「一度退く判断をしたのは賢明ですが……。虎杖君、あとで説教です」
今では定番となった七海のその言葉に、悠仁が不満の声を返す。

「ナナミン、会う度に説教するじゃん」

そんな反省する様子のない悠仁の頭に、後ろに立っていた伏黒の拳が入った。

悠仁から得た情報の展開と、いくつかの要請を通すため、帳の外へ向かう七海は三人に「術師を入れない帳」を解くように言い残した。

それを受けて移動した伏黒たちは、帳の「外」で一番目立つ場所——Cタワーを見上げる。

通常、帳を降ろしている術師は帳の中にいるものだが、明治神宮前駅に降りていたも

のでは、帳の基となる杭を帳の外に置いていたらしい。

発見・破壊されるリスクを上げ、それにより帳の強度も上げているならば、先ほど筋力バカ虎杖の攻撃が通らなかつたのも納得できる。

そう伏黒は結論付け、術師が居るであろうタワー屋上への移動手段として鶴を召喚する。

虎杖と猪野を引つ張り上げるように指示を出し、屋上へと羽ばたかせた。

二人を送り出してから数十秒後。伏黒は自分からは地上の様子が見えない位置へと人影が落ちていくのを確認した。

落下地点に移動すれば、地上41階から落ちたにも関わらず、外傷のない中年の男がクレーターの中心に倒れている。

その不審な姿から目を逸らさずに、伏黒は追いついてきた悠仁に声をかけた。

「できれば殺すな。敵の情報を吐かせたい。……あと、薬は使うな」

夜蛾学長に何度も言われたことを念のために付け加えれば、伏黒の隣に立った悠仁が軽い口調で返す。

「オツケー！ ……あ、毒メスは？ 解毒剤 白い丸薬もあるぞ」

「……なんで毒ならいいと思った？」

あと、薬を使うなど言ったのは聞こえなかつたのか？

なぜか自信満々に解毒剤の効力を語った悠仁に対し、面倒くさくなった伏黒は小さくため息をつく。

一応、どこで手に入れたものだと問えば、少しの間を置いて「拾った」と答えが返ってきた。

こいつ、拾った薬を飲むのか……。ゲテモノ喰いつてレベルじゃねえぞ。

「絶対に使うな」

それだけ言つて、伏黒は起き上がる呪詛師に向き直つた。

重傷を負つた猪野を外へ運ぶ伏黒と別れて、渋谷駅へ向かう悠仁は高架橋を走る。

地上は自分が駅を出た時——「術師を入れない帳」が降りる前に通つた時とは違い、改造人間で溢れていた。

その光景を見て、逃げ惑う人々と、五条を助けることで救われる人間の命を考える。今、採るべき選択は——。

「明太子！」

ふいに聞こえた馴染みのある語彙に、悠仁は高架下を見下ろす。

そこにはメガホンを持ってピースサインを決める、頼れる先輩がいた。

「狗巻先輩……」

名前を呼べば、ここは任せろと言いたげな狗巻に、先を急ぐよう促される。

それに頷き、悠仁は渋谷駅の構内へと駆け込んだ。

構内へ入れば、通り抜けるのに苦勞するほどひしめき合っていた一般人が居なくなっている。

それが気になりつつ、無人となったフロアを抜けて階下へと歩を進めれば、月の香りに近づいているのがわかった。

上位者、月の魔物の血の香り。芳しく、しかし悪夢を思い出させる嫌な香り……。

月の香りを持つ者でも、高専の蔵の中にいた6人のように、息絶えた者ならば弔おう。だが、生きているなら……上位者の血を引く者は狩らねばならない。

階段を下りきれば、フロアの中央に月の香りのする者——鼻筋に横一文字の刺青の入った男が立っている。

敵の姿を確認して、悠仁は菜々子と美々子に貰った血を取り出した。

双子の血を輸血すれば、通常の輸血液を使用したときとは違い、絶えず血が満ちる感覚を得られる。

その感覚が消えないうちに、悠仁が血なまぐささを感じさせる棘を備えた腰丈ほどの槌——瀉血しゃけつの槌を握れば、対峙する男が声をかけてきた。

「悠仁、俺は——」

焦りを含んだその声を無視して、瀉血の槌を自身の腹に突き立てる。

はらわたの奥に溜まる、上位者の嫌な血を吸わせれば、相手の息をのむ音が聞こえた。血の抜ける感覚と共に槌を引き抜くと、自身の血を纏い、身の丈以上の長さで鋭利な棘状の先端を得たそれが現れる。

瀉血により失われた血は、先に輸血していた双子の血の効力によって満たされていった。

悠仁が両手で槌を握り、少し遠かった間合いを詰める。

その勢いに任せて、まだ呆けている相手に瀉血の槌を振り下ろした。

16 前徴（渋谷事変3）

目的の一致しない特級呪霊たちと別れた脹相ちようそうは、陀良だじんが吸収したことで無人となったフロアを見渡した。

悠仁を探しに街へ出たいところだが、五条救出のために彼がここへ戻ってくることを考えると、入れ違いになることは避けたい。

壊相えそうと血塗けちずに任せることは、前回が敵として対峙しているため控えた方がいいだろう。

月の香りで、俺達と血が繋がっていることには悠仁も気づいていると思うが……。

脹相が駅構内に留まることを決めて、フロア全体が射程に入ることを確認してれば、外に降りていた「術師を入れない帳」が解けた。

微かに血のにおいが下りてくるのを感じながら、上の階へ続く階段に意識を向ける。いつでも戦闘に入れるように指を動かして慣らしていると、漂う血臭に芳しい月の香りが混じり、悠仁が階段を下りてきたのが見えた。

返り血と埃で汚れてはいるが、怪我のない姿を見て脹相は安心する。目の合った悠仁は立ち止まり、どこからかガラス製の注射器を取り出した。

血の入ったそれを慣れた手つきで脚に打ち込んだ悠仁が、空になった器を投げ捨てる。

割れた注射器から微かに香る血のにおいは、どこかで会った人間のものである気がした。

脹相が悠仁に声をかけようとすれば、霧となって消えた注射器と入れ替わるように、悠仁の手におぞましい気配のする棘のついた武器が握られる。

「悠仁、俺は——」

戦意に満ちた弟を止めようと慌てて発した脹相の言葉は、兄だと名乗る前に詰まっ途切れた。

悠仁の握る武器——瀉血しゃけつの槌が彼の腹に突き刺され、おびただしい量の血が噴き出す。

悠仁は他の兄弟九相とは違い、呪力を血液に変換できない。

初めて見る弟の暴拳に動揺し、硬直した脹相に、濃い月の香りと血を纏わせ、鋭利な棘状となった武器の先端が振り下ろされた。

瀉血の槌が床を叩けば、含み切れなかった血が零れるように跡を残した。

紙一重で横に跳んだ脹相は、赤黒く染まった悠仁の腹に傷のないことを見て、その力を与えた存在——『赤子』を愛する月の魔物の執着を確認する。

兄弟の中で一人だけ、人間として生まれ育った末の弟からの攻撃。

流血沙汰では済まないことになっているが、今まで会いに来なかつたことに拗ねているのだと考えれば、可愛いものだと思えなくもない。ならば——。

「兄として、気の済むまで相手になろう」

呪力から血液を生み出した脹相は、そう呟いて握った拳を悠仁に向けた。

合わさった両手の先から射出された血を回避した悠仁は、先程からの脹相の動きに違和感を覚える。

体術も術式も、攻撃の全てに殺意が感じられない。

打撃は骨に響かない程度に加減されているし、血を撃ち出す術式——穿血せんけつも急所を外し、少し動けば当たらない位置を狙ってくる。

しかし殺されるつもりはないらしく、近づけば周囲に浮かぶ血液を爆ぜさせた。

それにより距離が開けば、少しの溜めの後に、また穿血が飛んでくる。

近接戦に持ち込むには、あの浮かんでいる血液を先に潰すか、目眩ましでもしなければならぬだろう。

ポケットに手を入れた悠仁は、星の光を宿す三対の角を持った手のひらサイズのナメクジ——彼方への呼びかけを取り出し、両手で掴んだそれを頭上に高く掲げる。

強く握れば空間が暗く歪み、手元に広がった小さな宇宙が星の小爆発を起こした。眩い光を放つ小さな星が無数に放たれるが、そのほとんどは指向性を持つ前に地面へと落ちる。十にも満たない残った光だけが、流星となつて脹相の周囲へ降り注いだ。

放たれた強い光が隠れ蓑となつた一瞬、脹相は悠仁の姿を見失う。

だが一直線に向かつてくる足音を聞き、百斂びやくれんにより圧縮した血液を包んだ両手を、その方向へ向けた。

光が収まれば、脹相の目が武器を振りかぶる悠仁を捉える。

先程より近いが、彼の反射神経ならば、この距離で撃つても難なく避ける。そう思つて穿血を打ち出した矢先、悠仁の体勢が傾いた。

水のはねる音で、床の血溜まりに悠仁が足をとられたことを理解する。

悠仁の瀉血により撒かれた血液は凝固していかない。脹相の赤血操術によつて垂れた血液もまた、凝固しないよう調整されていた。

あの強い光の中を駆けてきたのだ。脹相の周りが、瓦礫に隠れた足元が血に濡れていることが、見えていたはずがない。

「悠仁……」

上体を後ろに反らした悠仁の身体が崩れ落ちるのを見て、脹相の構えが解かれる。

額を流れる血で赤く染まる悠仁に手を伸ばした脹相の瞳に、膝をつき両目を閉じた悠仁が瀉血の槌を握りしめているのが映った。

兄だと呟いていた相手が自分の名前を呼ぶのを聞きながら、悠仁は自分の失態に内心で舌打ちする。あのまま追撃されていたら危なかった。

相手に自分を殺す気はない。それどころか、膝をつけば心配までされている。

それならばと、悠仁は額から血が流れるのをそのままにして、血が入らないよう目を閉じ、相手が近づいてくるのを待った。

正確な方向は分からないが、十分に近づいた相手の動きが止まる。それを合図にして、瀉血の槌の先端を潰すように床に突き立てた。

飛び散る血と共に放たれる衝撃波に、構えを解いていた脹相の身体が吹き飛ぶ。

それは狩武器には珍しい、全方位に向けた攻撃。威力は申し分なく、予備動作も少ないが……使用者は発狂する。

額の血を乱雑に拭った悠仁は目を開き、身体が割れたようにして流れ出る血と酷い頭痛や眩暈——発狂状態を抑える鎮静剤を飲む間を惜しんで駆ける。

衝撃波でついた細かな傷から流れる血で、脹相へ近づくほど、彼の月の香りが強く感じられるようになった。

だが、体勢を整えるために床に手をつく脹相を射程に捉えたとき、悠仁の身体が、初めて月の魔物と対峙したときのように固まる。

自身に宿る月の魔物の気配が大きくなり、これ以上前へ進むことを拒んでいた。心なしか、眩暈も酷くなった気がする。

脹相を見れば似た現象が起こっているのか、彼も頭を押さえながら立ち上がった。

こちらを向いた脹相が一步踏み出すのを途中で止め、持ち上げていた足を後ろに戻す。

「互いに怪我を負わせたことを、月の魔物は怒っているらしい」

脹相が言葉を発したことで、悠仁は殺す気だった自分と、そうではない脹相で強制力に差があることを理解する。悠仁は口も動かさない状態だ。

「……落ち着いたら迎えに来る」

ふらつく身体でそう言い残した脹相が見えなくなっただけなら経てば、悠仁も身体を動かせるようになった。

痛む腕を動かして輸血液を使用すれば、傷が塞がり、流れ出ていた血は止まる。

しかし、月の魔物の戒めのつもりなのか、脹相につけられた額の傷だけは治らなかつ

た。

#17 英雄（渋谷事変4）

次に会ったら今度こそ殺す、と心に決めた悠仁が脹相の動きを思い返せば、収まったはずの月の魔物の気配が再び大きくなる。

それを忌々しく思いながら、地下へと続く階段に足を向けた悠仁を、少女の声呼び止めた。

「虎杖、待って」

二ヶ月足らずのうちに聞き慣れた声に振り返れば、セーラー服姿の菜々子と美々子が立っている。

「日付が変わるまで、まだ一時間以上ある」

そう言った菜々子が気になっているのは、悠仁と交わした縛りについてだった。

悠仁と二人の間にある縛り——菜々子と美々子が術師に協力する10月31日まで、悠仁は夏油の肉体からだを殺さないこと。

術師が仕掛けてきた場合については、この限りではない。という保険は設けている。

だが、こちらが戦う意思を持つて出向いた時点で「仕掛けた」と認識される可能性を考慮するべきだと言いたいのだろう。

菜々子と美々子の目的が「夏油の肉体からだを取り戻すこと」だったため交わされたこの縛りは、「手段を問わず夏油を『解放』すること」に変わった時点で大きな枷となつていた。

「虎杖は、あの術師のところへ行かない方がいい」

含みを持たせた言い方をする美々子に悠仁が目を向ければ、隣に立つ菜々子が呪符を巻いた品を取り出した。

それから漂うのは、封印されても消えることのない濃い呪いの気配……。両面宿儺の指だ。

以前、悠仁が術師を殺せないことに関して「考えがある」と言つたのは、これのことか。

あの時、菜々子と美々子は考えていた。

大切な人を弄ぶ、あの術師を——殺したい程憎い相手を殺せない今、どうするべきか。

二人の出した答えは単純で、相手を殺せる、より強い者の力を借りること。

悠仁に、あの術師を殺せるだけの力があるかは分からなかった。しかし、呪詛師である二人が頼りにできる者は少ない。

だから悠仁を頼りにできないなら……彼の中にいる宿儺を頼るしかない。

呪符が解かれるのを黙って見ていた悠仁は、目の前に宿儺の指が差し出されたことで、彼の性格について念押しする。

「分かっているだろうけど、宿儺が頼みを聞くとは思えん」

宿儺の機嫌が悪ければ、何かを願うどころか、言葉を発する前に殺されるだろう。

「それでもいい。宿儺様に代わって」

間を置かずに返事をした二人の瞳を見れば、既に覚悟を決めているのが分かる。

ここで拒んでも、いずれは全ての指を喰うことになるのだ。今、二人の賭けに乗り、宿儺の指を喰うことにデメリットはないだろう。

「……死んでも文句言うなよ」

そう言った悠仁が、受け取った指を一口で飲み込む。

2本目の指を取り込んだ時に何が起こるかは、悠仁にも分からない。

本来なら、五条が見ているときに試しておくべきだったのだろうが、今更そんなことを言っても仕方がない。それに……。

——宿儺の力が強くなれば、煩わづらわしい月の魔物の気配も抑えることができるだろう

か。

そんな思いが、指を取り込むのを後押ししていた。

目を閉じた悠仁の顔に刺青のような紋様が浮かぶのを見て、宿儺と対峙することに緊張した菜々子の喉が乾く。

しかし、指よりもずっと濃い呪いの力が膨れ上がったかと思えば、宿儺の気配の奥から、得体の知れない力が溢れてきた。

悠仁の顔に浮かんでいた紋様が掠れる。宿儺の力を外へと押し出すようなそれは、明らかに悠仁の呪力ではない。

「何、これ……」

そう呟いた菜々子が一步下がる。

頭を押さえた悠仁が小さな薬瓶——鎮静剤を手にしたが、力が入らなかったのか、瓶を落としてその場にうずくまった。

そんな悠仁の肩に、美々子が震える手で触れようとしたとき、背後に別の呪霊の気配が現れた。

振り返れば、火山のような頭を持つ、一つ目の呪霊。あの術師と居るのを何度も見たことがある。

「貴様ら、指を何本喰わせた！」

怒声と共に大きくなった呪霊の力に気圧され、悠仁に手を伸ばしていた美々子の身体

がよろめく。

スマホを持った菜々子が美々子の身体を引き寄せるのと、一瞬で距離を詰めた呪霊——
漏瑚じょうこの手から炎が放たれたのは同時だった。

渋谷駅からほど近い位置にある渋谷ストリーム前を、日下部に続いてパンダと順平が歩いている。

突入命令が出されてから、三人は狗巻と協力して一般人の避難を進めていた。周辺を見て回った限り、取り残された人間はもういないだろう。

それでも一般人の捜索を続けようとする日下部に、黙って従っていたパンダが提案した。

「そろそろ悟のそこ向かおうぜ。副都心線の地下5階つて、どう行けばいいんだ？」

土地勘がないため、パンダは日下部に案内を急かした。それに答えない日下部を見て、隣で話を聞いていた順平がパンダに返す。

「この先から地下に入れるよ。両面宿儺の指の気配がしたし、僕も向かいたいです。

……虎杖君かも」

途中から日下部に向けて話した順平に、トレンチコートのポケットに手を入れた日下

部が前を向いたまま答えた。

「おい、ひよつ子が他人の心配してんなよ。前に助けてもらったからって、恩……」

「恩返しとか、他人の為に命かけたりしませんよ」

言葉を遮り、強い口調で返した順平に、日下部とパンダが振り向く。

「『自分の』大切なものを傷つけられたらムカつきますよね？ それだけです」

それは屁理屈だろうと、話に聞いていたより頑固そうな順平の言葉に、日下部が頭をかいた。

こちららも屁理屈で一般人の捜索を続けさせようとすれば、人のいいパンダはすぐに建物内を調べに向かうが、順平は動かなかった。

「ほら、吉野も建物の中を見回ってこい」

「……日下部さん、地下5階に行く気ないですよね？」

パンダが居なくなったタイミングでかけられる言葉に、日下部はため息をついて続きを促す。

「それが賢明だと思えます。正直に言って、僕も行きたくはありません。……でも僕は、虎杖君に協力すると決めました」

日下部が順平に向き直れば、存外、意志の強い瞳をしている。だが、今の渋谷を動き回るには力不足だ。

何かと理由をつけて引き留める日下部に、一人でも向かうと宣言する順平は少し視線を下げてから、嘯みしめるように呟いた。

「この選択を後悔するかもしれない。けれど……自分の泳ぐ水槽は、自分で選びます」
そのまま振り返らずに走っていく姿を見て、今年の一年生は問題児ばかりだと、補助監督たちがぼやいていたのを日下部は思い出した。

入れ替わりでパンダが戻ってきたため、簡単に事情を説明しながら準備運動として手足の筋肉を伸ばす。

それから仕方なく順平を追いかけようとしたところで、呪詛師らしき二人に声をかけられて足を止めた。

菜々子の術式により炎を逃れた美々子は、呪霊たちの集めていた指を喰つたらしい悠仁——宿儺から離れた位置に立つ。

先ほど感じた得体のしれない気配は鳴りを潜め、膨れ上がった宿儺の邪悪な威圧感に身体が震えた。

宿儺が制服に付いた埃をはらう。たったそれだけの動作からも目を離せないでいると、床に転がる小瓶を拾い、髪をかき上げた彼が呟いた。

「頭が高いな」

美々子が言葉の意味を理解するより早く、横にいた菜々子に頭を押さえこまれた。程なくして、隣で片膝をつく漏瑚の頭頂部が切り飛ばされる。

それを視界の隅に捉え、床に付くほど頭を下げた美々子の息が詰まった。菜々子が押さえてくれなければ、自分の首が飛んでいた。

「鎮静剤とは……血を嗜むなら血酒にしろ。小僧」

そう言つて小瓶を投げ捨てた宿儺が、悠々と歩いてきて美々子たちの前に立つ。

割れた瓶から零れた少量の液体は、離れているにも関わらず、むせ返るほど濃い血の香りがした。

約四ヶ月ぶりに身体の主導権を得た宿儺は、非常に機嫌が悪かった。

脹相と戦う悠仁の額から血が流れるのを生得領域から眺め、匂いたつ血の酒でも飲むとすれば、いつも以上に月の魔物が騒がしい。

ただでさえ、自分の過ごす空間が月の魔物の花畑——赤い月が浮かぶ狩人の夢であるのが気に食わないというのに、落ち着いて酒も飲めないことに苛立ちが募る。

しばらくして、月の魔物がやっと大人しくなったかと思えば、今度は暴れて自分に飛び掛かってきた。

定期的に繰り返される、何度目かわからない争いを始めようとしたところで、身体の主導権が宿儺に渡り、今に至る。

結局、血酒は一滴も飲めていなかった。

悠仁に指を喰わせた三人の前に立ち、宿儺は苛立ちのままに声をかけた。

「ガキ共、まずはオマエらだ。俺に何か話があるのだろう。指一本分くらいは聞いてやる」

言ってみろ、と促せば、二人が願ったのは額に縫い目のある男を殺すこと。……どこかで聞いた話だ。

だが、思い出せないなら大したことではない。それよりも、指の一、二本で自分に指図できると思っているのが不愉快だ。

「面を上げる」

宿儺が怒りのはけ口に二人を細切れにしようとして——向けられた顔に見覚えがあると気が付いた。

「……小僧が血の施しを受けているガキ共か」

悠仁^{神人}は一見、人との繋がりに淡泊に見えるが、その実「血の繋がりに関する執着心が異常に強い。殺せば面倒なことになるだろう」。

例えば、「俺から血を奪っておいて、自分だけ血が得られると思うなよ」ぐらいのこと

は言うだろうし、血酒も儀式素材も全て捨てる。

これから殺す人間のことなど考えたこともなかったが、今回は殺すことで発生するデメリットが大きい。

天上天下唯我独尊。己の快・不快のみが生きる指針とまで言われた両面宿儺が、損得勘定で行動を決めた。

「失せろガキ共。……目障りだ」

美々子と菜々子の手をつく床の間際を抉り取るに止めて、さらに苛立ちが募った宿儺は漏瑚に向き直った。

漏瑚の亡骸の前で、裏梅に再会する意思を告げた宿儺は、伏黒の術式により調伏の儀が行われている交差点に降り立った。

仮死状態で倒れている伏黒に近づき、その身体に反転術式をかける。

「お前を殺すのは小僧だと言っただろう。伏黒恵」

意識のない伏黒にそれだけを告げ、宿儺は悠然と立つ式神に視線を移し、その姿を観察する。

「……味見、といった所だな」

今度こそ、憂き晴らしにはちょうどいいと、今日の苛立ちを全てぶつけるために宿儺

は構えた。

領域展開の末、更地となった渋谷の一角を見晴らせる位置に宿儺が立つ。

「小僧、これでお前も英雄だな」

その言葉と共に宿儺の気配は消え、目覚めた悠仁が目の前の光景を見てこぼしたのは、乾いた笑いだった。

「宿儺なら、五条先生にも勝てるかな……」

両面宿儺。覚めない悪夢の中で見つけた、呪詛に塗れた死蟻の指。

あの時、これで何かが変わると、夜の闇に細く差し込んだ導きの光に縋らずにはいられなかった。

たとえ、手練り寄せたそれが……目も眩むような欺瞞ぎまんの糸だと気づいていても。

狩人は罪人の末裔だと、ある男が言っていた。

ヤーナムの地下深くに広がる神の墓地から聖体を持ち帰り、血の救いを……獣の病をもたらし古い学び舎、ビルゲンワース。

狩人は、悪夢の内に隠された「秘密」を求める。

それは「知」を求めて漁村を蹂躪した冒濫的殺戮者……貪欲な血狂い共と呼ばれた探求者たるビルゲンワースの末裔である証だ。

そんな「血」を求める、罪人の末裔たる狩人が。呪いを宿した狂人が。人を助ける？ 友達になれる？

獣を殺すしか能のない……人殺しの獣風情が。語ることすら烏滸がましい。

——奴らに報いを……赤子の赤子、ずっと先の赤子まで、永遠に血に呪われるがいい……。

「不吉に生まれ……望まれず暗澹あんたんと生きるがいい……」

漁村で聞いた呪詛の続きを呟く。

狩人が「英雄」であった時代など、それこそ夢の中。

悪夢の中に狩人は存在し、狩人が存在する限り悪夢は——獸狩りの夜は終わらない。

どれ程優れた狩人も……いずれ醜い獣になるのだから。

狩人が罵倒されるのはいつものことだ。それでも足掻くのは無意味で、その行動に価値などないかもしれない。

でも、一つだけ。何かを成すことが許されるなら……。

儚い幻、導きの光……目も眩む欺瞞ぎまんの糸に縋つてでも、狩りを全うしなければならぬ。

青い月の光を纏う神秘の剣——かつての獸狩人の英雄、ルドウィークが振るつた月光の聖剣を手にして歩き出す。

人の魂に触れ、その性質を、姿を変える真^獣人……。この獣狩りの悪夢だけは終わらせよう。

宿儺が呪いにしか成れなかつたように、自分も獣にしか成れないのだから。

18 死血花（渋谷事変5）

渋谷駅の地下に、ひとりて歩く悠仁の足音が響く。その足取りは静かであったが、動くものが彼以外にいない空間では反響し、離れた場所にまで届いた。

他の術師たちはまだ来ていないのか、進む通路に戦闘跡や残穢は見当たらない。辺りを探りながら階段を下りれば、改札の前に並ぶ大勢の改造人間の前に出た。

悠仁が背中に担いでいた大剣を手取る。無造作に構えた大剣——月光の聖剣の光は失われ、刀身も幾分か細くなっていた。

水平にして身体の前に掲げた聖剣の柄に、上から押さえるように左手を添える。刀身にその手を滑らせれば、触れた部分から波紋のように青い月の光が広がった。

「君たちの目覚めが……有意なものでありますように」

独り言のように悠仁が呟き、両手で月光の聖剣の持ち手を強く握り直す。そうして横なぎに振るった刀身から、暗く輝く光波が放たれた。

再び静寂の訪れた空間で立つ悠仁に、血だまりを跳ねる水音が近づく。

「それ、一応人間なだけど……。これじゃあ、どっちが呪いか分からないね」

親し気に話しかけてくる声に悠仁が振り返れば、探していたツギハギ顔の呪霊——真人が立っている。

斬り伏せられた改造人間たちをわざと踏みつけて進む姿を見て、敵であろうと死者には敬意を表する狩人としての性質が嫌悪感を抱いた。

「真人……。オマエはなんだ？ どうして人の命をもてあそぶ？」

「自分だって殺してる癖に。いちいち殺し方とか気にするタイプ？ ……次から考えとくね」

安っぽい笑みを浮かべた真人が媚びた声で返す。瞬きと共に一呼吸を置けば、張り付けた笑みが軽薄なものへと変わった。

「ペラッペラのオマエにはペラッペラの解答をこたえ授けよう。虎杖悠仁。……オマエは俺だ」

その言葉に、悠仁の表情がわずかに動く。悠仁の様子を見て、真人は呪いの戯言だろうと言葉を続けながら、さらに煽り立てた。

「そいつを認めない限り、オマエは俺に勝てないよ」

「ベラベラと……よく喋るな。遺言か？」

意味のない質問だったと、悠仁は月光の聖剣を片手で構え直し、光を纏わないそれを真人に振りかざした。

——夜にありて迷わず、血に塗れて酔わず。

自分が獣ではないと証明したいならば、常に冷静でいなければならない。見逃さず、聞き逃さず、息を乱さず……心を乱さず。

そうすれば、獣呪いと戦っている間だけは、俺達はまだ狩人でいられる。

真人が撃ち出した攻撃を、悠仁は床に片手をつき、体勢を低くすることで躲す。

後ろの柱にめり込んだ、圧縮された改造人間が遅れて変形するのに合わせて、床に付いた手を起点に真人とは反対の方向へ跳んだ。

地面から両足の離れた悠仁を追い打つように、真人が自身を変形させて作った巨大な拳を伸ばす。

しかし拳は大剣を当てることで軌道を逸らされ、悠仁の左腕が真人の伸びた腕を捉えた。

そこで真人は、身体を引かれる前に掴まれた部位だけを切り離す。そして、距離の開いた悠仁がいるのとは逆の方向——まだ人間の残るエリアに向けて駆けだした。

悠仁の視界から外れた真人は、周囲を見回しながら歩いてきた人間たちの前にでた。自分の姿が見えていない二人のうち、ニット帽を被った体格の良い人間に狙いを定める。

相手が口を開いたタイミングで自身を小さくし、人間の外見は変えないまま、その魂の影に隠れるように身体に潜り込んだ。

程なくして駆けてきた悠仁が、一般人に気付いて走るスピードを落とす。そして距離をとったまま大剣を持つ手を背中に回した。

対面する二人からは大剣が見えていないのか、遠目では制服が血に塗れているのが見えなかったのか、悠仁に対して心配の声がかけられる。

その声には応えず、ニット帽の男から視線を外さずに歩いてくる悠仁の姿に、一般人である二人も異常を覚えた。

言い表せない不安感に、詰められる距離を空けようと二人が身を引いたとき、真人を間合いに捉えた悠仁が、流れるように剣をすべらせた。

得物が届く直前に、真人は無為転変によって盾を造り、身体サイズを戻して擬態を解く。

目の前で人間の形が崩れたことに動転しているもう一人を、蹴り飛ばすことで退避させている悠仁を見て、真人が笑みを浮かべた。

「勘がいいな。いや……どこかおかしいんじゃないの？」

擬態を見抜かれるのは想定していた。

改造人間と同じく、擬態するための側に選んだ時点で、あの人間の魂は変質している。それでも、だ。あの時の、一級だと名乗った七三術師でも、改造人間を殺すことに多少は動揺していたというのに。

虎杖は、さっきのが姿だけ取り繕った改造人間だと認識して、魂に一切の揺らぎを見せずに斬った。人間の反応としては異常。

とはいえ、宿儺と月の魔物——化物を二匹も宿して平然としている奴だ。正気なはずがない。

だが順平を助けたりと、他人に興味がない訳でもない。ここまで線引きがはっきりとしている奴は珍しいが……。

そういう奴ほど、崩れるときには一瞬で潰せる。

渋谷の地下へと続く階段を、ツギハギ顔の呪霊——真人の分身と、それを追う釘崎が駆け下りる。

釘崎は、補助監督である新田の警告を無視して渋谷に残ることを決めた。

確かに、特級呪霊たちを相手にするには自分は力不足。

だから、せめて術式の使えないツギハギの分身は祓ってから地下5階へ向かいたい。そのため地下へと逃げられるのは好都合だが、呪霊との身体能力の差で、数メートルの距離を離されていた。

階段を下りた先が突き当たりになっているのを見て、釘崎は極力スピードを落とさないように角を曲がる。

その矢先、ツギハギの呪霊がこちらへ向かってくる様子が視界に広がった。

方向転換の速さには少し驚いたが、十分に対処できる距離のため、釘崎は金槌を構えて向かい合う。

呪霊の後ろに、奴を追いかける虎杖が居るのを見て、自分を突破する方が楽だと判断されたのだと思うと、いつもより多く呪力が溢れた。

「避ける！ 釘崎！」

目の合った虎杖が、焦ったように叫ぶ。それを聞いて、釘崎は目の前にいる呪霊の呪力の圧を見た。

こちらへ手を伸ばす呪霊のそれは、先ほど対峙していた時の半端なものではない。すぐに上体をひねり、呪霊の手と自分の頭の間には振り上げた金槌を滑り込ませる。

頭への直撃こそ防いだが、走る勢いに乗った呪霊の手が顔の左半分に触れた。

左手に握る釘を手放した釘崎が、その手で自身の頬に触れる。

こちらへ駆けてくる虎杖を見て、こいつもこんな顔をするんだな、と場違いなことを考えた。

普段は根明と言われる虎杖だが、任務中は誰よりも無慈悲だ。怪我をした一般人が居ようと、どうなつていようと顔色ひとつ変えず、淡々と目的の呪霊を祓いに行く。

だから、虎杖の泣きそうな顔を初めて見て、それが自分に向けられているのだと思うと、なぜだか笑みを返していた。

「虎杖、皆に伝えて」

走馬灯、というやつなのだろう。釘崎は、自分の育った村でのことを思い出す。

嫌いな場所であ会った、大切な友達。ふみ……沙織ちゃん……。

今度は三人で会おうという約束が守れないことを、ふみは許してくれるだろうか。

そして、村を出るために来た高専であ会った、バカなことをやって笑い合える同期と担任……先輩たち。

尊敬できる人たちに出会えたのは、きつと幸運なことだ。

やるべきことも、やりたいことも残っている。伝えたいことだって、一言では足りない。まだ皆と話し足りない。でも……。

釘崎が虎杖の目を見る。引きつり始めた頬を、口角を無理やり上げて、いつも通りの

笑顔を手掛けた。

「『悪くなかった』！」

目の前で釘崎が倒れるのを見て、悠仁の顔から表情が抜け落ちる。強く握った左手には爪が食い込み、血がにじんだ。

悠仁が左手を胸の前に掲げると、一輪の花が握られる。ヒマワリに似た大振りのそれは、生気を感じさせない色合いだった。

血よりも鮮烈な赤を有する花芯に、病的なまでに青ざめた白い花卉——大輪の死血花。

悠仁の血を吸うように、握られた死血花が点々と赤く色づいた。

倒れる釘崎の顔に——損傷の激しい左目を隠すように添えれば、滴る血は混ざりあい、まだらになった白が少女を染める赤によく映える。

「釘崎……あとは任せろ」

花卉越しに釘崎の頬に触れる悠仁の指先からは、止まらない血がひと筋垂れていた。

立ち上がった悠仁に向かい、駆ける真人が拳を握る。

親しい仲間の死体を晒して、虎杖悠仁の魂を折る。この真人の考えは間違っていないな

かった。

——揺らいだ。

目の前で何人死のうと、何人殺そうと、涼しい顔をして立っていた虎杖の魂が。たった一人、あの女の術師が傷ついただけで。

拳に呪力を乗せる真人は、自身の才能に高揚し、その在り方を理解する。

自分こそが……「呪い」だ。

狩人にとって、相手の攻撃を正面から受けるのは悪手だ。獣の脅力りよりよくの前では、狩人など非力。

故に、普段の悠仁ならば有り得ない行動——正面に構えた大剣の腹に、真人の拳がぶつかる。

その呪力は黒い火花を伴い、月光の聖剣を半ばから折って弾けた。

勢いの衰えない拳が、悠仁を捉える。呪力で守るのが遅れたその身体は、十数メートルに渡って壁や天井を跳ねた。

黒閃を出した余韻に浸かることもなく、真人が倒れた悠仁に蹴りを加える。

その姿と表情は、呪いと呼ぶのに相応しかった。

「ドーセオマエは！ 害虫駆除とか！ 昔話の妖怪退治とか！ その程度の認識で渋谷

に来たんだろ？ 甘えんだよクソガキが」

真人の声が遠くに感じる。思うように呪力が出せない。身体を、腕を動かせない。

それでも、蹴られる衝撃で折れた聖剣を手放さないよう、悠仁は剣の柄を握る力を強くした。

その間に真人が、これは呪霊と人間が正しさを——上辺だけの正義を押し付け合う戦争だと語る。

「オマエは俺だ虎杖悠仁！ 俺もオマエも、何も考えずに人を殺す！」

そして呪術師は考える間もなく、何も知らない人間どもを助ける。

これは、呪いの本能と人間の理性が獲得した尊厳のうち、100年後に残るのはどちらかという戦いだ。

……本能と尊厳。抗い難い獣性と、狩人としての矜持。

思い浮かぶのは、獣狩りの夜だ。それは繰り返し、終わりのない悪夢。

だが「今夜」は繰り返せない。一度失えばそれは……目覚めることのない悪夢だ。

「そしてオマエは「人間の皮を被った化け物」だ。そんなことにすら気づけない奴が、どうして俺に勝てるよ」

攻撃の手を止めた真人が、息を吐く。

そして、殺した呪いや人間の数を数えたことはあるかと、悠仁に問いかけた。

「ないよな？ 俺も。……殺した数とか、マジでどーでもいいもん」

そこで言いたいことがなくなつたのか、腕をカマキリの鎌のように変形させた真人が、その腕を振り上げる。

「オマエの事も、そのうち忘れるさ」

そうして真人が鎌を振り下ろしたとき、手を叩く乾いた音が響き、真人の前から悠仁が消えた。

景色の変化に、自身が移動したことに気付いて振り返れば、先ほどまで自分の立っていた位置に、顔に傷のある大柄な男——東堂が立っていた。

京都高専の一年、新田あらた新は、東堂と共に渋谷駅の地下5階へとたどり着いた。

しかし目的の獄門ごくもんきょう疆が持ち去られた後だと知って狼狽える自分に、東堂が次の行動に切り替えるよう促す。

近くに来ているらしい兄弟を探すという東堂に、自分も気持ち切り替えて続いた。

上階に上がり、呪力の弾けた方向へ進めば、高専の制服を着た少女が倒れているのを見つけて駆け寄る。

血の気の引いた青白い顔の少女——釘崎の顔の左側に、ヒマワりに似た花が添えられ

ている。

手向けとして置かれた花なのだろうか。しかし彼女の胸は微かに上下しているのが見て取れる。

釘崎に処置を施すため、新田は添えられた花を除けようとして手を触れた。

血に塗れた花からひと筋の血が垂れれば、釘崎の肌に触れたその血が吸い込まれたように錯覚する。

それに驚き、目を凝らしていれば、鉄の臭いに交じって芳しい香りがすることに気がついた。

甘く誘うような香りではない。だが、どこか懐かしく、惹きつけられる不思議な香り。

記憶にない香りだ。しかし、あえて例えるならば、それは夜空に浮かぶ――。

「月の香り……?」

誰も知るはずのない香り。それでも、新田はなぜだかそれが正解だと思った。

19 獣と人間（渋谷事変6）

日下部の制止を振り切った順平が地下通路を進んでいけば、地鳴りと共に大きな呪力が地上で弾けた。

余波が及んだのか、天井に亀裂が入るのを見て、崩れるのを危惧した順平は近くの階段を上がり、地上を通って渋谷駅を目指す。

無数に血の跡が残る駅前の広場を通り抜けている間にも、何か大きな気配が動いているのが感じ取れる。

未熟な自分でも気配が追えるということは、それだけ強力な相手……特級相当が暴れているという事なのだろう。

そのことが気になりつつ、再び地下へと入ったところで、上半身にひどい火傷を負った長身の人物が歩いているのが目に入る。

覚束ない足どりの彼が手に持つのは、刀身に布を巻いた鉞だ。これには順平も見覚えがあった。

「七海さん……?」

声をかけるが、意識がはつきりとしていないのか、七海の反応はない。

彼が地下へ続く階段に向かうのを——まだ戦いに行こうとするのを止めるため、順平は式神の澱月おひつきでそっと包むように捕獲した。

七海は順平の式神である澱月に運ばれながら、真希と禪院直毘人が倒れている場所を伝え、共に向かう。

捕まるまで気が付かない程、五感がにぶっているのだ。この後は、二人と一緒に渋谷から離脱することになるだろう。

しばらく無言のまま進んだが、誰も順平に追いついてこない様子を見て、七海は彼に話しかけた。

「……吉野君も単独行動ですか?」

一瞬、肩を震わせた順平が振り返り、困ったように眉を下げる。

「あとで説教……ですよね? さつき叫んでいた虎杖君も」

先月の、会ったその日に悠仁と並んで説教を受ける順平の姿を思い出した七海は、状況を忘れて小さく笑みを浮かべた。

「七海さんの怪我が治ったら喜んで受けるので、これ以上の無理はしないでください。

……虎杖君を止められる人、あなたしかいないんです」

五条は笑って見ているだけだと言う順平に、状況が容易に想像できた七海は苦笑する。

表情を動かしたせいとか、感覚のなかった身体が鈍く痛んだ気がして、問題のある教師の救出は問題児に任せようと、七海は息を吐いて目を閉じた。

仰向けに倒れる悠仁の隣に、制服の前ボタンを外した東堂が立つ。

「起きろ虎杖^{ブラザー}！ 俺達の戦いはこれからだ！」

「東堂……」

声を聞き、その名前を悠仁が呼ぶ。閉じかけていた瞼を開いた悠仁は、折れた月光の聖剣を掴んだ腕でゆっくりと上体を起こした。

指も腕も、まだ動くことを確認する。視界の隅に、東堂の連れらしき人物が駆けてくるのを収めてから、悠仁は視線を床に向けた。

「俺は……もう、何のために戦うのか分からない……。宿儺の指を喰うのも、誰かの命を奪うのも、自分が選んだことだ。その事は後悔しない」

守るよりも、奪うことのほうが容易い。『人を助ける』なんて、傲慢な言葉だと分

かっている。

「だけど……どこへ行っても俺は！」

地下の下水道で、切り殺した獣の腹から血に塗れた白いリボンを拾い上げた。革手袋越しに触れた生暖かい感触が忘れられない。

手向けた花は赤く染まり、辺りには血臭が満ちる。いつも、そうだった。

「……目の前にいる少女ひとり……救うことができない」

それは、数え切れぬほど繰り返しても、変わらない結末。人々は夜明けを待たずに絶望し、狂い、血に酔っては消えていく。

「『狩人』だと気取っていても、所詮ただの人殺し……。奪う事しかできない、醜い獣なんだ」

真人の攻撃を新田との位置替えでかわした東堂は、蹴り飛ばした真人から遮るように悠仁の前に立つ。

視線は真人に向けたまま、背中越しに俯く悠仁に話しかけた。

「違うな虎杖^{ブラザー}。今のオマエは狩人でも獣でもない。俺達は『呪術師』だ」

その言葉に顔を上げた悠仁が、東堂の背中に目を向ける。

「しかし、オマエが狩人である事を……遺志を継いだという狩人達を誇りに思っている

のも知っている。虎杖^{ブラザー}、オマエが憧憬する狩人達は、本当にただの人殺しなのか？」

悪夢の中では、狩人に名誉なんてなかった。……いや、違う。狩人に名誉なんて必要なかった。

誰にも認められず、許されなくても……。皆、譲れぬ矜持を——意志を持って戦っていたのだから。

「狩人と呪術師が同じとは言わん。だが！ 所属も目的も違えど、お前達が皆“狩人”だと名乗ったように！ 俺とオマエと！ 釘崎！ あらゆる仲間、俺たち全員で“呪術師”なんだ！ 俺たちが生きている限り、死んでいった仲間達が真に敗北することはない！」

そこまで言い切った東堂が、一度、声のトーンを落とした。

「罪と罰の話ではないんだ。呪術師という道を選んだ時点で、俺達の人生がその因果の内に取りまき回すことはない。散りばめられた死の意味や理由を見出すことは、時に死者への冒瀆となる！ それでも！ ……オマエは何を託された？」

動きの邪魔になる上着を脱ぎ捨てた東堂が、一步前に入る。それは迷いのない、いつも通りの姿だった。

「今すぐ答えを出す必要はない。だが……答えが出るまで決して足を止めるな。それが、“呪術師”として生きる者達への、せめてもの罰だ」

走り出した東堂を見ながら、悠仁は床に膝をついている脚に輸血液を打つ。

相手の呪力が傷口に残っているせいかな、真人の黒閃を受けた部分は治りが悪かった。

……怪我をして、それが痛いと思っただのは久しぶりかもしれない。

そのまま立ち上がろうとした悠仁の背中に、側で控えていた新田の手が触れた。

傷口を薄い膜が覆う感覚と共に、痛みが引いていく。患部を動かしてみても、傷が開くことはなかった。

「いいですか、虎杖君」

悠仁に術式を施した新田の説明によれば、この術式の効果は治癒ではない。だが、止血はできるし、これまでに受けた傷が悪化することもない。

「あつちの子にも、同じ処置をしました。……弱つてはいましたが、呼吸も脈もあります。傷は深いけど、助かる可能性は0ゼロじゃない」

釘崎のいる通路を指さした新田の言葉で、陰っていた悠仁の瞳に光が灯る。

「俺は彼女連れて離脱します。でも、あんま期待せんといってくださいよー」

「……うんー」

新田を見送った悠仁が、今度こそ、折れた月光の聖剣を手にして立ち上がる。

もう、様式美だとか、戦っている自分の“姿”を気にする必要はない。自分が何に成るのかも、考えなくていい。

今はただ、目の前にいる獣^{呪い}を殺す。それが――。

東堂の手を叩く音が響き、悠仁の目に映る景色が変わる。

折れた聖剣が纏うのは、青い月の光ではない。

迫る呪霊^呪の拳に、刀身を走る黒い閃光がぶつかつた。

――それが、狩人として……呪術師として、自分にできる唯一のことだから。

真人の広範囲にわたる攻撃によって、地下通路の天井が崩れ落ちる。瓦礫の下敷きにされる前に、三者は戦いの場を地上へと移した。

急速に呪力を高めていく真人が二人を分断し、それぞれを術式で押し切ろうとするが、どちらもしぶとい。

この状態が続くなら、悠仁か東堂の片方は殺せたとしても、真人は祓われることになるだろう。

一度、攻撃の手を止めた真人が、二人の前に立って両腕を広げる。その身体から、先ほどよりも大きな呪力が溢れた。

二人を領域に引き込んだとしても、宿儺や月の魔物が出てくれば、真人は為す術もなくなってしまう。だから一か八か、五条に倣って0.2秒だけの……。

——領域展開 自閉円頓裏

瞬間、真人の目の前に広がったのは、やはり自分の領域ではなく、無数の獣骨が浮かぶ赤い水面。

頭上には巨大な背骨と、そこから伸びる肋骨のようなものが広がり、視界の限り続くそれらによつて、宿讎の腹の中に収められているのだと理解した。

正面に立つのは両面宿讎。その後ろには、数多の獣骨と共に傷だらけの月の魔物が積まれている。

以前、自分の領域は月の魔物によつて塗り替えられた。だが、漏瑚じょうこが宿讎の指を取り込ませた結果、この場所は宿讎が掌握することになったらしい。

「セーフ……つてことでもいいのかな。宿讎」

冷汗をひと筋垂らした真人が声をかければ、それを宿讎が一瞥する。

「少女については中々の見ものだった。……あれは小僧以外に殺させた方が面白い」

それがなかったら殺されていたのだろうか。腕を組み笑う宿讎は、もう目の前にいる真人の顔を見てはいない。

今の外の状況にも関心がなないらしい宿讎の様子に、悠仁を殺すつもりでいる真人は立場を忘れて苛立ちを覚える。

「……虎杖は殺す」

真人がそう呟けば、ようやく宿讎の眼に真人が映った。

「黙ってここで見ててくれ」

領域が閉じれば、真人に向けて悠仁が駆けてきているのが見えた。

迎撃しようにも、領域展開後は一時的に術式が焼き切れるため、無為転変の使用が困難になる。

こちらでも走り出してから、真人は自分の前を遮らせるように改造人間を投げた。

領域展開後は術式の使用が困難。ならば、時間差で変形するように、先に改造人間を仕込んでおけばいい。

タイミングを外せば無駄撃ちだが、その時はその時で問題ない、これはちよつとした賭けだ。

だが……。この状況なら、虎杖は仲間の安否よりも敵^俺を殺すことを優先する。

膨れ上がった改造人間の質量によって、悠仁の持つ折れた聖剣の刀身が防がれる。

押し込もうとしていた刀身が肉壁に包まれる前に、刃を引き抜いた悠仁は前に跳んで迫る障壁をかわした。

悠仁が東堂のいる方を振り返れば、片手を失くした東堂の腹に、真人の拳が入るのが見える。

黒い火花を散らした真人が東堂を追撃しようとすれば、東堂の胸から何か滑り落ちた。

ペンダントが地面に落ちる音に、一瞬、真人の注意が引かれる。

それは呪いとしての才能だけでは補えない、戦闘経験の未熟さから生じた隙。

迫る真人の右手を、東堂の右手が叩く。

瞬く間もなく突きを放つ体勢に入った悠仁が真人の前に現れ、折れたことにより取り回しの良くなった聖剣が黒い火花を散らした。

黒閃によるダメージで追い詰められた真人の姿が……魂の形が変わる。

——遍殺即霊体

それは攻撃のための手段としての変形ではない。

尾を生やした強靱な身体に、肘から伸びたブレードを牙とするならば、呪霊よりも獣と呼ぶのが相応しかった。

「ハッピーバースデーってやつさ。虎杖」

悠仁の振るった聖剣が、真人に触れて欠ける。強度だけではない。速さも、力も、変

身前より桁違いに高かった。

悠仁の攻撃が通っているようには見えないが、真人の攻撃は掠るだけで皮膚が千切れる。

ブレードを避けるために体勢を変えたことで、一瞬、悠仁の動きが止まった。

その隙を逃さずに悠仁の頭を右手で捉えた真人は、掴み上げた身体を地面に叩きつける。

地面が崩れた穴に落ちたことで真人の手が離れ、着地した二人の間に数メートルの距離ができた。

輸血液で回復できるような隙は無い。真人を倒すには……悠仁の最大呪力出力の黒閃をぶつけるしかなかった。

黒閃を狙って出せる術師はいない。だが、今、真人が対峙している悠仁には、「狙って出している」と思わせるだけの凄みがあった。

悠仁は次も黒閃を打つ。そう確信する真人は、すでに対策を済ませていた。

黒閃は、打撃との誤差0.000001秒以内に呪力が衝突した際に生じる空間の歪み。

それならば、サイズ変形でミートをずらし、「遍殺即霊体」を解いた部位を呪力で保護

すればいい。

そして、拳に呪力を集中させている悠仁の首をカウンターで落とす。

真人が左腕から胸、顔の半分にかけての変形を解いたのが、悠仁の瞳に映る。

常人では捉えられない速度で、青く輝く折れた月光の聖剣が真人の左腕に刺さって砕けた。

斬撃に付いていけなかった光波が暗く輝き、傷口を広げるようにぶつかる。

時間差でできた二重の衝撃により、真人の上半体が後ろに逸れたところで、悠仁は迫っていた真人の右手を屈んで避けた。

「呪霊よ、オマエが知らんハズもあるまい」

真人の耳に、離脱していたはずの東堂の声が届く。のけ反った体勢になっていたために、真人には東堂の自信にあふれた姿もはつきりと見えた。

「腕なんて飾りさ。拍手とは……」

東堂が腕を構える。位置替えがくる。

「魂の喝采！」

切断された腕を叩く、鈍い音が響いた。

真人は体勢を崩したまま、背中側に移動した悠仁にブレードを当てようとして——居

なかった。

パイプを切りつけ、東堂のブラフだったと理解したところで、腹に抉り取られるような衝撃がはしる。

黒い光とともにぶつかった悠仁の拳が——獣の爪のように指を立てた腕が、強化されていいない柔らかな内側を掴んだ。

拳の衝撃で、崩れた穴の外まで弾き出された真人は、何か大切なものが抜き取られた感覚を味わう。

両膝をつき、血の溢れる腹を押さえていれば、真人の頭上に影が差した。

「認めるよ。真人。……俺はオマエだ。俺はただ、目の前にいるオマエを殺す。それに意味も理由もない」

真人が顔を上げれば、凧いだ瞳の悠仁が立っていた。

「どこへ行つても、俺のやることは変わらない。……呪いを殺し続ける。それが、この戦いの俺の役割だ」

悠仁を見上げた真人の瞳が揺れる。そこに映るのは、何より人間らしい感情。

それを見た悠仁の眉間に、僅かにしわが寄った。

「……オマエ、俺のことを恐ろしいと思つたな？」

腹にあてた、真人の手が震える。人間に恐れられるべき呪いが、呪いを恐れるべき人間に恐怖を感じる。

これ以上の不条理を見つけるのは容易ではない。

「俺が〃人間の皮を被った化け物〃だというなら、今のオマエは……〃化物の皮を被った人間〃だ」

交差した視線を逸らすことができない真人を、捕食者——上位者の眼差しをした悠仁が見下ろした。

「真人……。お前の嫌いな……。人間になれたぞ」

#20 赤子（渋谷事変7）

後ろを向き、這うように走る真人を、少し距離を空けて悠仁が追いかける。

逃げる相手の背中では隙だらけだが、油断はしない。あと一息のところまで追いつめた者が、逆に殺されては笑い話にもならない。

間合いを測る悠仁が次の仕掛け武器を取り出そうとしたところで、真人の前方を袈裟を着た男が遮る。

「夏油！」

顔を上げた真人が相手の名前を呼べば、助けてあげようか、と返した男が、真人の反応を待たずに悠仁のほうへ歩み出た。

「なまゆ鯰が地震と結びつけられ、怪異として語られたのは江戸中期」

語り聞かせるように話を始めた夏油が、身体の前に掲げた手から何かを落とす。

「地中の『おわなます大鯰』が動くことで、地震が起こると信じられていたんだ」

短い説明の後、落とされたものが地面に吸い込まれると、悠仁を中心として地面に大穴が空く。

悪夢の中で何度も味わった落下する感覚に、少しでも着地の衝撃を抑えようと身構えるが、上半身だけが後ろへ引つ張られるようにして体勢を崩し、後頭部から地面に衝突した。

脳の揺れる不快感をこらえて急いで起き上がれば、地面に空いた大穴が跡形もなく消えている。

術式による幻覚かと、鈍る思考を巡らせたところで、相手が術式の開示を始めた。

呪霊操術。

低級の呪霊は元より、術式を持つ準1級以上の呪霊を複数使役することで、術式を解明・攻略されようと新しい呪霊を放ち対応する。

その手数が多さが強みであり、先ほどの大鯰も、数ある呪霊の中の一体に過ぎない。

「……勿論、術式を解明する間を与えずに、畳みかけるのもいいだろう」

夏油がそう続けると、彼の影から大百足の群れが飛び出す。悠仁が横へ転がり避けようとするれば、片手をついた地面の感覚が無くなった。

肩から崩れ落ちた悠仁を押しつぶすように、大百足が降り注ぐ。その様子を夏油が眺めれば、耳をつんざく悲鳴のような咆哮が響き渡った。

大百足の群れが吹き飛ばされ、中にいた悠仁が忌まわしい不死の黒獣の手——獣の咆哮を握って立ち上がる。

傷口から血を垂らす悠仁が手に握るそれは、獣の力を借りるための触媒だ。しかし先ほどの咆哮は……間違いなく本人の声帯から発せられていた。

「我ながら流石と言うべきか……。やはり宿儺の器。……いや、獣だな」

ひとり言のように呟いて笑みを浮かべる夏油に、背後にいた真人の手が迫る。

それを難なく避けた夏油を見上げて、生き延びるための光を掴み損ねた真人は冷汗を垂らした。

どうして自分が祓われる直前になって、夏油が間に入ってきたのか。この後どうなるのか……。真人は理解していた。

なぜなら呪いは……人間コイツらから生まれたのだから。

夏油に触れられ、真人がその形を変える。見る間に小さくなった姿は、手のひらに収まる黒い球体となっていた。

その球体——呪霊玉を掌で転がした夏油が、ふと思い出したように悠仁に話しかけた。

「そういえば……ローレンスには会ったかい？」

「……たが。」

思わぬ人物の名前が出たことで悠仁が動きを止めれば、困ったように夏油が笑う。

「知らないかい？　もしかして、獣になっていて誰だか分からなかったかな？　……彼ならきつと、恐ろしい獣の姿になっただろう」

知っている……。知らないはずがない。初代教区長、ローレンス。

血を恵み、獣を祓う医療教会の——血の医療と獣の病をもたらした医療教会の……初めでの聖職者の獣。

悠仁が見ていた悪夢よりも、ずっと前の時代を生きた者の名前だ。

目の前の男が、友を懐かしむように……どこか馬鹿にしたように警句を唱えた。

——我ら血によって人となり、人を超え、また人を失う。知らぬ者よ——かねて血を恐れたまえ。

それは、かつてローレンスが学んだビルゲンワースの、学長ウイレームの言葉。

なぜ、この男が知っているのかは分からない。だが、彼らのことを知っているなら……あの場所にもいたというのだろうか。

血に呪われた、狩人の罪の跡……業に芽生えた悪夢に秘匿された村。

ビルゲンワースの学徒たちは、ある目的のために漁村の民を蹂躪した。その目的は——

『頭蓋の内に“瞳”を探す』あの時代は良かった。自分の術式を見直す良い機会となっ

たし……「儀式」や「拝領」の考えも興味深かった」

ひと通りの話を終え、悠仁の態度が変わったのを見て満足したのか、夏油が呪霊玉を握りなおす。

「過去を懐かしむのはこのくらいにして……これからの世界の話をしようか」

何が面白かったのか、悠仁の前で男が笑い、術式の開示を続ける。

黙って聞いてやる義理もないが、無策で勝てる相手ではない。……今は、待つ。

呪霊操術、極ノ番「うずまき」。取り込んだ呪霊を一つにまとめ、超高密度の「呪力」を相手へぶつける奥義のようなもの。

強みであるはずの手数多さを捨てることになる技だが、その真価は準1級以上の呪霊を使用したときに起こる——。

「術式の抽出だ」

夏油が真人の呪霊玉を掴んだ右手を口元へ運ぶ。その口が開かれる前に、悠仁はスローイングナイフを鼻先に向けて投げた。

視線を遮るようにかざされた夏油の左手に、スローイングナイフが当たって砕ける。

使い捨てる武器のため強度は高くないが、悠仁の腕力で、呪力を籠めて投げているため威力はある。それでも、夏油の腕にはかすり傷すらついていなかった。

上空に位置取っていた術師が合図を出したため悠仁が駆けだせば、夏油が呪霊玉を飲

み込む。

狙撃手たちの攻撃を受け流し、横を向いた夏油の背中側に、居合の構えをとる水色の髪の少女が立った。

少女の手にした刀と、纏った呪力……あれではだめだ。あの刀では、相手を貫くことはできない。

三輪の振るった刀が根元から折られ、対峙する男の呪力が高まる。刀を振り抜いた体勢で固まる三輪を、間に入った悠仁が引き寄せた。

「極ノ番——『うずまき』」

押し寄せる呪力の塊に、澄んだ青いガラスを被覆し、工芸品のような装飾を施した儀式用の盾——湖の盾を掲げる。

狩人が盾を持つことは滅多にない。だが特殊な儀式において、儀式者を守るために用いられたその盾は……物理以外の攻撃を防ぐのに有効だった。

呪力が衝突して起こった風圧により、三輪を片腕に抱えた悠仁も後ろへ弾き飛ばされる。

盾に衝撃がなかったことを不思議に思つて前を見れば、先ほど上空から合図を出していた西宮と、歌姫。そして刀を構えて立つ日下部がいた。

悠仁との邂逅は、脹相ちようそうにヤーナムの血にまつわる記憶を——月上の魔物位者の啓示をもたらしした。

それにより得た知識を整理した脹相は、悠仁の跡を追った先の、地下で見かけたものを二人の弟に託す。

再び離れた壊相えさうと血塗けちずに異変がないことを確認して、瓦礫の山となった街を歩き、今の争いの中心となっているであろう場所に向かった。

“赤子”になれなかった自分たち九相図と、産み落とされた末弟の悠仁を想う。全ての上位者は赤子を失い、そして求めていた。

月の魔物は幸運だったのだろう。ヤーナムの地から遠く離れた場所で、悠仁赤子を得ることができたのだから。

だが、自分たち九相図の母は不運だった。

彼の呪われた地に足を踏み入れていないにも関わらず……上位者の子を孕まされたのだから。

そして悠仁は、永遠に血に呪われる。全てはあの男に起因している。

なぜ悠仁は呪いの王、両面宿儺の器となれたのか。なぜ上位者、月の魔物を宿しているのか。

特級呪物、両面宿儺の指。偉大なる遺物、3本目のへその緒——瞳のひも。

「瞳」は、ヤーナムの罪の象徴。その罪の犠牲者たちは呪詛の溜まりとなり、蹂躪した奴らが、その子孫が報いを受けることを望んで哭いている。

そして、墮胎された九相^他図^達と違い、悠仁は——。

術師たちと対峙する袈裟の男が、脹相の射程に入った。額にある縫い跡が、その面影が記憶にある憎むべき顔と重なる。

「加茂憲倫！」

脹相が名前を叫べば、こちらを振り返る男が笑みを浮かべた。

「やあ、脹相。……どうかしたかい？」

この男は呪詛に塗れている。そして……。

——赤子の赤子、ずっと先の赤子まで、永遠に血に呪われるがいい……。

「オマエ……赤子^{悠仁}に呪詛を継がせたな！」

仕掛けようとした脹相と夏油の間に、赤の混じった白髪を肩上で切りそろえた人物が割って入る。

苛立ちを隠しもしないその人物——裏梅が、呪力を高めながら脹相をにらんだ。

「引つ込め三下。これ以上私を待たせるな」

「どけ！ 俺はお兄ちゃんだぞ！」

乱入してきた赤血操術せつけっそうじゆつの使い手が悠仁を弟と呼び、弟のためなら命を張ると宣言するのを見て、困惑した。パンダが悠仁を見た。

「一応聞くけど、他人だよな？」

分かっていることを確認するための、パンダの質問。

他人か血縁かで言えば、九相図とは上位者の血で繋がった兄弟と言えるだろう。

しかし、それを認めていない悠仁は、その質問には答えなかった。

「あと少しで殺すか殺されるかしてた……」

「東堂といい、ヤバイフェロモンでも出てるんじゃないのか？」

「……月の香りのこと？」

「マジで出てるの？」

いつも通りなパンダの対応に、緊張で強ばっていた悠仁の身体が解れる。

そんな二人の様子を見ていた加茂が、夏油に仕掛けるタイミングを計るように声を掛けた。

なんとしても、五条の封印された獄門ごくもん疆きょうを奪い取る。

前に出たパンダが防御不能の激震掌ドクミンゲンテを発動しかけると、辺りを強烈な冷気が包み込んだ。

悠仁の身体の半分と少しを、氷の膜が覆う。同じく氷漬けとされた脹相の額に、裏梅が指先を伸ばした。

いずれは狩る存在だが……他人に横取りされるのは気に入らない。

すぐに力技で氷結から抜け出た悠仁が、脹相の身体に纏わりつく氷を蹴り砕く。

離れたところで術式に対処はできないが、蹴る勢いに任せて敵との距離をとった。

振り向きざまに呪力を籠めたスローイングナイフを投げれば、夏油の時と同様、裏梅に簡単に払われる。

その裏梅の足元で、地面に突き刺されていた火炎瓶——時限式爆発瓶が爆ぜた。

火炎瓶の炎は血を触媒としていないため、呪霊への攻撃手段とはなり得ない。それでも……多少ならば、相手の気を引くことぐらいはできる。

上空で氷結を逃れていた西宮が急降下し、呪詛師たちに向けて風の刃を見舞う。

しかし、それさえも片手で払われ、裏梅によって先ほどよりも大規模な氷の術式が展開された。

今度こそ動けなくなった三人のもとに降り注いだ無数の氷柱の脅威が、悠仁の目の前に現れた女性の力によって取り除かれた。

堂々と立つその背中が、尊敬できる仲間と重なる。

「あの時の答えを聞かせてもらおうか」

夏油の旧知らしい女性——九十九つくもが、どこかで聞いたセリフを彼に投げた。

「どんな女が、好みタイプだい？」

特級呪術師、九十九由基。彼女が現れたことで、呪詛師側に軍配の上がついていた状況が戻される。

それから九十九が語ったのは、世界から呪霊をなくす方法。

人類を一つ上の段階——未ネクストステージ来へと進めることになるプランに九十九が掲げたのは

……。

「呪力からの『脱却』だよ」

「違う。呪力の『最適化』だ」

夏油が異を唱えたことで、肩をすくめた九十九が同意を求めるように悠仁を見やる。

二人が語るのには、ある種の『進化論』。忌むべき組織を思い出す会話の内容に、悠仁は不愉快そうに顔を歪めた。

「進化論を掲げる奴らはクソ」

「身も蓋もないな」

九十九との会話を続ける中で、夏油が凍ったまま動けない脹相に目を向けた。

『情けない進化は人の墮落だ』人間の「可能性」を自ら生み出そうともしたが……それでは駄目なんだ。私から生まれるモノは、私の可能性の域を出ない」

医療教会は聖体の拝領——上位者の血を求め、取り込むことで、上位者と一体となることを目論んだ。

ビルゲンワースの学長ウイレームは脳の内臓を抱き、思考の次元を高めることで、上位者と同等の位置に並ぶことを望んだ。

これらは人間の愚かさ^愚を克服するためにたどり着いた、ヤーナムの進化論ともいえる。

そして、呪いの蔓延^{はびこ}るヤーナム。混沌としたあの街を駆ける一握りの者だけは、確かに黒く輝いていた。

「分かるかい？ 私が創るべきは、私の手から離れた混沌だったんだ」

地面に手をつき、抽出してあった真人の術式を発動する。

——無為転変

それは、予測していたよりも高い精度で発揮された。

呪霊操術で取り込んだ呪霊の術式の精度は、取り込んだ時点で成長を止める。悠仁との戦いが、真人の成長を促したのだ。

何をした、と険しい顔をする九十九に、余裕の笑みを浮かべて夏油が返す。

「マーキング済の二種類の非術師に、遠隔で『無為転変』を施した」

虎杖悠仁のように呪物を取り込ませた者。

吉野順平のように術式を所持しているが、脳の構造が非術師デザインの者。

「それぞれの脳を術師の形に整えたんだ」

前者は器としての強度を、後者は術式を発揮する仕様を手に入れる。

「そして……今、呪物たちの封印を解いた」

封印に使用していた紐を投げ捨てる。

脹相の血の毒にやられた裏梅の術式が解けたことで、話を遮り、挑もうとする

呪術師たちに溜め息をつきながら静止を促した。

夏油が配り、取り込ませた呪物は、彼が千年前から地道に契約した呪術師たちの成れの果てだ。

だが、彼と契約を交わしたのは術師だけではない。

「まあ、そっちの契約は、この肉体を手にした時に破棄したけどね。……ああ、でも……月の魔物にだけは逃げられてしまったな。『人智を超えた存在』として恐れられていただけはある」

愛されてるね、と悠仁を見る顔は、どこまでも軽薄だ。

「虎杖悠仁、君には懐かしいだろう？ ……これが、これからの世界だよ」

夏油の足元に拡がる影から、強力な呪霊の群れが溢れ出る。

獄門^{じくもん}疆^{きょう}を見せつけるように掲げて去る夏油を悠仁が追いかけてようとすれば、前を遮る

ように立った脹相が悠仁の腕を掴んで後ろへと引き戻した。

「聞いているかい？ 宿儺。 ……始まるよ」

姿の見えなくなつた夏油の声だけが、はつきりと聞こえる。

「再び ……呪術全盛、平安の世が ……！」

2 1 夜明け

夏油によって放たれた呪霊の群れが方々へ散り、付近から物音が消える。

やることがあると行って高専の面々から離れた悠仁を、九十九が呼び止めた。

川岸の遊歩道へ向かう二人に、ちようそう脹相が続く。

周囲に呪霊の気配がないのを確認した九十九が立ち止まり、術式を解いてから口を開いた。

「すまない。あの時、迷った。ここまで事態が進んでしまったのであれば、一度泳がせて様子を見るべきなのではと……」

続いて自分は味方ではなく、世界から呪霊をなくすために動いていることを告げる。

二人を振り返れば、隣への殺気を隠そうともしない悠仁と、九十九の話に大した興味
のなさそうな脹相が立っていた。

それを見た九十九が小さくため息をつく。長々と話すつもりはなかったが、より端的

に説明しないといけないらしい。

自分の判断により危険にさらした高専の仲間、責任をもって送り届けることを約束すれば、悠仁の目がこちらを向いた。

呼び止めた時の彼の様子から予想はつくが、あえて聞く。

「君はどうする？」

「俺、五条先生がいないと死刑でしょ？　ここに残るよ。でも……」

自分のことは気にしなくていいと、特に問題がないように話していた悠仁の言葉が詰まった。

「……あと二人、送り届けてほしい」

悠仁は協力者だった菜々子と美々子を思い浮かべる。宿讎に殺されることはなかったが、無数の呪霊が放たれた中で生きているだろうか。

他者の心配という、狩人らしからぬ思考をしていることに気付いていない悠仁に、ずつと黙っていた脹相が声を掛けた。

「それは悠仁が輸血した血の持ち主か？」

「そうだけど……」

悠仁が脹相と戦った際に、瀉血しゃけつの槌とあわせて使用した特別な血液。

投げ捨てられて割れた注射器に微かに残っていた双子の血の香りを、脹相は記憶していた。

「その二人なら地下で保護した。今は壊相と血塗えそうがついている」

「……何のつもりだ？」

不審がる悠仁に、脹相は努めて落ち着いた声で返した。

「裏なんてない。弟の平穩につながるなら、その友人を守るのも兄の務めだ」

弟達を連れてくるという脹相を見送って、九十九が悠仁に向き直る。

「随分と毛嫌いしているようだけど、彼と何かあったのかい？」

「……別にないけど」

自覚がなくとも、悠仁が「上位者の血を引く」呪胎九相図を殺そうとするのは……狩人が「上位者狩り」を行うのは自然なことだった。

特に、脹相に流れる血は九相図の中では一番濃く、上位者の死血からは莫大な——宇宙悪夢的な血の遺志が得られるのだから。

悠仁の煮え切らない態度を見ていた九十九は、「血への執着が強く、血を浴びて戦う」という噂を思い出した。確かに、目の前に立つ悠仁は異様なほど血に塗れた跡がある。

先程の男が本当に「兄」だというなら、その血を浴びることで自身の血を濃くしたい

のだろうか。

しかし……恐らくだが、この蠱毒じみた行動に、あの術師は関与していない。

「『兄弟』を嫌うのが、君の意思によるものでないなら……誰が意図したものでしょうね？」

そう告げれば、悠仁が額を撫でるように、そつと頭を押さえた。

この『誰か』は存在しないのだろう。血を浴びる行為自体も、時間をかけて刷り込まれた習慣に見える。

ただ、共通の敵を持つ者たちが潰し合うのを避けようとして……そんな虚言を吐いていた。

血の香りと人の気配に振り返れば、あちこちに擦り傷や焦げ跡をつけた菜々子と美々子が歩いてくるのが見える。

先導するように歩く脹相や、あとの二人を怖がっている素振りはない。

悠仁たちの隣に並んで立つ人物——先ほど合流した、九十九と行動を共にしているというラルウを見て、双子が数秒、足を止めた。

手の届く距離まで近づいた菜々子と美々子だが、うつむいたまま視線を合わせようとしない。

その様子を見て、仕方がないと言うように表情を緩めたラルウが、穏やかな口調で話しかけた。

「二人とも、久々に家族そろって……」一緒にご飯を食べる「気はある?」

最後に会った時と変わらない声を聞いて、菜々子と美々子に、家族と別れた日のことが思い出される。

みんな「夏油様が大好き」なんだと思っていた。

だから、遺志を継ぐだとか言つて、あの術師に夏油様の肉体からだが操られるのを容認しているのが許せなかった。

分かれて過ごしているうちに、みんな嫌いになれると思つていたので……。

——私達は、家族。いつかまた、どこかで……一緒にご飯を食べるのよ。

あの日には何とも思わなかった言葉が、今は暖かく感じられた。

ラルウに付いて離れようとする双子が、悠仁を振り返った。不安げに揺れる瞳に、出会ってから随分と変わったものだと笑みを浮かべる。

「まだ終わっていない。……大切な人を弔うまで、これからも協力するんだろ?」

悠仁が声をかければ、二人が唇を噛み締めて頷いた。

「ありがとう。虎杖」

それは、何に対しての礼だったのか。

誰かを心配するのも、されるのも、食事をしながら笑うのも、しばらく忘れていた感覚で……家族が恋しいと思えた。そんな時間だった。

今、悠仁を見上げる二人の瞳に映るのは、ほの暗い意志ではない。

少し震えた声で、菜々子が続ける。

「夏油様と家族と、その次に——」

数秒の間において、二人の声が重なった。

「——大好き」

家族のもとへ帰る。どこか、ためらうように歩みを進める少女達を見つめる。

悪夢の中で見たかったものが、そこにある気がした。

「ありがとう……」

誰にも聞こえないように呟いて、白み始めた空を目に映す。……もうすぐ「夜」が終わる。

「さて、と」

軽く手を叩いて注目を集めた九十九が、殺気を抑えた悠仁と、九相凶たちを見回す。

「みんな揃ったことだし、改めて聞こうか。……君たちはどうする？」

私と一緒に来るかい、と付け加えた九十九に、脹相は渋い顔をする。

悠仁は高専には帰らないと言っているが、「進化論を掲げる奴らはクソ」と言っていただけあって、九十九と行動する気もない。

壊相と血塗けちずの二人は特級呪物の受肉体として高専に認知されているため、気軽には動けない。呪霊に近い容姿の血塗けちずは、人間に紛れて暮らすのも難しい。

全員がここに残るのは無しだ。高専が悠仁の死刑執行人を送り込んでくるというなら、四人で動くのは目立ちすぎる。

それに……悠仁を殺すために選ばれた術師を相手にするのは、壊相と血塗けちずには厳しいだろう。

眉間に寄せたしわを増やす脹相に、壊相が声を掛けた。

「兄さん。私と血塗けちずは、しばらく彼女たちと行動するよ」

優先すべきは、一番危険な立場に置かれている末弟だと、移動中に聞かされた情報より導いた答えを告げる。

弟たちへの想いに優劣をつけられない兄には、時に口添えが必要だ。

表面上は殺気を抑えた末弟を見れば、関係ないという顔をして、自分たちが兄弟だと認識しているからだろうか。話が終わるまで律儀に待つつもりらしい。

兄を末弟のほうに押しやり、九十九に出発を促すため兄弟たちから目を離す。

「俺が殺すまで死ぬなよ」

物騒な言葉に振り向けば、悠仁が血塗けちずに向けて言い放ったのだとわかった。

「この弟、可愛くないなあ？」

もつともな意見である。しかし、十人兄弟の兄は強かった。

「心配ない。悠仁は少し拗ねているだけだ」

「あれ本気だよ兄さん」

二人で行かせて大丈夫だろうか、少し心配になりながら、壞相は血塗けちずの背中を押して歩き出した。

11月某日。立入禁止区域となった都内の片隅にある、ひとけのない広い玄関ホールに朝日が差した。

その光を背中に浴び、ホールの正面階段に腰かけた悠仁の呟く声が響く。

「……赤い月は近く、この街は獣ばかりだ。きりがない」

——もう何もかも手遅れ、すべてを焼くしかないのか。

獣獣が満ち、手に負えなくなった街は棄てる。人間のやることは、いつの時代も変わら

ないらしい。

そんなことを考えてから、ここ一週間ほど話しかけてこない宿儺に、悠仁が呼びかけた。

「宿儺はさ、久々に殺せて楽しかった？」

返事がないことには構わず、悠仁が言葉が続ける。

「別に責めてる訳じゃないよ。……殺された側からすれば、誰がどんな理由で殺したかなんて関係ない。俺もオマエも、やっていることは同じだ」

恨み、嫉み、愉悦、快感、報酬、愛情……。

そして遺志を継ぐという、弔いであり……力を得るための自己都合。

宿儺が愉悦のために殺したのだとすれば、自分は報酬のために殺したと言えるだろう。

改造人間——助からない相手だから殺したなんて、相手からすれば最悪の言い訳だ。

どんなに取り繕っても、自分の目的のために排除したことは変わらないのだから。

「それに……オマエの『殺し方』は優しいよ。……恐怖も痛みも、与える間もなく殺すから」

階段を下りてくる足音を聞いて、言葉を切った悠仁が立ち上がった。

今の協力者である脹相を振り返ることはせず、ホールの出入り口に向かう。

夜明けと共に呪霊を狩りに出る。寝ても覚めても、狩人のやることは変わらない。

「行こう……。今はとにかく、呪霊を減らさないと」

信号機ひとつ点いていない道路に踏み出し、辺りを見渡せる建物を目指して歩みを進めた。

2 2 愛する

道路に落ちる建物の影がいくらか短くなった頃、手近なビルの給水塔に腰かけた悠仁が、手のひらに収まる小型の望遠鏡越しに街を見下ろす。

持ち手の部分に細かな装飾が施されたそれはアンティークだが、影の奥に潜む呪霊を捉えるのに一役買っていた。

「東へ3ブロック先、低級が隠れたまま動かない」

きつと近くに大物がいると、少し弾んだ声で報告してくる悠仁を、脹相は屋上から見上げる。

たとえ殺し合った仲でも、利害が一致すれば協力するのが常識だと、非常識なことを言う悠仁の順応性の高さに脹相は困惑していた。

しかし、一週間ほどが過ぎた今では、懐いてくれているので深く考えるのをやめる。

もとより、狩人に一貫性を求めてはいけけない。彼らは気が狂いそうな惨状の中で、忌むべき獣を——獣となった愛する人を手にかけるのだから。

投げ出した足を揺らしていた悠仁が、ぴたりと動きを止める。

脹相がどうしたのかと問えば、のぞき込んでいた望遠鏡を仕舞った悠仁が、給水塔から飛び降りた。

「和装の人間がいた。たぶん術師。レンズの反射を見られたかも」

すぐに移動しようという悠仁に頷き、脹相は付近の地図を思い浮かべる。

「……地下道まで引き返すぞ。あれを抜けた先なら、横道も覚えているだろう？」

もし追いつかれて、撒くためにはぐれた場合は、昨日の地点で落ち合うことも決める。ひとりで乗り込んでくるような奴だ。腕には自信があるのだろう。目的も想像がつく。

どんな敵が現れたとしても、脹相には悠仁を逃がす隙ぐらいは作れる自信がある。

だが、わざわざ相手をするメリツトも無いため、できれば戦闘は避けたかった。

脹相が思索している間に、悠仁は日本刀のように刀身が薄く反った騎士剣——千景ちかげを取り出した。

相手が術師でも、それが仲間だと思ふ者たちであつても……己の命を狙うのであれば、悠仁が遠慮することはない。

悠仁の帯刀するそれは、金属製の鞘と持ち手にも装飾が施され、儀礼用のように見え

る。

しかし、「狩人を狩る」ために用いられてきたその刃には、血のにおいが呪いのように纏わりついていた。

悠仁が地下道から出たところで、急に現れた気配に獣狩りの短銃を向けて振り返る。地下道にかかる橋の上に立つのは、スタンドカラーのシャツに着物と袴をあわせ、髪を金色に染めた男。先ほど望遠鏡で見た術師だ。

呪霊が闊歩する街にも関わらず、彼——禪院直哉は武器の類を持っていない。その術式への自信と、かなりの距離が空いていた自分たちに追いつく速さ……。銃弾を避けられるリスクを考えて、悠仁は引き金を引くのをためらった。

「恵君おらんやん。俺が一番乗り？」

辺りを見回しながら話す直哉は、銃口が向けられていても余裕の態度は崩さない。

「そんなことあんの？ トロすぎへん？」

文句を言ってから、今気づいたというように短銃と刀に目をやった直哉が、悠仁の顔を見て鼻で笑う。

「これ見よがしに銃まで構えてみつともない。……ああ、君。珍しい呪具使うんやつて？ 得物それなかつたら戦えんのに術師やとか笑えるわ」

その馬鹿にした様子に、悠仁ではなく隣に立つ脹相が苛立った様子を見せた。

「俺が用あんのは恵君やから、ぶつちやけ君の死刑とかどーでもええねん。でもチョコマカされんのもアレやし……とりあえず足でも折つといたろかな」

隠すつもりのない害意にも、さらりと告げられた「死刑」という言葉にも、悠仁は言及しない。

しかし、伏黒に対して好意的に見えない男が、彼を捜している理由は気になった。

「伏黒に何の用だよ」

銃口を向けた短銃の引き金に指をかけて悠仁が問えば、視線を合わせた直哉が淡々と返した。

「死んでもらお思おもて。その前に、一筆書いてくれると助かるねんけどな」

乾いた破裂音を響かせた短銃を、瞬時に移動した直哉は二人の背中越しに見る。そして、まだ気づいていないらしい悠仁に声をかけた。

「恵君、君を——」

捜してるんやつて、と続けようとして、目の前に迫るものに気が付いて跳び退る。

思ったよりも射程の短かったそれは、宿讎の器が左腰に帯びた刀の鞘だ。

抜刀する間を惜しんで、鞘に入れたまま殴りにきたのか。

相手の評価を少しだけ上方修正しながら、直哉は振り向いた二人に攻撃を当てるために手を伸ばす。

先に、居合の構えをとる器。前のめりになる願先を狙おうとして……のけ反ってかわされた。

もう一人の拳は、予期したとおりに投射呪法を発動した掌で触れてフリーズさせる。

そこで一度、直哉は二人から距離をとった。

宿讎の器については、呪具のこと以外にも血狂いだなんだと噂が出回っていた。

対峙して分かったのは、気配に聴いこと。反応速度も、並の術師と比べればマシなほうだろう。

隣の黒髪の男も、器ほどではないが反応できている。

「もうちよい、速^{はや}うしてみるか……」

そう声に出した直哉が術式を発動しようとして、流れてきた不気味な呪力の圧に動きを止めた。

妙な気配に悠仁が顔を向ければ、道路を挟んだ建物の屋上に、白い服を着た人物がい

るのが見える。

ひと跳びで見上げる位置にある道路脇の柵に足をかけたその人は、柵ごと道路を踏み抜いて悠仁たちと同じ高さまで降ってきた。

抜き身の日本刀を手にするのは、以前、悠仁が先輩たちに見せてもらった写真に写っていた少年——特級術師の乙骨。

「誰が、虎杖君の……何？」

乙骨の問いかけに、険しい表情をした脹相が死刑執行人かと呟き、直哉は軽く両手を挙げて敵意がないことを示した。

乙骨と直哉が問答をしている間に、脹相が声を落として逃げるようにと悠仁に話しかける。

両手を合わせて胸の前に掲げた彼は、弟を救う方法しか考えていない。

金髪は自分が足止めするという脹相に、千景に手を添えて踏み込む姿勢になった悠仁が声をかけた。

「……死ぬなよ」

「悠仁に殺されるまでは、死なないさ」

めずらしく素直な弟の言葉に小さく笑った脹相が、指先を乙骨に向けた。

脹相の合図で駆けだした悠仁は、自分に遅れずついてくる乙骨の気配を察して、このまま走っても無駄だと判断する。

後ろを振り返る素振りを見せた悠仁に対して、追う形になっていた乙骨が刀を振り抜いた。

姿勢を低くして地面を転がることでそれをかわし、千景の鈍く輝く刀身を抜いた悠仁は、乙骨の攻撃に籠められた呪力が、彼の呪力量に見合っていないことに眉をひそめる。上層部に提出する、殺した証拠が欲しいだけなら、その余るほどに全身から立ち上っている呪力をぶつけて、足でも腕でも潰した後に首を取ればいい。悠仁と乙骨の呪力差なら、それが可能だ。

それなのに、わざわざ刀に呪力を籠めて、一撃で仕留めようとする理由なんて多くない。

“宿儺の器”は、千年生まれてこなかった逸材だと、五条が言っていた。つまり、こいつらも宿儺の器を殺して……殺した自分の肉体からだで実験がしたいのだ。

悠仁が引き抜いたばかりの千景を鞘に収め、その過程で鞘から赤い液体が噴き出したように見えた乙骨は目を見開く。

そうして再び引き抜かれた刀身は緋色に染まっており、それが彼の血で出来ているの

だと理解した。

使用者の血を這わせて形成する血刃は、自らをも蝕む呪われた業である。

その刃は振るわれる度に命を削り、ただ握っているだけでも2分程で死に至る。

しかしそれは、自死するより先に目の前のものを殺すという、強い意志の表れでもあった。

緋色の刃を受けた乙骨の日本刀が、それを握る腕が、飛び散る血と共に伝った衝撃で震える。

血刃によって底上げされた威力は、同格程度の術師なら吹き飛ばしているものだ。

動きの鈍った乙骨の握る刀身の側面を千景が捉え、三分の一を残して日本刀が折られた。

刀身が無くなったため、乙骨の胴体に攻撃を当てる隙ができた。

しかし、血を減らし過ぎた悠仁は千景を手放し、呪力を籠めた鞘で殴って距離をとらせる。

すぐに輸血液で回復しようとして……後ろから伸びてきた大きな手に身体を掴まれた。

リカと呼ばれる、乙骨の式神らしきものに抑えつけられ、手首から先しか動かせない悠仁は白い霧の溜まったフラスコ——感覚麻痺の霧を取り出す。

それを地面に投げ落とそうとして……伏黒に「毒も薬も使うな」と言われたことを思い出した。

確かに、約束を守って死ぬ奴はいるのだろう。だが約束を「守るため」に死ぬなんてふざけている。

気にせず劇薬と言われたそれを使おうとした悠仁だが——毒でも薬でもないものがあつたと気がつきやめた。

悠仁の身体を掴んだリカに、そのまま抑えておくよう頼んだ乙骨は、悠仁が何かを手にしたことに気付いて身構える。

五条から聞いた話では、彼は呪具以外にも効果の知れない薬品や呪物を複数持っているらしい。

急いで離れるように伝えようとしたリカの腕に、悠仁が何かを突き立てた。

リカの腕に刺さって砕けたのは、怪しげな緑色の液体、髄液を滴らせる鈍い刃——祭祀者の骨の刃。

それは一時的な認識の麻痺を引き起こし、斬りつけた対象を前後不覚に陥らせる。悲鳴を上げて悠仁を放したリカを見て、乙骨の目が据わった。

「……リカちゃんに何したの？」

「毒も薬も使うなって言われてるから——」

輸血を済ませた悠仁が千景を拾い上げ、乙骨の顔を正面から見返す。

「髄液」

直後、呪力の塊をぶつけられた悠仁の身体が後ろへ吹き飛ぶ。

先程から一変した呪力の圧に冷汗をかき、起き上がった悠仁の胸に折れた日本刀の刃が突き刺さった。

鼻腔をくすぐる花の香りと、頬に触れる硬く冷たい感触に目が覚めた。

悠仁が倒れていたのは古びた石畳の上で、近くには小さな屋敷と、見慣れた西洋の墓標が立ち並んでいる。

柔らかな月の光と、穏やかに揺れる白い花で満たされた“狩人の夢”は、二度と訪れることはないと思っていたため、とても懐かしく感じられた。

月の魔物の支配から逃れた悠仁は、死んでも夢で目覚めることはないはずだ。

だが、ここに居るといことは、乙骨に心臓を刺されて死に……まだ生きている？

立ち上がって辺りを見回せば、悠仁の名前が刻まれた墓標に祈る女性が目に入る。

風になびく、色素の薄い艶やかな髪に、陶磁器の肌をもつ“人形”。

喪服に似たドレスを身につけた彼女が振り返れば、美しく輝くガラス玉の瞳と目が合った。

「狩人様……。こうして誰かとお会いするのは、随分と久しい気がいたします」

そう語る彼女の言葉は事務的でありながら、寂しさと……。少しの喜びが混じっているように感じられる。

「このところ、ゲールマン様にお会いすることもなく……。使者たちは去りました。そして、狩人様も訪れない。……。私はもう、不要でしょうか？」

彼女を造った、この狩人の夢に囚われていた助言者ゲールマンは、悠仁が解放してしまった。

夢の支配者であった月の魔物も悠仁の遺志となり、新たな狩人を呼ぶことはない。

人形である彼女は、永い時間を美しいまま過ごしている。

しかし、彼女が寄り添う人間は朽ち、狩人は夢を見なくなる。

だから彼女は、自分が捨てられたと思うのかもしれない。けれど……。

夢を見なくなっても、悪夢の中で、彼女のことを覚えている狩人がいる。

彼女が触れた手の“温かさ”を覚えている。

彼女が狩人を愛するように――。

「狩人は君を愛している」

そんな陳腐なセリフを悠仁が吐けば、言葉の意味を噛み締めるように人形が呟いた。「愛……ですか」

その言葉が引き金となったのか、人形が思い出に浸るように語り始めた。

それは、幾人かの狩人から聞いたことがあるという、教会の「神と、神の愛のお話」。「でも……造物主は、被造物を愛するものでしょうか？」

そう言った彼女が、そつと自分の胸に手を当てる。

「私は、あなた方、人に作られた人形です。でも、あなた方は、私を愛しはしないでしょ
う？」

悠仁が否定の言葉を紡ぐより先に、彼女の次の言葉が発せられる。

「逆であれば分かります。私は、あなたを愛しています。……造物主は、被造物をそう作るものでしょう……」

屋敷を囲う柵を越えた先の花畑を踏みしめ、悠仁は一際目を引く大樹に足を向けた。

その大樹の下——悠仁が悪夢を繰り返す度に断頭された場所には、不機嫌そうに腕を組む宿儺が立っている。

「座れ、小僧。優しい俺が介錯してやる」

そうやって宿儺が指さした辺りに咲く花のすき間からは色の変わった土が覗き、流れ

た血の量を物語っていた。

「介錯」……それは、この夢に囚われた狩人を解放するための儀式だが、宿儺が素直にその役目を申し出るなんてありえない。

「……オマエ、あの人形が壊せないの知ってて言ってるだろ」

悠仁が言えば、宿儺が愉快そうに笑みを浮かべた。

それを見て質タチが悪いなど付け加えつつ、悠仁は宿儺の気が変わる前にやってもらおうと背中を向けて胡坐をかく。

何度壊しても、「夢だった」ように元通りになる人形。

造物主を愛するようにと造られた人形は、いつまでも、変わらぬ姿で主人の帰りを待ち続ける。

そう在るように、造物主は被造物を愛愛っしている。

そして、人間が呪いを、被造物をつくり出す造物主とするならば……。
確かに被造物は、造物主を呪愛してっているのだろう。

鋭い刃物を一閃したような音を聞いて両目を閉じれば、頸に微かな違和感を感じる。意識が遠のく直前に、風に乗って、優しい彼女の声が届いた気がした。

——いつてらっしやい、狩人様。あなたの目覚めが、有意なものでありますように。

#22.5 ブラボネタ&武器・セリフまとめ

■ ■ 1 ■ ■

本編には関係ないブラボネタ

■ 秘匿死刑

原作通り、杉沢第三高校で悠仁が五条に気絶させられていたら。

悠仁（儀式か実験が行われそうな狭い部屋。後手に腕を縛られて、椅子に固定される。ということとは……！）

五条「虎杖悠仁。君の、秘匿死刑が決定し……」

悠仁「秘文字の工房道具を頭にぶつ刺すのだけは勘弁してください！」

五条「えっ？」

悠仁「俺の頭蓋の内から“瞳”を探すつもりだろ！　へムウィツクの魔女^{ババテ}みたいに
！」

五条「しないよ?!　ってか、何それ怖……」



五条「悠仁、前に秘文字の工房道具？　がどうのって言ってたけど、それって何なの？」

悠仁「カレル文字っていう、ゲームで言うバフみたいなのを脳裏に焼く道具だよ」

五条「へえ……使い方は？（脳裏に焼く？）」

悠仁「普通に頭にぶつ刺すけど？」

五条「……………??？」

■冥さんと輝く硬貨

悠仁と冥冥で任務中。

冥冥「この辺りは入り組んでるね。何か目印でもつけておこうか」

悠仁「あ、俺いいの持ってるよ」

・輝く硬貨

特に輝きを放つ雑多な硬貨。

獣狩りの夜に商うものなど皆無だが、夜道に撒けば、道標くらいにはなるものだろう。

あるいは、遠い夜明けまで貯め込んでおくとうい。

悠仁が輝く硬貨を撒きながら歩き、冥冥がそのうちの金貨を一枚拾い上げる。

悠仁「冥さん？ 早く行こーよ」

冥冥「……虎杖君。君にとつて、この硬貨の価値はいくらだい？」

悠仁「価値？ うーん……。大量に手に入るけど買物にも使えんし、道標ぐらいかな？」

冥冥「……高専をやめて私と組むかい？」

虎杖悠仁：用益潜在力^{特級}◎！

■星の娘

懷玉編（五条たちの高専時代）。

夜蛾が五条と夏油に、星漿体^{せいしようたい}の少女の所在が漏れたと説明。

夜蛾「今、少女を狙っている輩^{やから}は大きく分けて2つ！」

1. 天元様の暴走による現呪術界の転覆を目論む呪詛師集団「Q」！

2. “星の娘”を信仰・崇拜する宗教団体。天元様と星漿体の同化の阻止を目論む「聖歌隊」！

夜蛾「『Q』は星漿体の殺害を、『聖歌隊』は誘拐を目的としている！」



五条「てかさー。呪詛師集団の『Q』は分かるけど、『聖歌隊』って何？ クリスマス

かよ」

夏油「『聖歌隊』は星の娘……つまり、星漿体の幸せを願うと言っている」

五条「はあ？」

夏油「前身は『盤星教』。非術師の集団だったが、厄介な呪物に手を出したらしくてね」
五条「それで方針が変わったって訳か」

夏油「今では呪術師や呪詛師だった奴らまで所属している。……警戒すべきだ」
出才チの思い付きだったけど、星の娘至上主義のやべー奴が盤星教を乗っ取ったら、意外といい結末になる未来が見えた。

誰も書いてくれないので、そのうち原作前スタートの救済話として書きます。

■呪術キャラクターナム

■ヘムウィックの墓地街

五条「街の中に墓ができたってより、墓石の間に家を建てたって感じ？ 墓の数が足りてないけど」

悠仁「だってここ、墓地ってより処刑場じゃん？ ギロチンに磔はりつけ」

五条「魔女の館ができるのも納得」



悠仁「そういえばさ、五条先生の六眼？　って綺麗だよな」

五条「……悠仁って腑モツ以外にも興味あつたんだ？」

悠仁「先生、俺のこと何だと思ってるの？　いや、へム目玉コレクターウィックの魔女ババアにモテそうだなって」

五条「なんで今、言ったの？」

■デスサンタ

釘崎「ちよつと、クリスマスのカップルに恨み持ってそうなやつがいるわよ」

順平「例えがピンポイントだね」

悠仁「あれは〃人さらい〃って言って……まあ……大体、五条先生かな」

五条「悠仁、僕のこと何だと思ってるの？」

伏黒「さすがに失礼だと思う」

五条「恵？」

悠仁「アイツ、青白い光出したら引つ張られる感じするし」

釘崎「……するわね」

悠仁「なんか赤黒いオーラぶわってするし」

伏黒「……してるな」

順平「怒ってる……?」

悠仁「ほら、五条先生じゃん」

五条「僕のこと何だと思ってるの?」

■ボツにしたネタ■

■渋谷事変、明治神宮前駅、バツタ（メモ書き）

※最初は「身を窶した男／恐ろしい獣」で考えていた。

※理性を獲得した呪霊と、理性を失わない獣。組み合わせは好きだけど、状況がしつくりこない&「虫」を採用したのでボツ。

バツタが食べているところに行く。

会話が成り立つほどの理性を得ている。

その呪霊の姿に、身を窶した男の姿が重なる。

——どこか、皆が避難しているような場所、知らないか?

遺体の前に膝をつく男がいた。

声をかけた時の驚く姿に、獣に怯えているのだと思った。

だがあの男は、人間を喰らう獣は……俺（狩人）に狩られることを恐れていたのだ。

——やっぱり、一人は何かと足りないからね……。

理性のあるものが……あんなことをするとは考えたくなかった。

■夏油のナマズ

※まだ悠仁と夏油の中の人の関係も知らないし、ビルゲンワースとも結びつけていなかった時のネタ

・啓蒙^{ゼロ}0

啓蒙は認識力とする。

啓蒙^{ゼロ}0だと、ボス：ヘムウィツクの魔女が眷属の召喚（無限湧き）を行わない。

啓蒙が高いと出現する敵は幻術だと解釈↓啓蒙^{バカ}0に幻術の類は効かない！

渋谷事変。夏油が大鯰^{おわなます}の術式を発動するが、悠仁には効かない。

夏油「〃啓蒙〃か」

暗示の類が効かない狩人は、いるにはいた。

夏油「幻術と認識しなければ……理解できなければ、何もないのと同じ」

狂気者共が、忌々しい。

夏油「まさに〃獣〃だな」

悠仁「なぜ知っている……？」

夏油「なぜだろうね？」

■ ■ 2 ■ ■

使用した武器、アイテムまとめ

1 悪夢からの目覚め

・ヤーナム：獣狩りの斧

2 呪霊狩りの始まり

・学校：ルドウィークの聖剣、獣狩りの短銃、スローイングナイフ

3 呪術師入門

・廃ビル：慈悲の刃

↓「静かに」のジェスチャーがやりたかった。

(慈悲の刃を使用する鳥羽の狩人が、「静かに」のジェスチャーを教えてください)

4 呪力の知覚

・少年院：落葉

5 先輩と修行と

・伏黒の回想(玉犬(白)破壊)：ノコギリ槍

・花御(戦わない)：爆発金槌、火炎放射器

6 悪夢は巡る

・戦闘なし

#7 協力者

・菜々子と美々子、順平の母救出：仕込み杖、獣狩りの短銃

#8 途方

・改造人間：葬送の刃、携帯ランタン

↓元人間が相手なので、「吊い」の意味を込めて。

・順平の家の残穢：呪詛溜まり、儀式の血、黄色い背骨、病巣の臓器

#9 萌芽

・真人：銃槍、青い秘薬

↓七海、順平と共闘するので、変形が少ない&リーチの長いもの。

・月の魔物が出た後：鎮静剤

#10 誤算（交流会1）

・交流会：トニトルス

↓帯電しなければ許されるはず。尖っていないやつ。

・京都校に囲まれたとき：ガトリング銃、石ころ

#11 忌避と容認（交流会2）

・東堂と会話中：匂いたつ血の酒

・花御（交流会）：トニトルス

1 2 狩人の血

・壊相、血塗：レイテルパラツシユ

↓釘崎を抱えて走る&血塗から庇う↓じやあ騎士剣。

1 3 暗合

・メカ丸破壊：教会の石槌、感覚麻痺の霧、（獣狩りの短銃）

1 4 淀み（渋谷事変1）

・蝗GUY：回転ノコギリ

↓「虫」といえば連盟員。連盟の長の武器。真人のセリフに「害虫駆除」

・地下5階から撤退：古い狩人の遺骨

↓夏油に「骨董品」って言わせたい。

1 5 月の香り（渋谷事変2）

・伏黒との会話：毒メス、白い丸薬

↓毒はダメって言われてない。

・（あべこべ（※書くとしたら）：パイルハンマー or ローゲリウスの車輪、大砲）火

力足りないか？

・脹相：瀉血の槌

- # 16 前徴（渋谷事変3）
 - ・ 脹相：瀉血の槌、彼方への呼びかけ
- # 17 英雄（渋谷事変4）
 - ・ 宿儺から悠仁に戻ったあと：月光の聖剣
- # 18 死血花（渋谷事変5）
 - ・ 改造人間、真人：月光の聖剣
 - ・ 釘崎への手向け：大輪の死血花
- # 19 獣と人間（渋谷事変6）
 - ・ 真人：月光の聖剣
- # 20 赤子（渋谷事変7）
 - ・ 夏油：湖の盾、獣の咆哮、スロージングナイフ
 - ・ 裏梅：スロージングナイフ、時限式爆発瓶
- # 21 夜明け
 - ・ 戦闘なし
- # 22 愛する
 - ・ 直哉：千景、獣狩りの短銃
 - ・ 乙骨：千景

・リカ：祭祀者の骨の刃

■残り右手武器■

・使いやすい

教会の杭、シモンの弓剣、ノコギリ鉋、獣狩りの曲刀、獣肉断ち

・使いどころを選ぶ

パイルハンマー、ローゲリウスの車輪

・武器……？

小アメンの腕、ゴースの寄生虫、獣の爪

※瀉血の槌は「武器……？」に分類していたが、使った。

■ ■ 3 ■ ■

原作とのキャラの相違点まとめ「重ねてるブラボキャラ」

ストーリー・設定は原作の展開に合わせて練り直すため、1話を書いた頃（13巻・宿儻vs.漏瑚）と変わってるものもあります。

■虎杖悠仁

「プレイヤー（月の香りの狩人）」

友達は大切にするけど、敵意を向けられたら殴られる前に叩き潰す。

属する組織にこだわりはないため、ルート分岐点はあった。ただし、真人と羅索けんじやくの術式は嫌いなので、彼らにつくことはない。

1. 6月に伏黒と出会ったとき、五条が来ていなければフリーの術師……に、なっているかは難しいところ。

宿儺の指を喰っているため、呪術規定に基づいた伏黒と敵対して呪詛師認定はありそう。

↓死滅回游があれば、参加は仙台結界コロニー。

フリーの術師なら、襲われないう限りは殺さない。呪詛師だったら、脱出のためにポイントを稼いでいる可能性が高い。

2. 原作通りに少年院で宿儺に心臓をとられた後、高専の「解剖台」の上で目覚めた場合、即死刑だろうと高専はやめる（逃げる）。

呪詛師として指名手配。家入も無事かはわからない。

3. 九十九が「進化論」の話をしていなければ、渋谷事変後は九十九と行動していた。
・悠仁や狩人に関するセリフ等は、呪霊たちのセリフからもらっている部分も多い。

悠仁の真人に対する感情は同族嫌悪かも。だからこそ、同じ存在になりたくないし、一緒にされたくない。

■菜々子、美々子

「血族狩りアルフレート／ヤーナムの少女」

生存が絶望的なレベルだった双子。二人の生存ルートが、ストーリー構成にも大きく影響している。

今後、登場するかは未定だが、別れ方には満足。

1. 悠仁と出会うタイミングが、宿儺に「腑抜け」と言われる時期を外していたら、呪師として排除

2. 渋谷で初めて悠仁に出会っていたら、呪師として排除

3. 悠仁に「血の施し」をしていなければ、宿儺が排除

※呪術師の友達↓今後、悠仁と殺し合う可能性が高いので、排除しない（伏黒の治療もあり）

※呪師の友達？↓殺し合う可能性は低いので、不愉快なら排除

4. 罫^{けんじやく}索の放った呪霊から身を守るか不明。呪師なので高専の保護は不可。

・脹相なら回収できるが、回収する理由がない。

（悠仁と関係があると分かれば、回収してくれそう）

・悠仁が双子の血を使えば、脹相が血のにおいを覚えて、後で回収してくれる可能性あり。

（脹相の行動が制限されてしまったため、預け先として壊相えそうと血塗けちずの生存必須）

・輸血液をやめて双子の血を使う理由がない。体力継続回復オースタミナ継続回復したい状況が必要。

↓瀉血の槌！ 脹相が一番驚く武器でもある。

・0巻での二人に対する伊地知のセリフ

「今ならまだ引き返せます。善悪の区別もついていないでしょう」

・アルフレートの師、殉教者ローゲリウスの言葉

「善悪と賢愚は、なんの関係ありません。だから我々だけは、ただ善くあるべきなのです」

・菜々子、美々子のセリフ

「大好きな人の肉体からだをゾンビみてえに弄ばれて、黙ってられるかって言ってるだよ」

「夏油様を、解放して下さい」

・アルフレートのセリフ

「偉大なる師が、穢れた血族、その呪われた地に囚われるなど。私は師を解放したい。列聖の殉教者として、正しく師を祀りたいのです」

■吉野順平

「重病人ギルバート」

狩人は「獣の姿になった友が襲ってくる」のを経験しているため、「改造人間にされた順平が襲ってくる」ことによる悠仁の心理的負荷が、それほど大きくない。

悠仁と菜々子、美々子が出会ったことにより、母も生存ルートに入った。その後、悠仁と対峙することもなかったため、生存。

原作の悠仁が持っていた非術師的な考え・意見を言うのも、彼の役割になっている。

・ギルバートのセリフ

「(咳き込み)なんで、私だけが……こんな……。神よ、あんまりではありませんか……。助けて、ください……。助けて……」

■ 与幸吉 (メカ丸)

〔

生存が絶望的だった人。(まだ寝ている)

悠仁と菜々子、美々子が出会っていないければ、原作通りになっていた。重ねるキャラはいないが、教区長エミリアの祈りは聞いてほしい。

聖血を得よ。

祝福を望み、よく祈るのなら、拝領は与えられん。拝領は与えられん。

密かなる聖血が、血の乾きだけが我らを満たし、また我らを鎮める。聖血を得よ。

だが、人々は注意せよ。君たちは弱く、また幼い。

冒流の獣は蜜を囁き、深みから誘うだろう。

だから、人々は注意せよ。君たちは弱く、また幼い。

恐れを失くせば、誰一人君を嘆くことはない。

■七海建人

「烏羽の狩人」

順平が生存したことにより、無茶な戦いに行くのを止める人ができたため、彼も生存。悠仁が尊敬も信頼もしている先輩呪術師。ただし、いつ敵になるか分からないので信用はしない。

「先輩が死ぬ（瀕死?）」というのは経験しているため、原作通りになっていたとしても、悠仁が叫んだりはしない。

- ・ 七海、真人戦でピンチの時に助けに来てくれる。
- ・ 烏羽の狩人、ヘンリック戦で助太刀してくれる。
- ・ 七海のセリフ

「どうしようもない人間というのは存在します。この仕事をしている限り、君もいつか人を殺さなければいけない時がくる。でも、それは今ではない」

・鳥羽の狩人のセリフ

「あいつは正気をなくしていた……自己防衛だったんだろうが……。あんまり、手を汚すんじゃないよ。あんたは狩人。獣を狩ればいいんだ。狩人狩りなど、あたしに任せとおけばいいのさ……」

■夜蛾正道

「最初の狩人、ゲールマン」

■パンダ／夜蛾の呪骸たち

「人形」

初期のころから、人形ちゃんの「造物主と被造物」の話はどこかで入れたいと思っていました。

呪いを、愛情を込めて作られた彼らが、せめて幸せな夢を見られますように。

・“人形”は涙を流す

「これは………なんででしょうか？ 私、私には何もありません。分からない、分からないのですが………温かさを感じます………こんなことは、はじめてです………」

「私は、おかしいのでしょうか？ ああ……。でも、狩人様。これは、やはり喜びなので
 しょうか。ああ……」

■真人

「ニセ女医（偽ヨセフカ）」

登場から退場まで、狩人の怒りに触れる&狩人に通ずる言動が多いと感じていまし
 た。

・真人、無為転変で人間の大きさを変える実験を行っている。

・ニセ女医、避難してきた住民を使って「治験」を行っている。（異形にされる）

・真人のセリフ

「一般人は形変えちゃうとそのうち死んじゃうけど……呪術師はどうかかな？」

・ニセ女医のセリフ

「(省略) ああでも、狩人の治験も、得難いものかしら……」

■ 罫索 けんじやく

「教会の上位医療者／ビルゲンワースの学徒」

最強のブラボネタ提供者。

呪胎九相図と赤子に始まり、頭蓋の内、進化論……。ブラボとの類似点を見つける度に「そういうことね!」となります。

羅索様のことは崇拜しております。

・教会の上位医療者

彼らは、黒い予防の狩人たちの上位であり、実験に裏打ちされた、血の医療と、獣の病の専門家である。

彼らにとつて医療とは、治療の業ではなく、探求の手段なのだ。

病に触れることでしか、開けない知見があるものだ。

■ ■ 4 ■ ■

忘備録用のセリフまとめ

伏線のなものと小ネタと気に入ってるセリフとか

(伏線のつもりじゃなかったけど、後から繋がるのがよくある)

(#1) ゲールマン「今は何も分からないだろうが、難しく考えることはない。君は、ただ、獣を狩ればよい」

(#19) 悠仁：今はただ、目の前にいる獣呪いを殺す。

(#2) 悠仁から爺ちゃんに対して：人を助けろだなんて、英雄ヒロイに掛けるような言葉だ

(#17) 宿儺：小僧、これでお前も英雄だな

(#3) 悠仁：慈悲の刃を装備して「静かに」のジエスチャー（烏羽の狩人の使用武器＆教えてくれるジエスチャー）

(#4) 宿儺：獣を狩る獣狩人が、呪いを祓う呪い呪術師になる

(#17) 悠仁：宿儺が呪いにししか成れなかつたように、自分も獣にししか成れないのだから

(#5) 悠仁：様式美にこだわること。それは自分が獣ではなく狩人だと——人間だと証明するためのものである。

(#19) 悠仁：もう、様式美だとか、戦っている自分の「姿」を気にする必要はない。自分が何に成るのかも、考えなくていい。

(#6) 悠仁が改造人間を見て：悪夢は巡り、そして終わらないものらしい。この術者を探さねばならない。狩りを全うするために。

(#17) 悠仁：人の魂に触れ、その性質を、姿を変える真人獣……。この獣狩りの悪夢だけは終わらせよう。

(#6)

七海「これはそこそこでは済みそうにない。気張っていきましよう」

悠仁「応！ 七海先生に、血の加護がありますように！」

七海「呪われた気分です」

※「血の加護がありますように」血族狩りアルフレートのセリフ

(#6) 順平：呪術師は人間のはずだが、悠仁からはどこか真人に似た気配を感じた。

(#18) 真人「オマエは俺だ虎杖悠仁！俺もオマエも、何も考えずに人を殺す！」

(#19) 悠仁「認めるよ。真人。……俺はオマエだ。俺はただ、目の前にいるオマエを殺す。それに意味も理由もない」

(#7) 悠仁「オマエが何を思って呪霊と関わったかは知らん。でも相手が順平の母ちゃんを殺すつもりだったのは事実だ。……これ以上、呪霊と関わらないって言うなら、俺が協力する。必ず祓ってやる」

(#7) 悠仁「でも、もし、まだ関わる気があるなら……俺に協力してくれ。ただし、こっちは死ぬかもしれない」

(#17) 五条救出に向かわない日下部に対して：順平「それが賢明だと思えます。正直に言つて、僕も行きたくはありません。……でも僕は、虎杖君に協力すると決めました」

(#8) 悠仁から順平に対して：自分を見る目に恐怖が宿る。悠仁はその人間らしさに安心して、順平に話しかけた。

(#19) 悠仁を見上げた真人の瞳が揺れる。そこに映るのは、何より人間らしい感情。
(恐怖)

(# 9)

真人「お前(悠仁)、魂の輪郭を知覚しているのか」

悠仁「知覚……？ 見えるなら殴れるし、血が出るなら殺せるだけだろ」

※狩人、幽霊だろうと見えていれば殴れる。

(# 10) 伏黒「虎杖は殴られる前に叩き潰すタイプですよ」

(# 11) 悠仁(加茂に対して)「誰にも殺されないよう強くなる。だから自分のために行動していたつもりなのに、気がついたら人を助けていて、友達も増えてるんすよ。……変な話ですよね？」

(# 17) 悠仁:(省略) 呪いを宿した狂人が。人を助ける？ 友達になれる？ 獣を殺すしか能のない……人殺しの獣風情が。語ることにすら烏滸がましい。

(# 13) 九相図の受肉体。上位者の血を継ぐものが他に存在している限り、悠仁の獣狩りの夜は終わらない。あれらは必ず狩る。

(# 13) 悠仁、高専保管の九相図に対して:「五条先生。こいつら埋葬したらダメなん？」

(# 18) 悠仁から真人に対して:斬り伏せられた改造人間たちをわざと踏みつけて進む姿を見て、敵であろうと死者には敬意を表する狩人としての性質が嫌悪感を抱いた。

(# 15)

脹相：弟（悠仁）に拾い食いなどさせん。

伏黒：こいつ（悠仁）、拾った薬を飲むのか……。

（#15）

伏黒「できれば殺すな。敵の情報を吐かせたい。……あと、薬は使うな」

悠仁「オツケー！ ……あ、毒メスは？ 白^解丸^毒薬もあるぞ」

伏黒「……なんで毒ならいいと思った？」

（#22）悠仁「毒も薬も使うなって言われてるから——髄液」

#23 業と願い（死滅回游1）

月明りのない夜の暗がりの中で、瓦礫に腰かけた乙骨は、焚火に照らされた後輩が目覚めるのを待つ。

その胸に空いた穴は塞がれているが、数時間が経った今も動く気配がない。

心配になった乙骨が呼吸を確認しようとしたとき、焼けた木の爆ぜる音を聞いて悠仁が飛び起きた。

乙骨の姿が視界に入ったことで身構えた悠仁だが、自身が拘束されていないのを確認して力を抜く。

相手の出方をうかがうように悠仁が見れば、乙骨は安心したように相手を崩した。

怪訝な顔をする悠仁に、乙骨は自分が悠仁を「殺した」経緯を説明する。

五条に何かあれば、同期と後輩たちのことを頼むと本人から言われていたこと。

特に悠仁には注意を払うよう頼まれていたため、自ら死刑執行人を名乗り出ることに

で、情報を断たれたり、他の執行人を立てられないようにしたこと。

その際、「虎杖悠仁を殺す」縛りを結んだこと。

「だから一度殺した。本当にごめんね」

「いや、じゃあなんで俺は生きてんだ？」

悠仁が疑問を投げれば、心臓が止まると同時に反転術式で一気に治癒したと乙骨が返す。

「君は『死んで繰り返す』呪いを受けているし……五条先生から『悠仁は殺しても死なないと思う』って聞いていたから、いけると思ってた」

さすがに殺されたら死ぬ。そう言いたかった悠仁だが、話の続きを促すために口をつぐむ。

確信がなくとも行動に移す思い切りの良さは、間違いなく五条の教え子だと言えた。

いずれ上層部に生きているとバレるとしても、とりあえずは死刑の執行済みで処理されるだろうと続ける乙骨に、どうしてそこまでするのかと悠仁が問うた。

「僕が大切にしている人達が、君を大切にしているからだよ」

乙骨が口にした言葉は、悠仁が人を助ける基準に少しだけ通じるものがあつた。

「僕も一度、身に余る大きな力を背負ったんだ。でも……背負わされたと思っていた力は、僕自身が招いたモノだった」

そう語る乙骨は、悠仁に自分の過去を重ねている訳ではない。悠仁の置かれた状況に同情して声をかけている訳でもない。

だが、目の前にいる後輩が抱える業を知るはずもない。

「君とは違う。君の背負った力は——」

「俺が望んで手に入れた」

乙骨の言葉をさえぎるように発された悠仁の声は、大きなものではなかった。

しかし、異論は認めないという強い意思が込められている。

「俺は善人じゃない。だからここに居る」

狩人である限り、獣を狩り続けた過去が赦ゆるされることはない。

しかし狩人は、獣に身を窺うかがす瞬間まで、狩人であることを辞められない。

だから目覚めては悪夢を彷徨さまよい、何度も殺し、殺されることになつても——何を犠牲

にしても、夜明けを迎えるのをあきらめなかった。

目の前に広がる現実を、認めたくない事実を受け入れ、進み続けるしかなかった。

「……俺は何人死ぬと分かっているよ、宿讎の指を喰っているよ」

自分の選択が引き起こした結果が悲惨であろうと、後悔はしない。言い訳をするつもり

りもない。

「俺が自分の意思で行動した。それだけが事実。だから先輩……狩人俺たちを否定しないで

よ

これは、数多の遺志を継いできた悠仁の、狩人としての矜持である。

刃を交えた時とは違う、悠仁の静かな威圧感に乙骨が言葉を詰まらせていると、少し離れて二人の様子を見ていた人物から声がかかった。

「オマエは狩人じゃない。呪術師だろ」

そう言って焚火の灯りが届く位置まで歩いてきた伏黒に、特に驚いた様子もなく悠仁が振り返る。

一度死んで目覚めたばかりだというのに、人のいる気配は察していたらしい。

「何してんだ。さっさと高専に戻るぞ」

今の高専の結界は緩んでいるため、直接顔を見られない限りは、処刑されたはずの悠仁が戻っても問題ないと伏黒が続ける。

だが、すぐには腰を上げようとしないう悠仁を見て、伏黒はため息をついてから言葉を変えた。

「……前に『友達を頼れ』って言ったの、嘘じゃないよな？」

——別に何でも話してくれとは言わねえけどさ……せめて頼れよ。友達だろ。

八十八橋の呪霊を一人で祓いに行こうとした伏黒に、悠仁がかけた言葉だ。

「卑怯な言い方なのはわかっている。それでも助けてほしい」

加茂憲倫が仕組んだ、呪術を与えられた者達の殺し合い—— // 死滅回游 //

「死滅回游に津美紀も巻き込まれてる。……頼む虎杖。オマエの力が必要だ」

死滅回游

<総則>

1. 泳者は術式覚醒後、十九日以内に任意の結界にて死滅回游への参加を宣誓しなければならぬ。

2. 前項に違反した泳者からは術式を剥奪する。

3. 非泳者は結界に侵入した時点で泳者となり、死滅回游への参加を宣誓したものと見做す。

4. 泳者は他泳者の生命を絶つことで点を獲得する。

5. 点とは管理者によって泳者の生命に懸けられた価値を指し、原則術師5点、非術師1点とする。

6. 泳者は自身に懸けられた点を除いた100得点を消費することで管理者と交渉し、死滅回游に総則を1つ追加できる。

7. 管理者は死滅回游の永続に著しく障る場合を除き、前項によるルール追加を認

めなければならぬ。

8. 参加または点^{ポイント}取得後、十九日以内に得点^{ポイント}の変動が見られない場合、その泳者^{プレイヤー}からは術式を剥奪する。

話を聞き終え、伏黒から視線を外した悠仁が立ち上がる。そして焚火に目を向けたまま口を開いた。

「……伏黒。俺はオマエのことを友達だと思っっているし、津美紀さんのことも助けたいとは思っている」

炎の揺らめきを瞳に映しながら、悠仁が淡々と続ける。

「でも、俺が津美紀さんを助けるのは、伏黒が助けたいと望んでいるからだ」

そこで言葉を区切り、身体ごと伏黒に向き直った悠仁が相手の顔を見た。

「だからもし、彼女が伏黒を傷つけるような状況になれば……」

「オマエの手は煩わせない。それでいいだろ」

にらむようにしながら語調を強める伏黒の目を見返して、悠仁が困ったように眉尻を下げる。

本当にそんな状況になっても、この友人は、大切な人を手にかけるなんてできないだろう。

でも、それでいい。……それでこそ、自分が助けたいと願う「友達」だから。

悠仁が協力する姿勢になったので、伏黒はこれからの行動を説明する。

死滅回游を取捨するためには、高専にいる天元に接触し、二つの回答を得なければならぬ。

1. 獄門^{ごくもんきょう}疆の封印の解き方

2. 加茂憲倫の具体的な目的と、今後の出方

だが、天元に会うには彼の「隠す」結界を抜ける必要がある。

高専にある寺社仏閣の扉——シャツフルが繰り返される、千を越える扉のうち一つだけが天元のもとへと繋がっている。適当に開けてたどり着けるものではない。

話の流れで九十九の名前が出されたため、進化論を思い出した悠仁が少し嫌そうな顔をしていれば、影からもうひとりの人物が現れた。

「その「隠す」結界とやら、なんとかなるかもしれないぞ」

脹相とは初対面の伏黒が警戒して下がるのを視界に入れつつ、悠仁が脹相に意識を向ける。

「どういふことだ脹相」

「以前、真人が宿儺の指と呪胎^{おれた}九相^た図を盗み出しただろう。それと同じことをする」

空が白み始めた早朝に、高専の構内を四人の影が過ぎる。

時間帯のせいか、渋谷事変後の対応に追われているのか、構内に待機している術師と鉢合わせることもなかった。

伏黒を先頭にして建物に入り、地下へ続く階段を下りる。そこにはテレビやソファといった調度品がそろえられた、清潔感のある部屋が広がっていた。

ソファでくつろぐ九十九と、その側に立つ黒髪の女性が視界に入り、部屋に足を踏み入れた乙骨が女性に駆け寄った。

「真希さん！ もう動いていいの？」

「応。問題ねえ」

そう返事をする真希の右目には包帯が巻かれている。長く、艶やかだった髪は項の辺りで短く切りそろえられ、顔や服から覗く腕には火傷の跡が広がっていた。

特級呪霊と戦った際に負った傷らしく、火傷の跡こそ残ってはいるが、体調に問題はないらしい。

二人の様子を見て、悠仁が再会してから切り出さずにいた話を伏黒に振った。

「……釘崎と順平は、どうしてる？」

その問いに、一拍を置いて伏黒が答える。

「吉野は怪我人の警護。アイツの術式、毒で足止めできるし、対打撃においては特級が相手でも耐えるからな」

だが、まだ4級術師のため、今の混乱した状況で外の任務に出される可能性は低いと付け足される。

「釘崎は絶対安静。……生きてはいるが、左目は治るか怪しい」

彼女のことは、そうなるだろうと思っていた。しかし真人の術式を頭部に受けたのだから、生きていただけでも喜ばしいはずだ。

それにしても歯切れの悪い伏黒の態度に、悠仁は表情を険しくする。

「他には？」

「……『瞳孔が崩れ、蕩ける』呪いについて、何か知っているか？」

予想していなかった言葉に、悠仁の目が見開かれた。

瞳孔が崩れ、蕩けた瞳。それは血に酔った狩人のものであり――。

「獣の病の特徴だ」

『獣の病』は、ヤーナムの地が受けた呪い。あの地の呪いと繋がりに、血の医療を受けた者――上位者の血を輸血した者だけが罹る、言うなれば風土病。

なぜ、ヤーナムと何の繋がりもないはずの釘崎が、獣の病に罹るのか……。

「釘崎というのは、『呪詛返しの術式』を持つ女か？」

割って入った脹相の言葉に、悠仁は八十八橋で釘崎の術式を受けたことを思い出す。

呪詛返しではなく、芻霊呪法。「共鳴り」は対象との『繋がり』を辿り、上位者の血を

引く——ヤーナムの呪いを受ける悠仁たちの魂に繋がった。

壊相えそと血塗けちずに流れる上位者の血は、それほど濃くない。だから八十八橋でのことは問

題なかった。

しかし先日、悠仁が大輪の死血花を釘崎の傷口に添えた。

悠仁が血の流れる手で釘崎に触れたことで、上位者のものと遜色ない血を注いでし

まった。

獣の病に罹る条件を満たしてしまったのだ。

五条はヤーナムのことを調べると言ったが、悠仁としては、無理に探す必要はないと

思っていた。

ヤーナムでの出来事は過去のものだと認識していたし、その地を見つけたとして、足

を踏み入れて呪いを呼び起こすリスクを負うつもりもない。

だが、大切な友達が呪いを受けたというなら……。

「……探さないと」

獣の病蔓延の原因を潰せ。それは狩人が悪夢から逃れる方法でもあった。

——さもなくば、夜はずっと明けない。

「落ち着け、虎杖。安心しろ……とは言えないが、まだ釘崎の瞳は蕩けていない。それに
“呪い”なら、解呪すればいい」

伏黒が肩を掴んで揺すれば、考えに沈んでいた悠仁の意識が戻る。

「五条先生なら、何か知っているかも……」

悠仁が小さく呟いたとき、話が落ち着くのを待っていた真希から声がかかった。

「何にせよ、天元様に会わなきゃ始まらねえってことだろ。恵、天元様の結界の話は」
その問いには脹相が答えた。

結界の扉から天元のいる薨星宮こうせいぐうの途中には、高専が呪具や呪物を保管している “忌庫
”がある。

忌庫には脹相の弟たち六人の亡骸があり、彼の術式の副次的効果で気配がわかるはず
だと。

九十九がその案に満足げにしていれば、真希は脹相を訝いぶかしげに見た。
「それはいいとして……コイツは誰だ」

真希以外の視線が自分に向いたことで、悠仁が遠慮がちに声を出す。

「たぶん俺の兄貴……かな」

なぜ疑問形なのかと真希は思ったが、深く聞くのも野暮だろうと納得しておく。

後ろで脹相が喜びの声をあげているのを聞きながら、一行は地上へ続く階段を上った。

脹相が結界の扉を開き、こうせいぐう 薨星宮へと続く昇降機を指して歩みを進める。

微かに月の香りのする建物の前で、脹相と悠仁が足を止めた。

脹相が弟たちの亡骸を回収したいと願うように、悠仁も彼らを弔いたいと思う。しかし、今は先にやるべきことがある。

後で迎えにくると、扉の向こうに声をかけてから、脹相は悠仁に続いて昇降機へと向かった。

「さあ皆。本殿はこの先だよ」

九十九の声を聞きながらトンネルを抜けるが、目の前にあるのは広い空間だけだ。……拒絶されている。

天元は現うつに干渉しないというのは聞いていた。

それでも九十九は、りくがん 六眼——五条が封印された今なら接触できると踏んでいたようだ
が、読みが外れたらしい。

仕方なく、全員が引き返そうと出口の方を向いたところで、誰かから声をかけられた。

「帰るのか？」

振り返った先に立っていた者の姿を見る。身体は人間の形に近いものだが、円筒状の頭には耳がなく、二対の眼が収まっている。

その「進化した」ともとれる姿をしている人物。彼こそが天元だった。

「初めまして。禪院の子。道真の血。呪胎九相図。そして宿儺の器……いや、「赤子」かな」

意外にも好意的に話しかけてきた天元に、緊張していた一同の力が少しだけ抜けた。

少年たちが加茂憲倫——けんじやく 縋索の目的と獄門ごくもんきやう 疆の封印の解き方を問えば、乙骨、九十

九、脹相の三人のうち二人が、天元の護衛として残ることを条件に出される。

天元は「不死」の術式を持つ人間。それなのに護衛が必要な理由として、縋索の目的が語られた。

縋索の目的は日本全土を対象とした、人類への進化の強制——人類と天元の同化だ。

天地そのものが自我と呼べる天元の魂は至る所に在り、12年前、星漿体せいしようたいとの同化に失敗してから進化を始めた今の天元は、星漿体以外——複数の人間との同化もできなくもない。

それは東京の惨状が、世界で再現されかねない状況に繋がるのだが、天元が同化を拒

否すれば済むだけの事。

しかし、進化を果たした今の天元は、組成としては人間よりも呪霊に近い。

「私は呪霊操術の……術式対象だ」

一同が衝撃に目を見張る中、天元は説明を続ける。

接触した時点で罫索に取り込まれる可能性を危惧すれば、護衛は必須。彼は天元に次ぐ結界術の使い手であり、術師としての実力も高い。

そして、罫索の手には「天元を取り込み操る」以外の、計画に必要な条件がそろっている。

「じゃあ、死滅回游は何のために行われるんですか？」

伏黒が質問をすれば、同化前の「慣らし」だと天元が返す。

死滅回游は泳者の呪力と、結界と結界で結んだ境界を使つて、この国の人間を彼岸へ渡す儀式だ。

総則にある「永続」は、あくまで儀式を中断させないための保険で、泳者が全員死ぬか、泳者が全員参加を拒否して死ぬまで死滅回游は終わらない。

泳者として参加するしかないなら、「ルールを追加できる」総則を利用して、津美紀を助ける方法を考える必要がある。

「五条先生の解放も並行しましょう。あの人がいれば、一人で全て片が付く」

きつと、釘崎の事も。

伏黒の言葉に、少年たちが天元を見やる。先に護衛として残るものを決めるよう促されたが、それには九十九と脹相が名乗りを上げた。

それを聞いた天元が礼を言い、空間の割れ目から片手に収まる小箱を取り出す。この箱が、五条の封印を解く鍵——獄門疆「裏」。

開門の権限は「表」を所持する繙索にあるが、「裏」をこじ開けることができれば、五条は解放される。

今、封印を解くためにとれる手段は一つだけ。

「死滅回游に参加している泳者プレイヤーの中に、『天使』を名乗る千年前の術師がいる。彼女の術式は……あらゆる術式を消滅させる」

彼女を捜して、協力を仰ぐしかない。

知り得た情報を整理し、今後のそれぞれの役割を決める。

九十九と脹相は、薨星宮こうせいぐうに残って天元の護衛。

真希は禪院家に戻って、呪具の回収。それが済んだら、パンダを捜して死滅回游の平定に協力。

乙骨は他の者が死滅回游に参加する前に情報を集めるため、さつそく結界コロニに入つて回游に参加。

そして伏黒と悠仁は、停学中の三年生、秤金次を捜して協力を依頼する。

先輩たちが続いて出口の前に来た悠仁が、残る三人を振り返る。

「脹相！　ありがとう。助かった」

そう言つて向けられたのは、互いの立場もしがらみも感じさせない笑顔だった。

「……死ぬなよ」

微笑みながらそれだけ返して、頼もしい背中を見送つた脹相は目を伏せる。

自分は祈る神など持ち合わせていない。だが、今だけは願う。

過去の業に縛られた弟に……呪いだけでなく……血の加護がありますように。

#24 期待（死滅回游2）

2018年11月10日 夜

栃木県 立体駐車場跡地 エレベーターホール

自動販売機に併設された年季の入ったベンチに一人で腰かけた悠仁は、野良の術師として出場する賭け試合の開始時間になるのを静かに待つ。

悠仁がここに来たのは、呪術高専三年、秤はかり金次きんじと星綺羅ほしきらに、死滅回游の平定への協力を要請するためだ。

しかし秤は、上層部ともめて停学をくらっている身である。高専関係者を見ていい気はしないだろう。

それに彼は、術師や呪詛師の参加する賭け試合の胴元であり、非術師も客にしている。呪術規定8条の「秘密」に抵触している秤に、悠仁と伏黒が身分を隠さず接触するのは困難なため、こうして悠仁が内側から探りを入れることになった。

そういう訳で、金を稼ぎたい野良術師を装った伏黒のハツタリが秤の部下に効き、悠

仁を賭け試合の選手として参加させることに成功したまでにはいい。

問題は、悠仁が敵かどうかの判断に迷ったら「一発、殴ってから考える」タイプであることだ。

今回もそのスタイルで通そうとする悠仁を伏黒が止め、自分たちが秤に協力を「お願い」する立場であることを強く言い含めたが、心配である。

今後の関係に響く問題を起こさないことを願うばかりだ。

試合の時間が近づいたため、秤の部下である男が悠仁のもとを訪れる。説明された試合のルールは2つ。

1. 逃げるな

2. 術式は使うな

それに対して悠仁が質問を投げれば、男も選手を邪険に扱うつもりはないらしく、答えが返ってくる。

秤に会えるかもしれない方法——試合中に実力をアピールできれば、八百長試合の役者として声がかかる可能性を示されて、悠仁は笑みを浮かべた。

「要は、派手に暴れりゃいいわけだ」

簡単で分かりやすい。

会話が途切れたところで、男が会場へ繋がる扉を開いたため、悠仁は肩を慣らしながら進み出る。

どんな相手にも油断するつもりはないが、体術で五条らのお墨付きをもらっている悠仁が苦戦する相手がいるとは考えにくい。

とはいえ、短時間で勝負が決まっては客が面白くないだろう。

攻撃は鋭さよりも、音と動きを重視。回避も大げさにして、空間を広く使い勝負を魅せる。

試合をシミュレーションしながら会場の中央に立つ悠仁と対峙したのは……とても見覚えのあるパンダだった。

危なげなく優勝を果たした悠仁は、綺羅羅きらららの案内で秤がいる屋上のモニタールームに通された。

ソファで脚を組みくつろぐ秤が、値踏みするように悠仁を見ながら口を開く。

「虎杖。『1日1時間、あることをするだけで月収100万円に……!!』って言われて、信じるか？」

典型的な詐欺の謳い文句から始まったのは、彼の価値観と、今後の計画の話。

普通に考えれば騙されてると分かるような詐欺に、それでも人々が騙されるのはなぜか？

それは、騙す側も騙される側も持つている、「ここで人生変えてやろう」という「熱」のせいである。

「熱」に浮かされて人は判断を誤る。だが「熱」がなければ人は恋一つできない。

「俺は「熱」を愛している」

そう語る秤の言葉に熱が入った。

よりダイレクトな「熱」のやりとりを感じられるのがギャンブルであり、生きること
はギャンブルだ。

そして、大きく張れない奴と、引き際を知らない奴から振り落とされていく社会において、ギャンブルをしていない人間はいない。

賭け事を嫌悪する人間が憎んでいるのは、賭け事ではなく「敗北」と「破滅」だ、と。

「俺は「熱」を愛している。「熱」は「賭け」^{ギャンブル}で「賭け」^{ギャンブル}は「人生」だ。……そして

「愛」とは「支配」だ。俺はゆくゆく、賭け試合^{フアイトクラブ}でこの国の「熱」を支配したい」

呪霊の存在が非術師たちに公表され、呪術界が揺らいでいる今の状況を、秤は事業拡大のチャンスと捉えた。

彼の計画を推し進めるには、とにかく優秀な駒がいる。

「虎杖。俺の『熱』に浮かされてみないか？」

秤が悠仁に提案したところで、テーブルに放り出されていた秤のスマホに着信が入った。

画面に視線をやれば、綺羅羅からのTEL番での着信——異常事態の合図。

スマホには手を触れず、秤は戸棚からグラスを2つ取り出す。

「……虎杖、何か飲むか？」

そう声をかけながら、秤は自分の熱が急激に冷めていくのが分かった。

「あ、じゃあ適当に。酒以外で」

テーブルを挟んで床に座った悠仁は、気を抜いているように見えて隙がない。

「なんだ。弱いのか？」

「俺、普通の酒じゃ酔わな……未成年っす」

「今さら気にすんなよ」

続けて軽口をたたけば、やはり緊張した様子もなく返してくる。

野良術師にしては高いレベルの戦闘スキルを有する、目の前の少年。連れの食えない

黒髪の男も、同じ年ぐらいだった。

見た目の年齢的に後輩——高専生か？

会話中に鎌をかけてみるが、本人への質問以外の話題では無駄口をたたかない。時間の無駄なので、質問を変えることにする。

「オマエ、何でここに来た？」

秤が問えば、数秒、言葉を迷うように黙ってから、悠仁が「お願い」を口にした。

「……大切な人たちを助けるために、呪詛師が始めた命がけのゲームに参加します。胴元にも、一緒に命を懸けて戦ってほしいです」

静かに、はつきりとした口調で淡々と言葉が紡がれる。

しかし秤には悠仁の声も、こちらを見る瞳の奥も、他人事のように冷めていると感じられた。

「金を出せません。でも全てが終わって、お互いに生きていたら……胴元の計画が成るまで駒として協力します」

ゲームとやらの内容も、誰の差し金で来たのかも不明だが、「お願い」の内容は嫌いじゃない。だが——。

「断る」

秤が端的に返せば、悠仁は表情を変えずに瞬きをひとつした。

「……分かりました」

食い下がることもなく引く悠仁の様子を見て、断った側であるはずの秤が苛立ちを覚える。

一ミリの動揺も見えない悠仁の態度を視界に収めながら、秤は手にしていたグラスの中身をあおり、空になったグラスを揺らした。

「虎杖。条件が不満だとか以前の話題だ。……オマエの言葉には「熱」がない」

綺羅羅が簡単にやられることはない信頼して、秤は悠仁たちの目的を探るために時間を割いた。だが、それらは全て無駄だったらしい。

さっさと虎杖を潰して、綺羅羅の無事を確認しよう。

そう考えた秤がグラスをテーブルに叩きつけ、術式を発動しようとした時、目の前には既に拳が迫っていた。

パンダと共に立体駐^ア車場^トの制圧を進めていた伏黒は、モニタールームのある屋上で警備に出ていた綺羅羅と鉢合わせた。

辛うじて綺羅羅の動きを止めた伏黒が、「お願い」を聞いてもらえるよう綺羅羅に頭を下げる。

渋々、相手に了承してもらえて一息をついたところで、モニタールームの扉が内側から吹き飛んだ。

「金ちゃん!？」

飛び出してきた男の名前を叫んだ綺羅羅の声を聞いて、伏黒の血の気が引く。

モニタールームの入口に視線をやれば、武器こそ出していないものの、敵を前にした時と同じ雰囲気悠仁が立っていた。

すぐに反撃にしようとする秤を、綺羅羅が呼び止める。

「金ちゃん! この子達、金ちゃんに助けてほしいんだって! 話を聞いてあげて!」
「知ってるよ! あと、殴られたの俺な!」

綺羅羅に言い返し、切れた唇の端をぬぐった秤は、彼の口調から、悠仁たちが後輩であることと、上層部の差し金で来た訳ではないことを確信する。

「オイオイ、俺らを頼りに来たんじゃないのかよ!」

殴り返しながら茶化すように言ってみたが、反応は良くない。飲み交わしていた時のように話ののるつもりはないらしい。

「今は敵だろ?」

同じく殴り返しながら答える後輩の瞳は、モニタールームで話していた時とは違い、爛々と輝いて熱がこもっている。

“大切な人たちを助ける”ためだとか、献身的な言葉を使っておいて、それ以外は排

除するのも厭わないつてところか。

「……イカれてんな」

さっきの冷めた「お願い」には期待を裏切られたと思ったが、早計だったかもしれない。い。

一応、初対面であるはずの後輩がどうして自分を頼りに来たのかと問えば、「先輩達がアンタを強いと言ったからだ」と返ってくる。

普通なら、つまらない答えだと一蹴するだろう。

だが、悠仁の場合は本当に、「大切な人たち」の期待に応えるために来ただけで、彼自身は秤たちに期待していない。

アンバランスな思考だ。

「いいか虎杖」

交えていた拳を下げた秤が、悠仁に呼びかける。

術師が術師にするお願いは、「一緒に命を懸けて下さい」が前提というのは、秤の持論だ。

「オマエの「お願い」は、その前提を満たしていた。……なのにテメエは！　なんで今、持つてる「熱」を！　あの言葉にのせられねえんだよ！」

その言葉にこめられた熱は、悠仁に期待していた。

「俺達に熱なんてねえよ」

そう呟く悠仁の声が響く。秤を見上げる視線の鋭さが増した。

ずっと前から、悠仁のやることは変わらない。……獣になるまで、獣を殺し続けること。それだけだ。

「だから俺が、先輩の『熱』に応えることはない」

あるいは、悪夢の初めには熱を持っていたかもしれない。

しかし、期待した分だけ辛くなった。

見えた希望よりも、大きな絶望が待っていて。

贈った愛は、抱えきれない悲しみを連れて帰ってくる。

全て、知ってしまった。

だから狩人は、誰にも期待しないし、希望は持たないのだ。……愛する人以外には。

今は友達だけが、わずかに残った熱を傾けられる存在なのだろう。

「気に入らないなら帰るからさ……邪魔だけはすんなよ」

その言葉には、確かに『熱』があった。

「マジで？ 五条さん封印されたの？」

綺羅羅に「熱くなってきた」ことを指摘された秤がそれを認め、後輩たちの話を聞く姿勢に入る。

再会してからやっと落ち着けたため、このタイミングでパンダから夜蛾学長が亡くなったことが伝えられた。

全員、夜蛾にはお世話になった身であるため、しばらく死を悼んでいたくなるが、彼らに立ち止まっている時間はない。

話し合いの結果、死滅回游の方を付けたら秤に協力することを条件に、秤も死滅回游の平定に協力することが約束された。

「よし。後は各々が出向く結界コロニーの割り振りだな」

乙骨は宮城だったかと確認するパンダに悠仁がうなずこうとすれば、リンゴンと鐘の音を発する、小型の式神のようなものが現れた。

鬮とくろをデフォルメした頭に、蛹マユの胴体。天使のような翼と悪魔の尻尾を生やしたそれが口を開く。

「泳者プレイヤーによる死滅回游へのルール追加が行われました！」

＜総則9＞

プレイヤー
泳者は他プレイヤー
——を参照できる
——名前
——得点
——ルール追加回数
——滞留結界^{コロニー}
——

#25 醜い（死滅回游3）

死滅回游へのルール追加を報告した式神のようなもの——泳者プレイヤーと死滅回游を繋ぐ窓口を名乗るコガネに、四人と一匹の視線が集まった。

悠仁に憑いていると言うコガネに泳者プレイヤーのリストを表示させれば、確かに悠仁の名前が載っている。

しかし、縋索けんじやくに術式や呪物を配られた者以外は、結界コロニーに侵入して初めて泳者プレイヤーになるはずだ。

宿儺が関係しているのか、疑問が浮かんでくるが、今、優先して考えるべき事はそれではない。

想定外の事態ではあるが、結界コロニーに入る前に情報が得られると思えば、コガネが憑いているのは好都合だ。

縋索の発言から、彼が用意した泳者プレイヤーは千人ほどいると考えられるが、参加者リストだ

けを見れば、すでに死亡している者の数が多いように見受けられた。

結界内での他泳者との遭遇率とタイムリミットを考えるなら、自分で得点を集めるよりも効率のいい方法がある。

100点以上を所持していて、ルール追加を行う気がない者を捜し、死滅回游を抜ける穴となるルールを追加させる。

それに、これができるば……人を殺さずに死滅回游を進めることができる。

現時点で100点以上を所持しているのは、鹿紫雲一と日車寛見。

追加したいルールは二つ。獄門疆の封印を解ける「天使」を捜しながら……この二人を狩る。

2018年11月12日 11時50分

東京第1結界の見える人気のない道を、悠仁と伏黒が並んで進む。

死滅回游に参加してからの行動の確認が終わると、間を置いてから伏黒が口を開いた。

「警戒すべきは、受肉した過去の術師だ」

そう言葉にした伏黒を、悠仁が横目に見る。

「理由は？」

「1000年前の連中もいる。100年や200年でも、命の価値が今とまるで違う。しかも術師だ」

彼らにとつて、戦つて死ぬのは当たり前。となれば、戦つて死ぬためにけんじやく罫索と契約した可能性もある。

鹿紫雲かしもや日車は過去の術師である可能性が高く、まともな交渉は期待できないだろう。

「津美紀と同じ、巻き込まれた現代の術師なら、むしろ積極的に情報交換できると思う」
コロニー結界に手が届く距離まで近づき、伏黒の話が終われば、黙つて聞いていた悠仁が少し顔を伏せて答えた。

「……俺は逆だと思っけど」

過去の術師たちにとつて、現代の、特に巻き込まれた術師たちを狩るのは容易い。

罫索が契約を持ちかける程には手練れなのだ。『得点』を稼げないために術式が剥奪される——死ぬ事態になるとは思えない。立ち回りを考えられる分、気持ちに余裕がある。

それに、過去の術師たちは、何か目的があつて死滅回游に参加しているはずだ。

戦うこと自体が目的ならば話は別だが、死滅回游から抜けられなければ、彼らも目的

を達成できない。

こちらに利用価値があると判断すれば、その価値がなくなるまでの間は協力するだろう。

だが、現代の術師たちは違う。

縄索と接触した際に寝たきりになり、高専に存在を確認されていた者を除いて、状況もほとんど分かかっていない。

誰かを殺したことも、誰かが殺される場面に居合わせたことも、ほとんどの者にならないだろう。

それでも、死と隣り合わせの状況にあるのは分かっている。

期限までに「得点」が必要なことも知っている。そんな中で。

「敵意のない人間が近づいてきたら……今しかない」って、思うだろう？」

二人の間に沈黙が落ちる。

「……そうだな」

伏黒が呟くように小さな声で返したタイミングで、目の前にコガネが飛び出てきた。

気を取り直した伏黒が、死滅回游への参加を宣言する。

何か考えている様子の伏黒の横顔を見てから、悠仁も結界コロニに向き直り、合図と共に足を踏み入れた。

結界コゴネに入ると同時に広がった青空と訪れた浮遊感に、悠仁は顔をしかめた。近くに伏黒の姿はない。

体勢を変えて街を見渡せば、あちこちで建物が崩れているのが分かる。

点々と血痕の見える地上からの高さは、200メートル程だろうか。呪力で身体強化のできる術師が、この高さで落下死したなら……。

落下地点のビルの屋上で、誘導灯が光る。

地上からの高さがビル群の屋上付近に差し掛かると、猛スピードで人影が突っ込んできた。

影と重なる瞬間、悠仁が左腕を振り抜く。

その手に握られているのは、指を差し込む穴が開いただけの、拳より二回りほど大きな四角い鉄塊——ガラシヤの拳。

ある種英雄的で、凄まじいとまで言われた女狩人の武器は、不安定な姿勢での使用にも関わらず襲撃者の攻撃を跳ね除け、相手の姿を見る間もなく弾き飛ばした。

屋上に着地した悠仁は拳に血が付いていないのを確認して、またコガネの反応がないため、ビルの天窓から建物内に落ちていった相手が無事だと判断する。

それなら日車の情報を聞こうと、開いた穴から襲撃者を追いかけてしようとした悠仁は、背後から迫るプロペラの音に振り返って石ころを投げた。

二人目の襲撃者もガラシヤの拳で沈めた悠仁は、目の前の気絶した男に一応、話しかける。

それなりに硬い相手だったため傷は大きくないが、頭部の負傷のせいか出血が多い。脳震盪も起こしているだろうから、しばらく目覚めないだろう。

落下地点で初心者狩りヒギナーをしていたようなので、今後ポイントを“譲って”もらうために石ころとガラシヤの拳を使用したのが、大した差はなかったかもしれない。

日車のことが聞きたかったと声に出してため息をついた悠仁は、足音を消さずに近づいてくる三人目の泳者フレイヤーを振り返った。

悠仁の名前を呼び、日車のことを知っていると行って近づいてきた若い男が、小さく手を振る。

「久しぶり。覚えてるか？」

「誰だ」

悠仁は悪夢に囚われていた影響で、中学以前の記憶が曖昧だ。故に、本当に知り合いなのか判断がつかない。

「……悪い。一方的に俺が知っているだけだ。オマエは有名人だから」

険しい顔をする悠仁に、中学時代に会ったことがあると説明した男——甘井凜あまいりんが、日車の居場所への案内を申し出る。

あやしきはぬぐえない。だが、あてもなく捜し回るよりは効率的かと、悠仁は甘井についていくことに決めた。

劇場前で立ち止まった甘井が、入口を指さして悠仁を振り返る。

「日車はこの劇場を拠点にしている。移動してなければだけど……」

「マジで助かった！　ありがとう！」

嘘だったら一発殴らせてもらおうと密かに考えながら、前に出た悠仁が扉に手をかける。

なぜか引き留めようとした甘井の声に後ろ手を振って、劇場の階段を駆け下りた。

舞台上に置かれた水を張ったバスタブに、スーツ姿の男が浸かっている。

ガラシヤの拳を握ったままの悠仁が客席を進んで舞台に近づけば、脱力しきっていた男が少し身を起こした。

悠仁を視認してから、服を着て風呂に入ったことがあるかと問う男に、悠仁がないな

と返す。

「思っていたより、気持ちがいい」

答えは気にせず話を続ける男が、近ごろの心境の変化を語る。

悠仁も男の反応は気にせず、とりあえず話しかけることにした。

「アンタ日車だよな」

「いかにも」

「話がしたい」

続けて交渉に入ろうとした悠仁を、日車が遮る。

弁護士である自分と話すには相談料がかかると、冗談まで言いだした日車の相手をすめるのに、悠仁はうんざりし始めた。

全てに返事をしていては埒が明かないので、話したいことだけ言い切ることにする。

「端的に。俺達は死滅回游を終わらせたい。……いや、殺し合いの強制を無効にしたい。そのためのルール追加に、日車の100点を使わせてくれ」

「俺も端的に言おう……。断る」

「それも冗談か？」

「いや？ 俺はただ、死滅回游に可能性を感じている」

時に法は無力だ。だが死滅回游の総則は、おそらく強制力をもって対象の人間に作用

する。

「告訴も公訴も必要ない」

真偽を争うこともなく、総則ルールを犯した者は物理法則のように罰せられるなら素晴らし
い。

「総則ルールに問題があるのは認めるが、回游の土台の結界術システムは見守りたい」

すぐ終わってしまつては困ると言う日車が、バスタブから身を乗り出して悠仁に視線
を合わせた。

「特に総則ルール二と八の、術式の剥奪ルールは一度見届けたい」

術式の剥奪。ペナルティとして「死」を科すことができるのか確かめたいと口にし
た男が、悠仁の反応を待つ。

日車の顔を見た悠仁が、静かな声で返した。

「世の中の全ての人間に、法律を総則ルールとして負わせたなら……」

物心もつかない幼子以外、ペナルティを受けない者はいない。

「人は皆……醜い獣なんだから」

少年の、予想していなかった少年らしくない発言に、日車は目を見開く。

「君は——」

「さっきの話の続き。言い方を変える」

今度は悠仁が、日車の話を遮る。

「100点を使わせろ。日車」

拳を構えた悠仁に、言いかけていた言葉を飲み込んだ日車が立ち上がる。

その後ろには、両目を閉じ、瞼を縫い留められた顔。天秤を模した身体をもつ式神が現れた。

「……気に入らない奴をブチ殺したことはあるか？」

スーツから水を滴らせながら、儀礼用の小型の木槌——ガベルを手にして舞台を踏みしめた日車が語る。

「思っていたより、気持ちがいいぞ」

言葉とは裏腹に、日車が表情に嫌悪感を滲ませるのを悠仁は確認する。まだ、殺すこととで動く感情があるなら……。

「人間らしくて安心したよ」

領域展開——誅伏賜死^{ちゆうぶくし}

日車は先手を取り、自分のペースに引き入れながら、目の前の少年に言い表せない違和感をもつ。

自分の話にうんざりしたりと、年相応な態度を見せていたかと思えば、ひどく冷めた

顔をする。

それに、先程の発言は少年が至って良い考えではない。“こういう事”に慣れていたとしても、納得ができない。

出現した手すりにガベルを打ちつけ終えた日車の前髪が、風で揺れた。

領域を展開すると同時に仕掛けてきていた少年の鉄塊の拳が鼻先で止まったことに、内心、冷や汗をかきながら、領域内では互いに暴力行為が禁止されていることを説明する。

少年が定位置に戻されたことを確認して、背後にいる式神——ジャツジマンに一審を始めるように促した。

虎杖悠仁は2018年10月19日

ダムを含む一般人の立入禁止区域に侵入した疑いがある

感情のないジャツジマンの声が、罪状を読み上げた。

疑似的な裁判が始まり、悠仁は「黙秘」「自白」「否認」のいずれかを行うことで、無罪を証明するように迫られる。

“証拠”の入った封筒を持つ日車を前に、悠仁はその日の記憶をたどる。

あれは五条からの極秘任務で、呪霊・呪詛師との内通者メカ丸——与幸吉むたこうきちの身柄を確保するものだった。

侵入した疑いがある、という事だが、高専の任務ではあらゆる場所への立ち入りが許可されている。

ジャツジマンが有罪を下した際に何が起こるのか不明だが、これなら問題ない。

「確かにダムには入ったけど、任務のためであって侵入ではない。だから無罪で！」

悠仁が「否認」したため、日車が「証拠」を開示する。

入っていたのは、立入禁止区域内への立入許可の申請者・団体のリストだ。

資料に目を通し終わった日車が、見せつけるように頭上に掲げた。

「本件当日、立入許可を出した申請者・団体はいない」

いないのかよ。

一瞬、無になった悠仁だが、考えてみれば五条の「極秘任務」だ。

周りに知られないように調査を進めていたなら、そもそも許可なんて取らないか

……。

「……それは何罪？」

「建造物侵入罪だ」

日車が答えるが、この領域内で判決を下すのは彼ではない。

二人のやり取りを静観していたジャツジマンが、日車のガベルを鳴らす音をきいて口を開いた。

『有罪』ギルティ 『没収』コンフィスケイション

その宣言と共に、領域が閉じられる。

何が「没収」されたのか、悠仁は考えるより先に舞台上の日車に向けて駆けだした。そして拳を構えて、呪力が練れないことに気づく。

多くの術師には死活問題となる事象だが、悠仁にとつては「悪夢」と同じ条件になっただけ。……問題ない。

ジャツジマンに術式を没収されたであろう少年が向かってくるのを、日車はガベルを投げることで牽制する。

それを左手に持つ鉄塊で難なく弾いた少年の姿を見て、日車はより一層、気を引き締めめた。

大槌を構える体勢に入ってから、少年の後方に飛んでいったガベルを自分の手元に出現させる。

持ち手がバット程度の大きさになるまで巨大化させ、呪力を纏ったそれを少年に振りかざした。

術師は術式が使用できなくなると勘が鈍るのか、基礎的な呪力操作もグダグダになることが多い。

だが、目の前の少年は自分と互角。いや、それ以上に渡り合っている。

その少年が、術式ではなく“呪力”を没収されていると気づいた日車は、彼の肉体の強度の高さ、そして呪力で身体強化した自分を大きくよろめかせるほどの拳の威力の高さに恐ろしさを覚えた。

自分との戦いで少年に不利な点があるとすれば、彼が“得点を稼ぐため”ではなく、“100点を使わせるため”に戦っていることぐらいだろう。

呪力なしの少年の攻撃に、自分を戦闘不能にするまでのものはないようだが、どちらかと言えば、呪力切れを起こす自分の方が不利だ。……その前に全力で潰す。

日車が呪力の出力を上げようとしたところで、距離をとった悠仁が口を開いた。

「やり直し！…もう一回だ」

悠仁が宣言すれば、再び誅伏賜死ちゅうふくくししが展開される。

日車の後ろに浮かぶジャツジマンが、二審の罪状を読み上げた。

虎杖悠仁は2018年10月31日

渋谷にて大量殺人を犯した疑いがある

自分の耳を疑った日車の手に、“証拠”が握られる。

そこに記されているのは、彼の中に巢食う悪魔——両面宿儺について。

虎杖悠仁は猛毒である特級呪物、両面宿儺の指を摂取しても耐えられるだけの肉体の

強度と、自我を保つ制御力を持っていた。

だが、渋谷では呪詛師と呪霊によりもたらされた複数の指を一度に取り込んだことで、その制御力を失う。

つまり……大量殺人を犯したのは「両面宿儺」である。

渋谷での宿儺の件について、「虎杖悠仁」を咎めるものはいなかった。

呪術界は悠仁を「大量殺人を犯した呪詛師」として裁いていない。

あくまで「宿儺を制御できなかった「器」」として死刑を言い渡している。

悠仁が改造人間たちを——人を殺したことを咎める者もいなかった。

呪術師は「殺す」ことが日常だ。

対象は呪霊だけではない。呪詛師といった人間が相手でも、「殺すしかない」時があると理解している。

おおよそ、人の道理から外れた考え方だが、呪術師にはそれが当たり前で……。

それが今、狩人でも呪術師でも、宿儺の器としてでもない。「虎杖悠仁として」人を殺したことを咎められている。

「……ああ。俺が殺した。これは嘘でも否定でもない」

悠仁の「自白」を聞いて、ジャッジマンが縫い留められていた瞼を開く。

『有罪』！ 『没収』！ …… 『死刑』！』

一審の時とは違い、大きく口を開けて声を張り上げたジャツジマンが宣言した。

日車の手に握るガベルが強く光り、その光が刀身を形成するように真っ直ぐ伸びる。

レイピアのような形状のそれは、「処刑人の剣」。

相手に「死刑」が科された際に、日車へと与えられる。それに斬られた者は……例外なく必ず死に至る。

ためらうことなく「自白」した悠仁に、その瞳に曇りがないことに、剣を構えた日車のほうが戸惑いを見せる。

先ほど少年は、「人は皆、醜い獣」だと言った。……同じだ。

自分は弁護士として、人の心に寄り添ってきた。それは、人の弱さを理解するということだ。

被害者の弱さ。加害者の弱さ。毎日、毎日。毎日毎日……。ずっと食傷だった。

——醜い

他人に歩み寄る度に、そう思うようになってしまった。

「君も分かっているんだろう……虎杖！ 人は皆！ 弱く醜い！」

ずっと冷静だったはずの日車が、声を荒げる。

「オマエがどんなに、高潔な魂を望もうとも！ その先には何も無い！ 目の前の闇はただの闇だ！」

正義の女神は法の下での平等のために目を塞ぎ、人々は保身のためならあらゆることに目を瞑る。

「灯りを灯した所で！ また眩しい虚無が広がっている！」

だから、そんな中で縋りついてきた手を振り払わない様に、自分だけは目を開けていた。と思っていた。

悠仁に会ってから初めて大声を出した、日車の感情が揺れる。

一息に距離を詰めてきた悠仁に剣を振るうが、迷いのある剣が当てられるはずもない。

すり抜けるようにかわして日車の後ろへ回った悠仁が、右手に握ったものを日車の額を狙って投げた。

どこに隠していたのか、野球ボールのように見えたそれ——石ころを避けるために、日車の体勢が崩れる。その隙を逃さず、悠仁の拳が振るわれた。

このまま鉄塊の拳を受ければ、その一撃、もしくは追撃によって戦闘不能にされるだ

ろう。

だが「処刑人の剣」は、斬りつけるだけで相手を死に至らすことができる。相打ち覚悟で剣を振り抜いた日車と、悠仁の目が合った。

——人は皆 弱く醜い

両面宿儺による、渋谷での大量殺人。

それを自分の罪として認めた少年の瞳と、記憶にある人々の瞳を照らし合わせる。人が醜いなんてことは、ずっと昔から気が付いていたはずだった。

だが、あの時は……。少なくともあの時——有罪ありきの、証拠もない無茶な判決を見せられるまでは……。

——他の生物にはないその穢れこそ、尊ぶべきだと思っていたんだ！

真つ直ぐに見据えてくる悠仁から視線を逸らすことができず、日車が目を瞑る。

握られていた「処刑人の剣」が消えるのを見て、悠仁も当たる寸前だったガラシヤの拳を消し、素の拳で日車の腹部を殴りつけた。

「刑法39条1項だ」

客席をなぎ倒して転がった日車が、声をかけてきた悠仁に告げる。

弁識能力と制御能力。いずれかが欠けていると心神喪失となる。

「渋谷での君は、宿儺に身体を乗つとられていた。つまり、制御能力がなかった」
「なんで宿儺のこと……」

「どうやって知り得たのかを聞こうとした悠仁が口を開く前に、日車が続ける。
「無罪だ。君に罪はない」

「そう言った日車が知っているのは、あくまで宿儺が関わった殺しについてのことだけ
だろう。」

「……違うよ。これは全て俺が望んで、自分が招いた結果だ」

欺瞞ぎまんの糸だと気づいていても縋り、蜜を囁かれれば誘われる。

「俺達は弱く、また幼い。でも……それが人間だつて、思っていたいでしょ？」

「……そうかもな」

身体を起ここした日車が、側にあつた椅子を引き寄せた。

「虎杖。オマエのような弱さを持つ人間が、まだまだいるのかもしれん」

先に座つた日車が、首を傾げる悠仁の隣にある椅子を指さし、座るように促がす。

「100点をやる」

「そう言った自分の正面に椅子を置こうとしている悠仁に、日車が話しかけた。

「虎杖。自分の意志で人を殺めたことはあるか？」

手を止めた悠仁の顔が、ゆっくりと日車のほうを向く。

「……あるよ」

「……そうか。最悪の気分だったろう」

それが、「思っていたより気持ちがいい」と、嫌悪感を滲ませながら語っていた日車の本心。

「人間らしくて安心したよ」

「^{プレイヤー}泳者による死滅回游へのルール追加が行われました！」

＜^{ルール}総則10＞

^{プレイヤー}泳者は他^{プレイヤー}泳者に任意の^{ポイント}得点を譲渡することができる